

米原町埋蔵文化財調査報告書Ⅳ

磯山城遺跡

—琵琶湖辺縄文早期～晩期遺跡の調査—

1986

米原町教育委員会

序

磯山城遺跡は竹生島を望む琵琶湖岸に所在する遺跡で、古くより浅井氏の出城跡と伝えられておりました。今般町上水道拡張事業に伴い事前に発掘調査を行ないましたところ、思いもよらぬ縄文時代の遺跡であったことが判明しました。

近江国とりわけ湖北地方は古くより文化が栄えたところであるといわれておりましたが、縄文時代の遺跡は数も少なく、調査例も皆無に近かったため、その実態は不明でありました。今回の調査結果はその実態を明らかにしたばかりでなく、当時の文化交流や生活環境をとき明すものとなりました。

出土した土器は縄文時代早期から晩期に至るもので、なかでも早期の土器群は滋賀県において最も古い土器であります。これら土器群は近畿地方では有数の出土例であり、今後の縄文文化を研究するうえでは、さけて通ることのできない重要遺跡となりました。

また、全国的にみて唯一の二ツ折り屈葬で埋葬されていた人骨がほぼ完全な形で出土したことは縄文文化を考えるうえで非常に有益な資料となるものと思われれます。

磯山城遺跡のこうした調査成果は近江の縄文文化に、より一層の貢献が出来るものと確信いたしております。なにはともあれ、わたくしたちの郷土米原町に貴重な文化遺産がまた一つ加えられたことを心からよろこびたいと思います。

最後になりましたが今回の調査に御協力いただきました関係者および地元関係者各位に対して厚くお礼を申し上げます。

本報告書が埋蔵文化財の保存と愛護に活用されるよう念じます。

昭和61年3月

米原町教育委員会

教育長 福田 定 観



埋葬人骨出土状況



高山寺式土器出土状況



高山寺式土器(外面)



高山寺式土器(内面)



縄文早期条痕文系土器
(八ツ崎Ⅰ式)

例 言

1. 本書は滋賀県坂田郡米原町大字磯地先に所在する磯山城遺跡について、昭和58年度から昭和59年度にわたって実施した発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、米原町上水道拡張第2次拡張事業に伴うもので、米原町水道課の依頼にもとづき米原町教育委員会が実施したものである。
3. 本調査は、昭和59年1月6日より昭和59年6月30日までの間実施した。
4. 出土遺物の整理作業及び報告書の作成は、昭和59年7月1日より昭和61年3月31日までの間実施した。
5. 調査の体制は下記のとおりである。

調査主体	米原町教育委員会	教育長	福田 定観
調査事務局	米原町教育委員会 社会教育課	課長補佐	相宗 又兵衛
	”	主 事	山形 寛吏
	”	主 事	鏝田 進
	”	主事補	池田 仁
調査担当者	米原町教育委員会 社会教育課	技 師	中井 均
調査補助員	山田 建, 立川 正明, 藤本 仁司, 磯崎 文博, 角田 与一。	ゆかり,	浜口 和宏, 千田 嘉博, 丸岡 寛, 大柳
調査作業員	塚本 芳夫, 堀川 敏夫, 中関 久松, 西野 学, 堀部 四郎, 中関 みつえ, 中関 すえ子, 林 美紀子, 加藤 まさ。		

6. 自然遺物等については、下記の方々に調査を依頼した。
人骨（人類学）……池田 次郎・北川賀一（京都大学理学部人類学教室）
”（法医学）……龍野 嘉紹（滋賀医科大学法医学教室）
動物骨……山本 好男（滋賀医科大学法医学教室）
石材産地分析……藁科 哲男・東村 武信（京都大学原子炉実験所）
¹⁴C年代測定……山田 治・小橋川 明（京都産業大学理学部）
花粉分析……徳丸 始朗（大阪府立三島高等学校）
火山ガラス……横山 卓雄（同志社大学地学研究室）
7. 出土遺物の整理、復元、実測に関しては上記調査補助員の他、下記の諸氏に協力を願った。
中川 和哉, 浜崎 悟, 千葉 真由美, 矢野 勝朗, 細川 英雄, 中林 滋宣, 池野 正代, 北川 由美, 吉沢 知恵子, 河内 亜子, 田中 慶希, 武井 信哉, 中村 公一, 落合 政久。
8. 本書をまとめるにあたって、下記の方々には種々のご指導、ご教示を賜った。記して感謝の意を表します。
兼康 保明, 田中 勝弘, 用田 政晴, 丸山 竜平（滋賀県教育委員会）。西田 弘（大津市文化財専門員）。江南 洋（近江八幡市立郷土資料館）。磯崎 文五郎, 酒井 源三, 河内 美代子（米原町文化財専門員）。泉 拓良（奈良大学）。増子 康真。片岡 肇（平安博物館）。家根 祥多（帝塚山大学）。玉田 芳英（京都大学大学院生）。森岡 秀人（芦屋市教育委員会）。和田 秀寿（龍谷大学生）。佐藤 宗男。松藤和人（同志社大学）。麻柄一志（魚津市教育委員会）。松島吉信（富山県教育委員会）

また、昭和60年1月13日に米原町中央公民館でおこなわれた、西日本縄文文化研究会に出席された各氏より多大なご教示を得た。

9. 遺物の写真撮影については、寿福 滋氏を煩した。
10. 本書に使用した2万5千分の1地形図は建設省国土地理院の承認を得た。
11. 本書の執筆は第Ⅰ章第2節、第Ⅱ章、第Ⅲ章（第2節第2項を除く）、第Ⅳ章、付論8を中井均が、第Ⅰ章第1節を横山卓雄が、第Ⅲ章第2節第2項を中川和哉がおこなった。
また、第Ⅴ章に関しては池田次郎、北川賀一、龍野嘉紹、山本好男、藁科哲男、東村武信、山田治、小橋川明、徳丸始朗、横山卓雄の諸先生より分析・鑑定結果の玉稿を頂いた。
12. 本書の編集は中井 均がおこなった。

目 次

口絵	
序文	
例言	
はじめに	1
第Ⅰ章 磯山城遺跡周辺の環境	2
第1節 自然地理的環境	2
第2節 歴史的環境	11
第Ⅱ章 調査の目的と方法	13
第1節 調査に至る経過	13
第2節 調査の目的	13
第3節 調査の方法	13
第Ⅲ章 調査の結果	15
第1節 遺構と遺物	15
第1項 1～4トレンチの遺構と遺物	15
第2項 A～Bトレンチの遺構と遺物	22
第3項 Cトレンチの遺構と遺物	37
第2節 Aトレンチ包含層出土の遺物	37
第1項 縄文式土器	37
第2項 石器	127
第3項 土師器	141
第4項 須恵器	141
第5項 土製品	144
第6項 木製品	145
第7項 金属器	147
第8項 自然遺物	147
第Ⅳ章 総 括	149
第Ⅴ章 付 論	157
1 滋賀県米原町磯山城遺跡出土の縄文時代早期の人骨について	

- 2 磯山城遺跡出土人骨鑑定
- 3 磯山城遺跡出土獣骨鑑定
- 4 磯山城遺跡出土のサヌカイト, および黒曜石の石材産地分析
- 5 磯山城遺跡の¹⁴C年代測定について
- 6 磯山城遺跡の花粉分析
- 7 磯山城遺跡の粘土から発見された火山ガラス
- 8 滋賀県下出土の押型文土器

挿 図 目 次

第1図 日本海指数と温雨図…………… 3	第19図 第3トレンチ出土土器実 図…………… 22
第2図 近畿地方における日本海指数…………… 4	第20図 Aトレンチ検出遺構図……………22・23
第3図 滋賀県植物地理区…………… 5	第21図 AトレンチS B 01実測図…………… 24
第4図 米原町入江内湖周辺の地質図…………… 7	第22図 AトレンチS B 02 (右), S B 03 (左) 実測図…………… 25
第5図 曾根沼ボーリング柱状図と砂・火山ガ ラス含有量並に ¹⁴ C年代…………… 8	第23図 Aトレンチ遺構埋土出土土器実測図(1) 26
第6図 氷河中の酸素18 (¹⁸ O) の変化から復元 した過去の気候…………… 9	第24図 Aトレンチ遺構埋土出土土器実測図(2) 27
第7図 ウルム氷期以降の森林植生の分布推定 図…………… 10	第25図 Aトレンチ南壁土層断面図…………… 28
第8図 周辺遺跡分布図…………… 12・13	第26図 Aトレンチ縄文土器出土状態実測図… 29
第9図 遺跡周辺地形およびトレンチ配置図… 14・15	第27図 Aトレンチ埋葬施設 (S×1) 検出状 態実測図…………… 30
第10図 第1トレンチ平面図…………… 15	第28図 Aトレンチ埋葬施設 (S×1) 北壁 (A—B) 土層断面図…………… 31
第11図 第1トレンチサブトレンチ北壁 (A— B) 土層断面図…………… 16	第29図 AトレンチS×1周辺出土縄文式土器 実測図(1)…………… 32
第12図 第1トレンチサブトレンチ北壁 (C— D) 土層断面図…………… 16	第30図 AトレンチS×1周辺出土縄文式土器 実測図(2)…………… 33
第13図 第1トレンチ包含層出土遺物実測図 17	第31図 AトレンチS×1周辺出土縄文式土器 実測図(3)…………… 34
第14図 第1トレンチ高山寺式土器出土状態実測 図…………… 17	第32図 Bトレンチ検出遺構図…………… 35
第15図 第1トレンチ紫暗褐色土層出土押型文 土器実測図(1)…………… 18	第33図 BトレンチS B 04実測図…………… 36
第16図 第1トレンチ紫暗褐色土層出土押型文 土器実測図(2)…………… 19	第34図 Bトレンチ包含層出土縄文式土器実測 図…………… 37
第17図 第1トレンチ紫暗褐色土層出土押型文 土器実測図(3)…………… 20	第35図 BトレンチS B 04埋土出土土器実測図 38
第18図 第3トレンチ3段目北壁断面図…………… 21	第36図 Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器 (早 期) 実測図(1)…………… 48

第37図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)……………	49	第56図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(4)……………	73
第38図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(3)……………	50	第57図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(5)……………	74
第39図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(4)……………	51	第58図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(6)……………	75
第40図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(5)……………	52	第59図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(7)……………	76
第41図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(6)……………	53	第60図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(8)……………	77
第42図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(7)……………	54	第61図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(9)……………	78
第43図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(8)……………	55	第62図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(10)……	79
第44図	Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(9)……………	56	第63図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（前期）実測図(11)……………	80
第45図	Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)……………	58	第64図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（中・後・晩期）実測図(12)……………	81
第46図	Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)……………	59	第65図	Aトレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)……………	88
第47図	Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期）実測図(3)……………	60	第66図	Aトレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)……………	89
第48図	Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(4)……	61	第67図	Aトレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(3)……	90
第49図	Aトレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(1)……………	63	第68図	Aトレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器（前期）実測図(4)……………	91
第50図	Aトレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(2)……………	64	第69図	Aトレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器（中・後・晩期）実測図(5)……………	92
第51図	Aトレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(3)……………	65	第70図	Aトレンチ包含層出土押型文土器実測図(1)……………	94
第52図	Aトレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(4) 66		第71図	Aトレンチ包含層出土押型文土器実測図(2)……………	95
第53図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)……………	70	第72図	Aトレンチ包含層出土縄文式土器（早期）実測図(3)……………	99
第54図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)……………	71	第73図	Aトレンチ包含層出土縄文式土器（早期）実測図(4)……………	100
第55図	Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(3)……………	72	第74図	Aトレンチ包含層出土縄文式土器（早期）実測図(5)……………	101

- (2)第1トレンチ須恵器出土状況
- 図版5 (1)第1トレンチ西部サブトレンチ(西から)
(2)第1トレンチ西部サブトレンチ南壁断面
- 図版6 (1)第1トレンチ西部サブトレンチ高山寺式土器出土状況
(2)第1トレンチ西部サブトレンチ高山寺式土器出土状況
- 図版7 (1)第1トレンチ西部サブトレンチ高山寺式土器出土状況
(2)第1トレンチ西部サブトレンチ高山寺式土器出土状況
- 図版8 (1)Aトレンチ遺構検出状況(西から)
(2)Aトレンチ遺構検出状況(北東から)
- 図版9 (1)Aトレンチ遺構全景(西から)
(2)Aトレンチ遺構(西から)
- 図版10 (1)AトレンチSB02, SK9(西から)
(2)Aトレンチ南壁断面
- 図版11 (1)AトレンチSB01(東から)
(2)AトレンチSB01(南から)
- 図版12 (1)Aトレンチ縄文式土器出土状況
(2)Aトレンチ縄文式土器出土状況
- 図版13 (1)Aトレンチ石斧出土状況
(2)Aトレンチ異形石器出土状況
- 図版14 (1)Aトレンチ鉄製品出土状況
(2)Aトレンチ土錘出土状況
- 図版15 (1)Aトレンチ包含層頭蓋骨出土状況
(2)Aトレンチ包含層頭蓋骨出土状況
- 図版16 (1)Aトレンチ埋葬人骨検出状況全景(東から)
(2)Aトレンチ埋葬人骨近景(東から)
- 図版17 Aトレンチ埋葬2号人骨(東から)
- 図版18 (1)Aトレンチ埋葬2号人骨側面(北から)
(2)Aトレンチ埋葬2号人骨頭部近景
- 図版19 (1)Aトレンチ埋葬1号人骨(北から)
(2)Aトレンチ埋葬1号人骨足甲部近景
- 図版20 (1)Aトレンチ埋葬人骨土層断面
(2)Aトレンチ埋葬人骨取り上げ作業状況
- 図版21 (1)Bトレンチ遺構検出状況(北西から)
(2)BトレンチSB04遺物出土状況
- 図版22 (1)BトレンチSB04(北西から)
(2)BトレンチSB04(北から)
- 図版23 (1)第1トレンチ出土高山寺式土器
(2)第1トレンチ出土高山寺式土器
- 図版24 (1)第1トレンチ出土高山寺式土器(外面)
(2)第1トレンチ出土高山寺式土器(内面)
- 図版25 (1)第1トレンチ出土高山寺式土器(外面)
(2)第1トレンチ出土高山寺式土器(内面)
- 図版26 (1)第3トレンチ出土縄文式土器
(2)Aトレンチ遺構埋土出土縄文式土器
- 図版27 (1)AトレンチS×1周辺出土縄文式土器
(2)AトレンチS×1周辺出土縄文式土器
- 図版28 (1)AトレンチS×1周辺出土縄文式土器
(2)Bトレンチ包含層出土縄文式土器(内外面)
- 図版29 (1)BトレンチSB04埋土出土縄文式土器
(2)Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
- 図版30 (1)Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
(2)Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
- 図版31 (1)Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
(2)Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)

- 期)
- 図版32 (1)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
- 図版33 (1)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
- 図版34 (1)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器(早期)
- 図版35 (1)A トレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器(早期)
- 図版36 (1)A トレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器(早期、早期末～前期初頭)
- 図版37 (1)A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器(早期)
- 図版38 (1)A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器(早期、早期末～前期初頭)
- 図版39 (1)A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器(早期末～前期初頭)
(2)A トレンチ第Ⅳ層出土縄文式土器(早期)
- 図版40 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
- 図版41 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
- 期)
- 図版42 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
- 図版43 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)
- 図版44 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期、早期末～前期初頭)
(2)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(前期)
- 図版45 (1)A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(中・後・晩期)
(2)A トレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器(早期)
- 図版46 (1)A トレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器(早期、早期末～前期初頭)
- 図版47 (1)A トレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器(前期)
(2)A トレンチ第Ⅴ層出土縄文式土器(中・後・晩期)
- 図版48 (1)A トレンチ包含層出土押型文土器(外面)
(2)A トレンチ包含層出土押型文土器(内面)
- 図版49 (1)A トレンチ包含層出土押型文土器(外面)
(2)A トレンチ包含層出土押型文土器(内面)
- 図版50 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)

- 期)
- 図版51 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
- 図版52 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
- 図版53 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
- 図版54 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
- 図版55 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
- 図版56 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(早期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(期末～前期初頭)
- 図版57 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(前期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(中期)
- 図版58 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(中期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(中期)
- 図版59 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(中期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(後期)
- 図版60 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(後
- 期)
- 図版61 (1)A トレンチ包含層出土縄文式土器(晚期)
(2)A トレンチ包含層出土縄文式土器(晚期)
- 図版62 縄文式土器(早期) 押型文、条痕文の種類
- 図版63 (1)石器(石鏃)
(2)石器(石匙・スクレイパー)
- 図版64 (1)石器(石錐・その他・剥片)
(2)石器(石斧)
- 図版65 (1)石器(凹石)
(2)石器(石錘)
- 図版66 (1)石器(たたき石、磨石)
(2)石器(石皿、石棒)
- 図版67 (1)A トレンチ包含層出土土師器
(2)A トレンチ包含層出土土師器
(3)A トレンチ包含層出土土師器
- 図版68 須恵器 第1 トレンチ出土坏身(左1、2)
B トレンチS B 04出土坏蓋、坏身(左21～24)
A トレンチ包含層出土坏蓋、坏身(右10、11、13、14、17、23)
- 図版69 須恵器 A トレンチ包含層出土 坏身(25、27、31、33) 高坏(36、37) 横耳(40)
- 図版70 (1)A トレンチ出土土錘
(2)A トレンチ出土金属器(刀、釘)

はじめに

磯山城遺跡は、滋賀県坂田郡米原町大字磯に所在する磯山（標高159.5m）一帯に位置しており、『滋賀県遺跡目録』に室町時代の城跡として記載されていた。

当該遺跡地内に米原町水道課が計画した上水道第2次拡張事業について、施工に先立て事業主体である米原町水道課から滋賀県教育委員会文化財保護課に遺跡確認を依頼したところ、埋蔵文化財包蔵地の可能性があるとの回答を得た。この回答にもとづき米原町水道課は、米原町教育委員会に埋蔵文化財の調査を依頼した。この依頼によって、米原町教育委員会は昭和58年12月16日付けで米原町水道課との間に委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

この契約により、山頂部分（沈殿池および汙過池）の調査を昭和59年1月6日より昭和59年3月31日まで実施し、山麓部分（管理棟および排水池）の調査を昭和59年4月1日より昭和59年6月30日まで実施した。

調査の結果、縄文時代を主とする多数の遺物の出土があったため、当初契約期間内に十分な遺物整理と、報告書作成のための総括整理の実施が不可能となり、昭和59年6月の段階で米原町教育委員会と米原町水道課が整理業務について改めて協議をおこなった。その結果、整理期間を昭和61年3月31日まで延長することに変更契約を締結し、遺物整理ならびに調査報告書を作成することとなり、調査のすべてを完了することとなった。

第Ⅰ章 磯山城遺跡周辺の環境

第1節 自然地理的環境

I. 磯山城遺跡周辺の自然

磯山城遺跡から、滋賀県下で産出される土器としては最古の「高山寺式土器」が発見されることから知られるように、この土地は非常に古くから人間が居住したところである。つまり、自然環境が、人間にとって有利な状況にあったと考えられる。

この遺跡は、第8図に示されるように、入江内湖の西岸にある。背後には、比高75mの丘があり、その東麓を占めている。この土地の自然状況を考えるにあたっては、冬の寒さと積雪を無視することはできない。また、琵琶湖地域では冬に北西から吹きつける季節風が強いのは有名であるが、特に琵琶湖の東南岸においては、湖面を吹いて来る冬の季節風はより強まっている。こうした自然条件を考えると、この遺跡は非常によいところに立地するといえる。内湖の西岸であり、南と東がひらけていて日当たりはよく、かつ後背する丘は冬の季節風が直接にふきつけるのを防止している。積雪は少なく、雪が溶けるのが早く、根雪が残らない場所であったにちがいない。もちろん、この遺跡が立地した約6000～7000年前は、現在よりも遙かにおだやかな気候であったと考えられるので、冬の積雪は現在よりも少なかったであろうが、自然条件全体として、やはり人の住居としては有利なところであったと想像される。

ここでは、この遺跡とその周辺についての過去2～3万年を中心とした自然史、および自然環境について記述する。

II. 地 形

磯山城遺跡のある米原町入江内湖は、琵琶湖の東岸に位置する。西は琵琶湖の水面であり、東は伊吹・鈴鹿の山地があり、その高度は1000mを越える。入江内湖は直径約2kmであり、東の山地と西の琵琶湖の間に存在する平地のほとんどの部分を占めている。

琵琶湖南東岸の内湖は、琵琶湖岸に点散する岩石でできた小丘と琵琶湖のあいだに存在することが多い。南東から流れてくる河川の蔭となって堆積物がこないので、湖となって水面が残るからである。彦根の曾根沼は、その典型的な例である。入江内湖は、背後に山がせまっていて、ちょうど堆積物のこない地域であり、内湖として残ったのである。(第8図)

III. 気 象

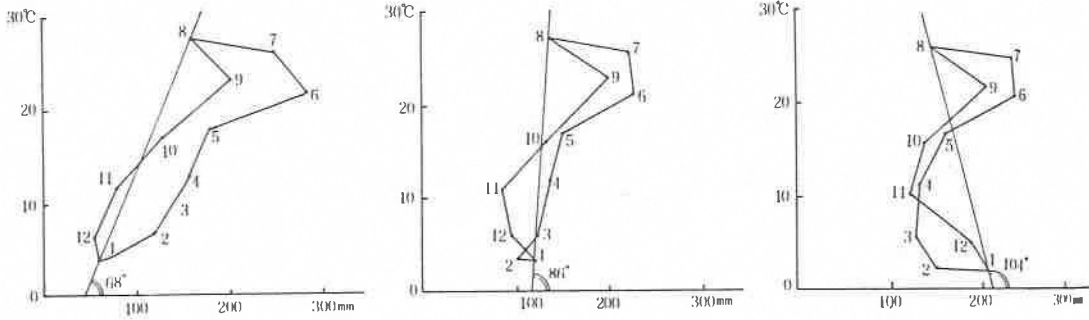
(1) 卓越風

入江内湖に近い彦根における風向きを1年間に渡ってみると全般的にNW風が卓越し、季節による相違はあまりない。1月から4月までは、卓越風の方向が北西(NW)であり、5月から7月は北(N)である。8月以降は変化に富み8月は南東、9月は北、10月から11月は北西～北北西が卓越する。全般的にこの地域

大 津

彦 根

木之本



第1図 日本海指数と温雨図 (1941~1970) [鈴木・鈴木, 1971]

は、N~NWの風が吹くわけである。磯山城遺跡では、入江内湖側にあるので、ほとんど1年中卓越風を直接にはうけない位置にある。

(2) 気候区

琵琶湖周辺では日本海型気候区(北陸型)と、太平洋型気候区(東海型)および瀬戸内型気候区が接していると考えられている。更に三方からそれぞれ若狭湾、伊勢湾、大阪湾が湾入し、ほぼ中央部に琵琶湖が存在するという地形要素が加わり、その気候はかなり変化に富んでいる。鈴木・鈴木(1971)は温雨図の形を分析することによって、グラフの1月点と8月点とを結ぶ直線とX軸とがなす角度(右回り)が、太平洋型気候区では鋭角、日本海型気候区では鈍角となることを発見し、この角度を日本海指数と呼んでいる。日本海指数の90°が、両気候の境界となるわけである。滋賀県植生調査研究会(1979)によれば、近畿地方の日本海指数は第2図に示したとうりである。第1図に示されているように、彦根は日本海指数が86°であり、米原はそれよりやや大きいので、磯山城遺跡は、ちょうど日本海型と太平洋型気候の境界地にあたるわけである。

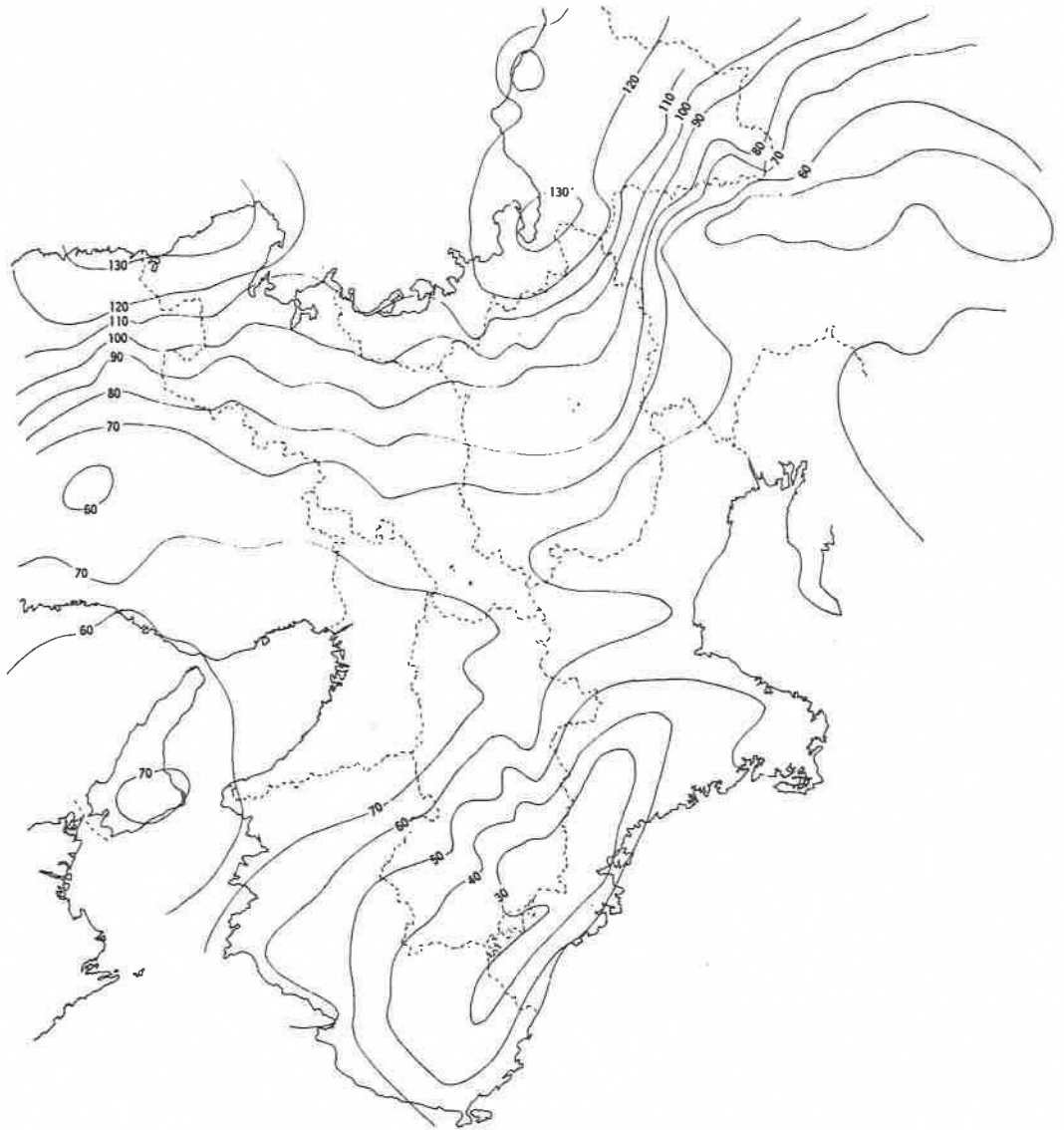
IV. 植生と植物区

(1) 植 生

村瀬(1979)によれば滋賀県にはシダ植物以上の高等植物がおよそ2,000種近く分布するという、この論文では県内各地域の現存植物の分布を地形・地質・気象・地史などもふくめて、植物区系学、植物分類地理学、植物生態学などの総合的な面から考察されている。滋賀県は本州のほぼ中央にあつて裏日本型、瀬戸内型、東海型(東日本型)の3つの気候区の接点になっていることから、多種の区系要素が入り混ざっているため植物相が複雑である。上述のような気候条件のため、植物帯でいう温帯(冷温帯)と暖帯(暖温帯)の本州における接点であり、植生からみてもブナ・チシマザサ群団とブナ・スズタケ群団との移行帯に当たっており、両方の要素が入り混ざっているので、植生の解析は難しいという。

(2) 植物区

日本では東北地方、北海道を除いた低地は、植物区としては日鮮暖帯区といわれ、山地は日本温帯南部区といわれている。村田源(1968)は近畿地方の植物区系を大きく表日本植物区系と裏日本植物区系に分け、鈴鹿山地や比良山地北部を含めた県北部を裏日本植物区系の山陰地区に、東南部の低地は表日本植物区系の瀬戸内地区に属させている。滋賀県の植物分布区が大きく表日本型と裏日本型に2分されることは、地形・気候の面からも、植物の区系要素から見ても明らかである。村瀬(1979)は、鈴鹿山地・比良山地北部を含



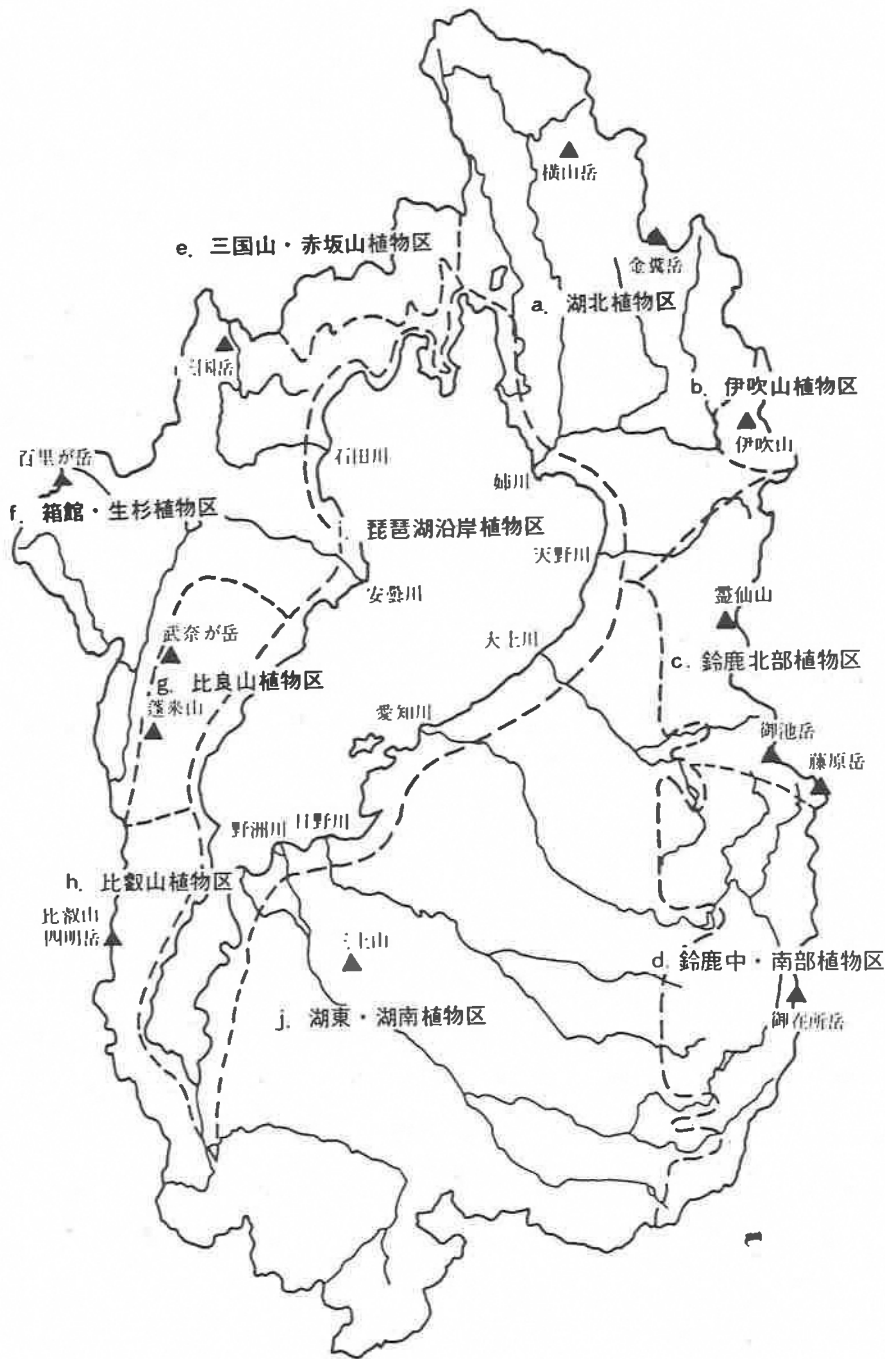
第2図 近畿地方における日本海指数 (滋賀県植生調査研究会, 1979)

めた滋賀県北部を日本海植物区系とし、東南部低地を瀬戸内植物区系としている。更にこれらを地域によって小さな植物区に細区分している(第3図)。ここでは第3図に従って、入江内湖に近い日本海植物区系に属する湖北植物区・鈴鹿北部植物区と瀬戸内植物区系に属する琵琶湖沿岸植物区、湖東・湖南植物区について、村瀬(1979)の説を紹介する。

A. 日本海植物区系

(a) 湖北植物区

気象は日本海気候の影響が滋賀県内でも最も強い。冬期の積雪量が0 cm以上の日数で80~120日とおおく、伊吹山地北部は年間降水量が3,000 mm にちかく、最も多い地域である。この植物区は本州中部山地から分布する北方系要素(北まわり型・寒地性)の植物や日本海要素の植物が多いのが特徴である。滋賀県ではこの区にしか産しないものとして、金糞岳山頂付近にのみ見られるものにはムラサキヤシオツツジ、マルバノリクアラザミ、ツルタチツボスミレがある。山地上部はブナーオオバクロモジ群集が発達し、オオバクロモジ、ヒメアオキ、マルバマンサク; シノブカグマなどの群集標徴種のほか、日本海要素のエゾユズリハ、エチゴキジムシロ、ハイイヌガヤ、トキワイカリソウ、エゾアジサイ、オオカニコウモリ、サイゴクミツバツツジ、イブキトリカブトなどを下層にもつ裏日本型のブナ林である。



第3図 滋賀県植物地理区 (村瀬, 1979)
 a～g: 日本海植物区系 h～j: 瀬戸内植物区系

(b) 鈴鹿北部植物区

山地には観測地点が設置されていないので、詳しいことはわからないが、日本海気候の影響が強く、冬は気温が低く雪も多い。北の伊吹山に比べると、日本海要素の植物が少ないが、なお、かなり多い。

滋賀県でこの区にだけ見られるものには、フクジュソウ・ヒロハマノアマナ・タキミシダなどがある。

B. 瀬戸内植物区系

この植物区系は瀬戸内型気候の影響を強く受ける地域で、年平均気温が12～14℃の範囲（低地は14℃）で、年間降水量も1,600mm位であり、積雪は北部琵琶湖岸を除いて、非常に少ない。気温が高いため、シイ・カシ林やタブ林のような常緑樹林が発達し、林内には多数の暖地性植物が育成している。この区系の範囲は比叡山とその山麓、湖東・湖南の丘陵地、平野部および県北部でも琵琶湖沿岸部を含める。

(a) 琵琶湖沿岸植物区

琵琶湖がつくる海洋性気候の影響を受ける地域である。この区は、年平均気温が14℃以上あり、暖地性の植物が多い。琵琶湖の湖岸には、ふつうに海岸に生えている植物がたくさん分布している。草本の類ではハマヒルガオ、ハマエンドウ、タチスズシロソウ、ハマゴウ、があり、樹木の類ではクロマツ、タブノキ、ヒメユズリハ、モツコク、モチノキ、ヤマモモなどが主なものである。多景島や彦根の湖岸一帯にイスノキが生えていることは注目に価する。

海岸の植物が湖岸に分布している理由として、広い砂浜があることや琵琶湖岸の気候が海洋性気候に似ていることなどがあげられている。また、これらの植物は、第三紀に生存していたものが残ったという説もあるが、これらはいずれもよく開花結実し、繁殖力も旺盛なので、比較的新しい時代に入ってきたとの見方もできる。

湖岸に近い丘陵地には暖地性の植物群落が発達する。たとえば、シロバイ・クロバイ・リンボク・イヌガシ・クロガネモチ・モチノキ・ヤブニッケイ・アオガシ・イズセンリョウ・マンリョウなどの樹木や、林の中のハナミョウガ、サンショウソウなどの草本である。

(b) 湖東・湖南植物区

この植物区は、湖東・湖南の平野と丘陵地で、年平均気温がほぼ14度であり、年間降水量は1500mmと少ない。雪も少ない。

本来は暖帯林（シイ・カシ林）が広がる地域であるが、丘陵地では人為的な伐採によって、アカマツ林が大部分を占めている。

V. 地 質

米原町入江内湖周辺の地質を概略的にみると、第4図に示したように山地は中・古生層と中生代の火山噴出物（湖東流紋岩、宮村ほか、1976）であり、丘陵地は第四紀層の古琵琶湖層群（横山ほか、1979）からなっている。そして、平地は一般に完新世（1万年以後）の地層といわれている。しかし、平地をつくっている地層は、厳密な意味での完新統（いわゆる沖積層）だけではなく、更新世末の最終氷期のものやそれ以前の地層も多い。入江内湖の地層はよくわかっていないので、類似した堆積環境にある彦根の曾根沼の地層について紹介する。

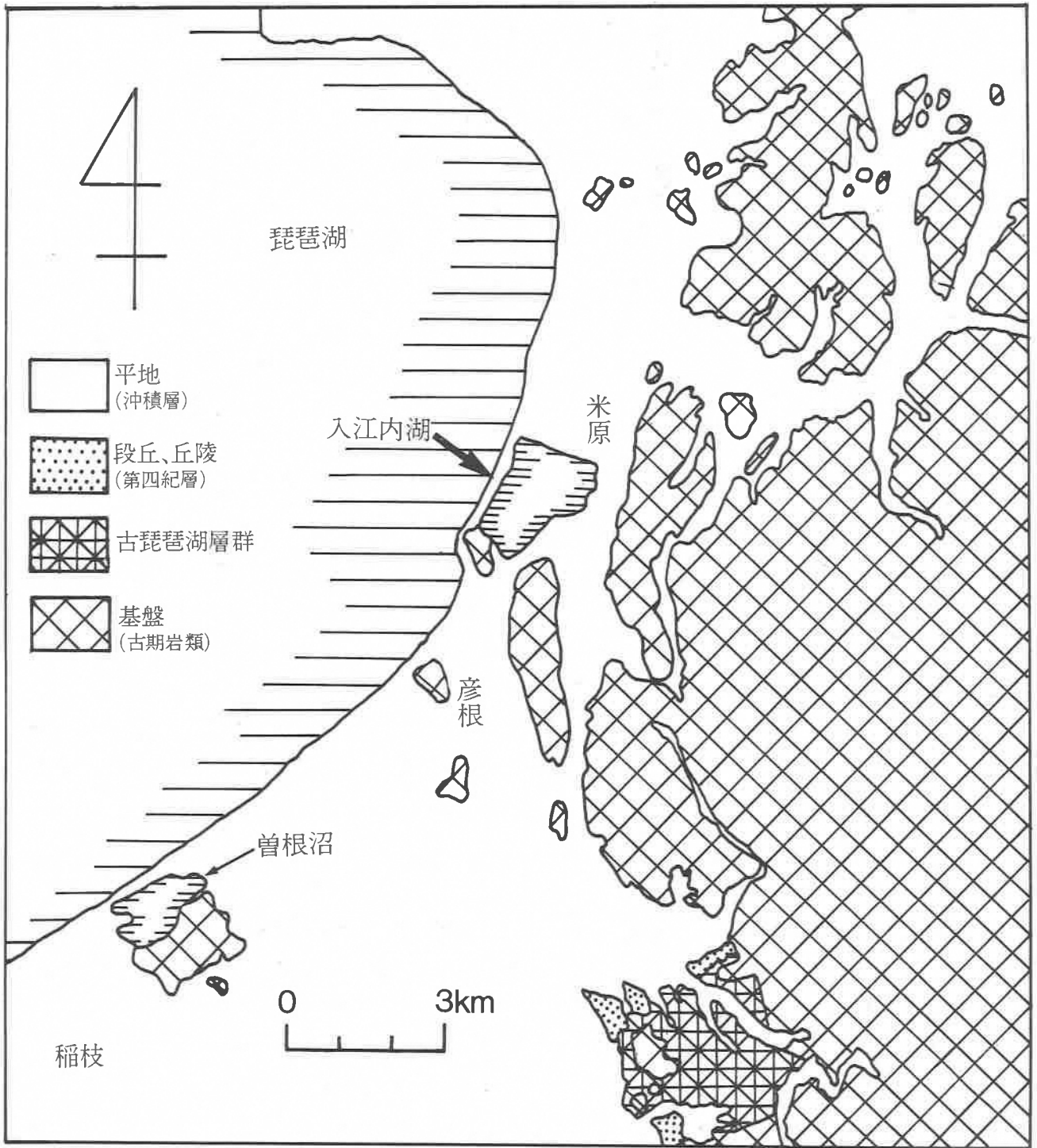
石田ほか（1984）によれば、曾根沼の完新統は第5図に示したように、主として粘土やシルトのような細粒堆積物からなり、あいだに泥炭をはさんでいる。また、深さ6～7mにアカホヤ火山灰（町田・新井、1978）の火山ガラスをふくんでいる。¹⁴C年代からみると、深さ8～9mが約1万2000年前であり、ここでは完新統の厚さは約8mとなる。一般的には、琵琶湖南東岸での完新統の厚さは、これより薄い。近江八幡市では4m以下、草津市では5m以下である。

VI. 礪山城遺跡周辺の自然史

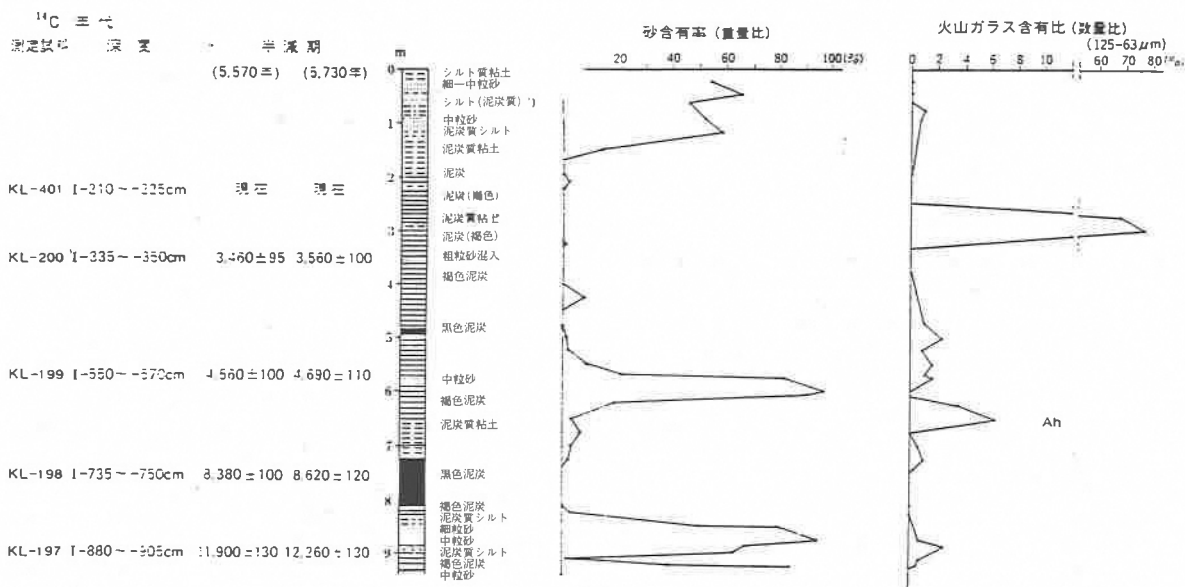
今回、自然環境についての調査、遺跡中の土壌に含まれる火山ガラスについての分析・測定（横山、1986および本紙付録）を行ったが、これらの結果と米原町上水道第2次拡張事業地質調査報告書（昭和57年11月）と曾根沼の資料（石田ほか、1984）を基にして、遺跡周辺の自然史を編纂しておきたい。

(1) 気候変動

この地に人間が住み始めたのは、アカホヤ火山灰が降灰する以前であるから、少なくとも6～7000年前で



第4図 入江内湖周辺の地質図



第5図 曾根沼ボーリング柱状図と砂・火山ガラス含有量並に¹⁴C年代 (石田ほか, 1984)
[Ah, アカホヤ火山灰の火山ガラス]

ある。ここでは、最終氷河期のうちでもっとも寒かった時期である2万年からを取上げることにする。古代人の生活を考える場合は、当時の日本列島の自然条件が現在と全くちがっていたことを考慮にいれねばならない。

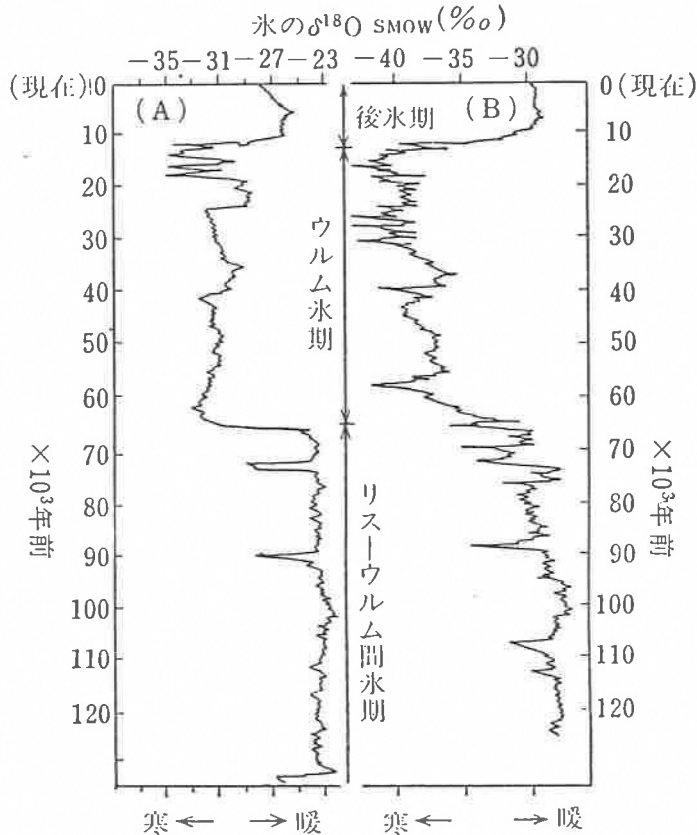
最終氷期は更新世末期の約7万年前に始まり、一、二回のやや暖かい亜間氷期をはさんで2万~1万8000年前にもっとも寒い時期をむかえた。その後は、だんだんと暖かくなり、約1万年前に現在とほぼ同じとなり、今度は寒くなり始めたが、すぐ再び暖かくなって約6000年前にもっとも暖かい時期をむかえた。この6000年前にはもう磯山城に人が住んでいたのである。このころは縄文早期であり、温暖な気候の下に縄文人が日本各地に広がって生活圏を広げた時期であった。縄文時代以後は全体として温暖期が続いたが、気温は現在とほぼ同じであったと推定されている。この間に小氷期といわれるやや寒い時期が2回あった。一つは三世紀末に最寒期のあるもので、日本では弥生時代である。もう一つは天明や天保の飢饉で有名な十六世紀後半から十九世紀後半にかけてのものであり、この間に3回の寒期があった。第6図は氷河に含まれる酸素18から作成した過去1万年間気候変動史である。

曾根沼でみられる泥炭は、この付近がまだ寒かったころにたまったものである。

(2) 植物相の変遷

古谷(1974)によれば、最終氷期の近畿地方では大阪湾周辺に冷温帯落葉広葉樹林いわゆるブナ林が残り、京都・奈良盆地、丹波山地などはすべて亜高山帯針葉樹林になったという(第7図)、亜高山帯針葉樹林は、現在奈良県の大峰山脈や大台ヶ原の海拔1600m以上にあるトウヒ・コメツガ・シラベ・ゴヨウマツ・ナカカマドなどの森林や、中部山岳の前記に加えてカラマツ・チョウセンゴヨウ・ヒメコマツ・クロバダケカンバ・シラカバ・ミヤマハンノキなどを含む森林である。一方、ブナ林はブナを中心にミズナラ・カエデ・トチノキ・ニレ・クマジテ・モクレンなどを持つ森林で、近畿地方では現在標高800m以上にみられるものである。

縄文時代の近畿地方では、ほぼ山頂近くまで照葉樹林・暖温帯常緑広葉樹林であるシイ・カシ林となった。標高500m以上の山地では暖温帯落葉広葉樹林であるモミ・ツカが発達し、ブナ林は分布を大幅に縮小したと推定されている。シイ・カシ林はシイノキ・アカガシを中心にクスノキ・ヤブツバキ・サカキ・ヤマモモ・モチノキなどを含む森林で、大阪南部の丘陵や京都市内平地部の社寺、奈良の春日山などに部分的にしられている。また、暖温帯落葉広葉樹林であるモミ・ツガ林はモミ・ツガ・スギを主体としてアカガシ・ウラジ



第6図 氷河中の酸素18 (^{18}O) の変化から復元した過去の気候
(A): デボン島の氷河 (B): グリーランド島の氷河

ロガシ・イヌブナ・クリ・クマシデ・シキミなどを含む森林である。この森林の現在における近畿地方での分布は、下限が標高300m、上限が標高600m前後で、鈴鹿山地などにみられる。シイ・カシ林が標高500mまで上昇したことから考えると、当時の年平均気温は現在と比べて二～三度高かったと推定できる。

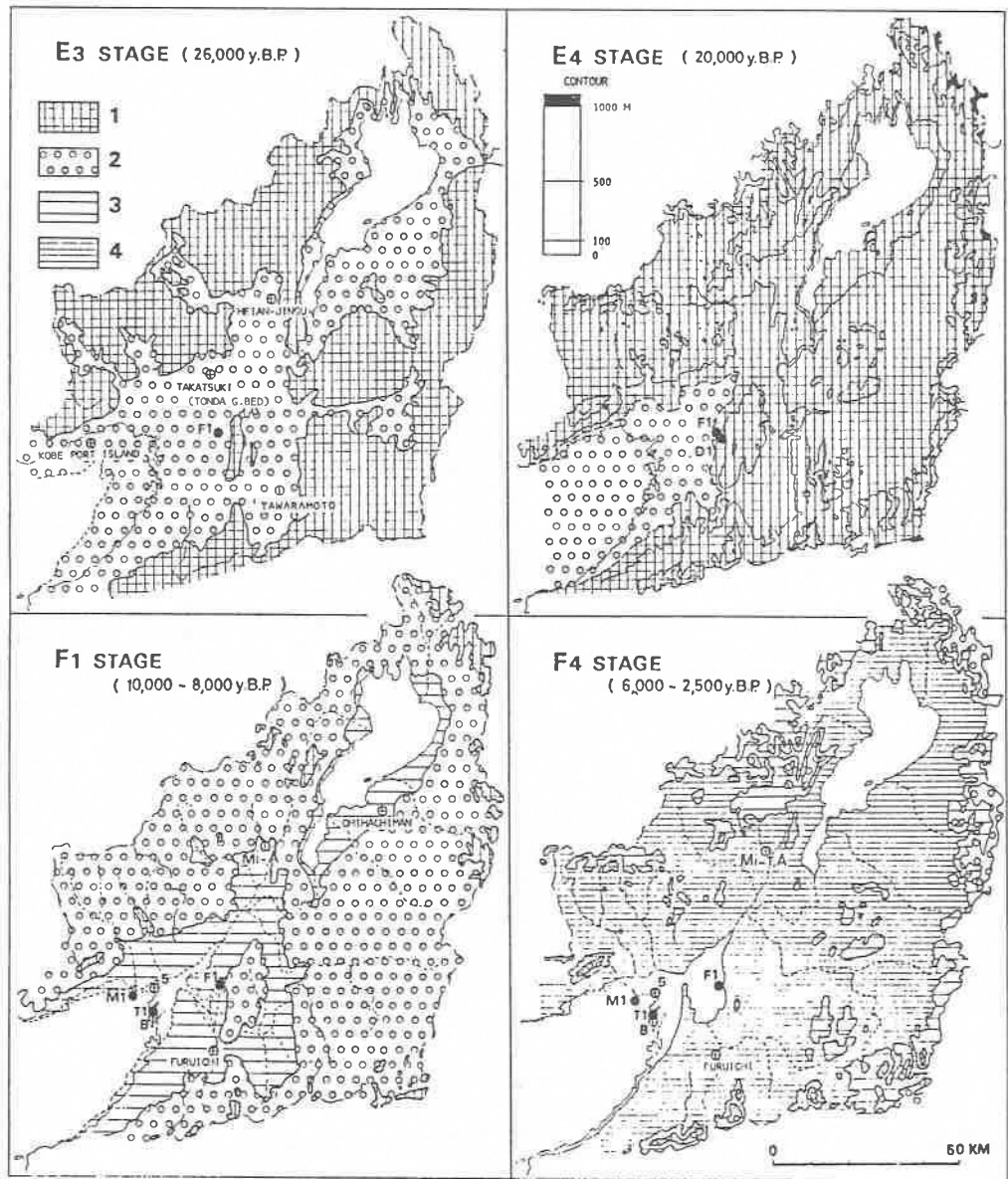
弥生時代まで続いた温暖な気候も弥生時代の終りになって、やや冷涼な気候となったことは、最近になってほぼ定説化してきた。これは古記録による復元と自然史学の成果とが一致するので非常に信頼性がたかい。

以上が近畿地方の一般的な気候変動史であるが、磯山城遺跡のある米原町でも同じ様な気候変動があったことがやはり曾根沼から得られた柱状試料にふくまれる花粉化石によって復元されている。石田ほか(1984)によれば、つぎのとおりである。

『約12000年前は五葉松の花粉がみられることなどから、寒冷で乾燥した気候であったとおもわれる。その後、コナラ・カバノキが増え、水草の多い時、コナラは残ったが、カバノキが減り、トウヒが滅亡し、スギが出現した時を経て、最も暖かい6300年前頃をむかえる。この頃には、アカガシ・エノキ・ムクノキ・モミ・スギが多い。アカガシの全盛期は、3500年前頃まで続き、その後、湿潤化がすすんだようである。』

こうした気候の変遷は、入江内湖においても同様であったにちがいない。

(横山 卓雄)



第7図 ウルム氷期以降の森林植生の分布推定図 (古谷, 1979)
 1: 亜高山帯針葉樹林 2: ブナ林
 3: モミ・ツガ林 4: シイ・カシ林

文 献

石田志朗・河田清雄・宮村学 (1984) : 彦根西部地域の地質。地域地質研究報告, 5万分の1図幅, 地質調査所。121p。
 町田洋・新井房夫 (1978) : 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラアカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, 143-163。
 宮村学・三村弘二・横山卓雄 (1976) : 彦根東部地域の地質。地域地質研究報告, 5万分の1図幅, 地質調査所。49p。
 村瀬忠義 (1979) : 滋賀県の植物地理概説。滋賀県の自然, 滋賀県自然保護財団, 899-932。
 村田源 (1968) : 近畿地方の植物分布概説。近畿の植物200回記念誌, 近畿植物同好会, 1-13。
 西田史朗 (1984) : 火山ガラスのEDX。古文化財に関する保存科学と人文・自然科学。980-984
 滋賀県植生調査研究会 (1979) : 滋賀県の植生。滋賀県の自然, 滋賀県自然保護財団, 969-1048
 鈴木時夫・鈴木和子 (1971) : 日本海指数と瀬戸内指数。日本生態学会誌, 20, 252-255。
 横山卓雄・松岡長一郎・田村幹夫・雨森清 (1979) : 古琵琶湖層群について。滋賀県の自然, 滋賀県自然保護財団, 309-389。
 横山卓雄 (1985a) : 琵琶湖堆積物からみた古環境。月刊地球, Vol. 72 (6月号), 328-332。
 横山卓雄 (1985b) : 滋賀県磯山城遺跡の土壤中の火山ガラスの屈折率測定。九十九地学 20, 13-19

第2節 歴史的環境

磯山城遺跡の所在する磯山は西方に琵琶湖、北方に入江内湖、南方に松原内湖があり、湖中に孤立した山塊を体していた。このような低湿地ではあるが周辺には数多くの遺跡が点在しており、内湖岸の居住環境の良好さを如実に示している。

旧石器時代に関しては、遺跡・遺物ともに未確認であるが、今回の磯山城遺跡出土石器の中に、ナイフ型石器やエンドスクレイパーなど、その組成が旧石器時代のものと考えられるものがあり、周辺での旧石器時代遺跡存在の可能性を示している。

縄文時代では、戦中から戦後にかけての入江内湖干拓事業に際して、地元の磯崎文五郎氏（現・米原町文化財専門員）の地道で熱心な遺物採取により、当時の姿がわかる。採取遺物は、尖底土器（早期か?）、石棒、凹石、石鏃等である。また磯山の南麓、松原内湖岸では前期初頭天神山式土器片の出土が知られる。なお、この松原内湖遺跡は滋賀県教育委員会、（財）滋賀県文化財保護協会によって現在発掘調査が進められており、後期宮滝式より晩期突帯土器が出土している。このように磯山周辺地域は狩猟採集経済の縄文人にとって、非常に食生活の安定した場であったのであろう。

弥生時代では、前期にさかのぼりうる遺跡は町内では認められない。中期では今回の磯山城遺跡で少量の土器片が認められる。後期では入江内湖西野遺跡の一括資料があげられる^①。西野遺跡は入江内湖岸の低湿地遺跡であり、弥生社会に移っても入江内湖周辺の湖岸に集落が営まれていたのであろう。

古墳時代では後期の群集墳が町内の両端に分布している。一方は山間部丹生谷に分布する塚原古墳群、片山古墳群、石淵山古墳群、等倫寺古墳、耳谷古墳、丹生古墳等であり、もう一方は琵琶湖に面する磯山北端部の磯崎古墳群である。

磯崎古墳群は古く大正九年（1920）に湖岸道路工事中偶然発見されたものである。『坂田郡志』によると^②、6基から成る群集墳で、2号墳が横穴式石室と記されており、他は石材の露出を伝えていることより、磯崎古墳群は全て横穴式石室の円墳であったと考えられる。この時出土した遺物は勾玉、管玉、金環類の装身具、直刀類の武器、須恵器坏、高坏、提瓶等の土器類で、現在磯崎神社に保管されている。

この磯崎古墳群は昭和40年、県道拡張工事の際、再度調査がなされた。その結果によると、石室玄室のプランは正方形に近く、大津北郊の滋賀里古墳群に見られるようなもので、渡来系氏族との関連が考えられる。また大正九年に出土している土錘より、眼前に広がる琵琶湖の湖上権や漁業権を支配した海人との関連も考えられよう。

湖岸部で明確な古墳は、この磯崎古墳群のみであるが、入江内湖干拓の際、管玉・金環・石釧等古墳時代の遺物が採取されており、しかもその採取地が字“埋塚”と呼ばれていることより、古墳があった可能性が高い。また磯山尾根部分から5世紀末の須恵器が出土していることより、尾根上にも古墳があったと考えられる。

次に山間部の群集墳であるが、まず丹生川西岸丘陵裾部に石淵山古墳が所在している。この群集墳も古く大正七年（1918）採石中に発見されたものである。この際内行花文鏡および金環が出土している。内行花文鏡は舶載鏡である^③。

丹生川東岸部では平野部の塚原古墳群がある。この群集墳は横穴式石室からなる円墳で3基確認されている。このうち2号墳、3号墳が昭和57年度に発掘調査が実施されており、2号墳で6次の埋葬7遺体、3号

墳で5次の埋葬5遺体の人骨が検出された。また石室構造として玄室奥部に設けられた小室が目目される。これは追葬時に1次埋葬の遺骨を納めたものと考えられる。古墳の年代としては6世紀より7世紀第2四半期までのものであろう。遺物としては、勾玉、管玉、金環等の装身具、雲球等の馬具、鉄鏃、刀子等の武具、須恵器坏、高坏、提瓶、甗等の土器類がある。

この丹生谷は古代豪族息長氏の分柱した息長君丹生真人の居住地であった可能性が高い^④。

古墳時代の集落遺跡としては、塚原古墳群の地で3棟の竪穴住居跡が確認されている。また入江内湖遺跡丸葎地区の調査では庄内式から布留式にかけての土器が出土しており、同層より300点以上にのぼる木製品も出土している。このことから、前時代に引き続いて内湖岸に集落が存続していたことがわかる。

歴史時代では、まず枝折に白鳳時代の三大寺跡がある。昭和57年度調査で、基壇跡が検出された。出土した瓦は単弁八葉軒丸瓦と四重弧文軒平瓦であった。この調査地の北西300mの醒井小学校よりは本薬師寺系の複弁八葉軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦が出土している。これらは従来1つの伽藍としてとらえられていたが、系統の違う瓦を使いわけていることより、実は単独の堂宇が点在していたのではないかと考えられる。検出された基壇も非常に短期間で廃絶しており、しかも瓦葺建物も一字のみである可能性が高いことから、整然とした伽藍配置をもっていない寺院であったと考えられる^⑤。

この三大寺を建立した豪族は、先の塚原古墳群や石淵山古墳群を築造した人々と関連するものと考えられる。ところで、これらが峡谷な丹生谷に立地していることは、水田農耕を基盤とする生産ではなく、別の生産基盤を考えさせる。醒井の地一帯は応神天皇皇子稚渟毛二岐王の後裔と伝える息長氏の根拠地であった。また壬申乱に醒井での決戦が大海軍に勝利をもたらしたことにより、畿内と東海との関門（不破関）をひかえた峡谷を掌握する軍事的基盤を有する地であったといえよう。壬申乱後の寺院建立一本薬師寺系瓦一もそれを根拠づける有力な証拠となるであろう。

番場には不動谷瓦窯跡があった。現在関西電力の変電所となっており痕跡は残っていないが、その構造は登り窯であった。出土した軒平瓦は篋書で顎部を指頭で波状にしている。

平野部に目を向けると、奈良時代の寺院関係の遺跡は見当らない。ただ磯山北麓の堂谷遺跡より、布目瓦とともに鷗尾が発見されており、地名とともに寺院跡もしくは瓦窯跡と考えられる。

平安時代になると筑摩の地に宮内省大膳職筑摩御厨が設置され、平安宮に鮒や鮒鮓を貢進していた。昭和60年度に筑摩の地を調査したが、平安時代初期の墨書須恵器、緑釉、硯、斎串などが出土し、御厨と関連したものであろうと考えられる^⑥。またこの御厨に集積された貢進物を出荷したであろう港と考えられる朝妻港遺跡もあり、古代湖上交通を考えるうえで重要な遺跡である。

このように、米原の地は古くより畿内と東海、北陸の三接点として重要な位置を占めていたのである。

註 ① 田中勝弘『矢倉川中小河川改修に伴う入江内湖西野遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会1977）

② 滋賀県坂田郡教育会編『改訂坂田郡志』第一巻（1941）

③ 島田貞彦「近江國坂田郡の二古墳に就て」（『考古学雑誌』9-4 1900）

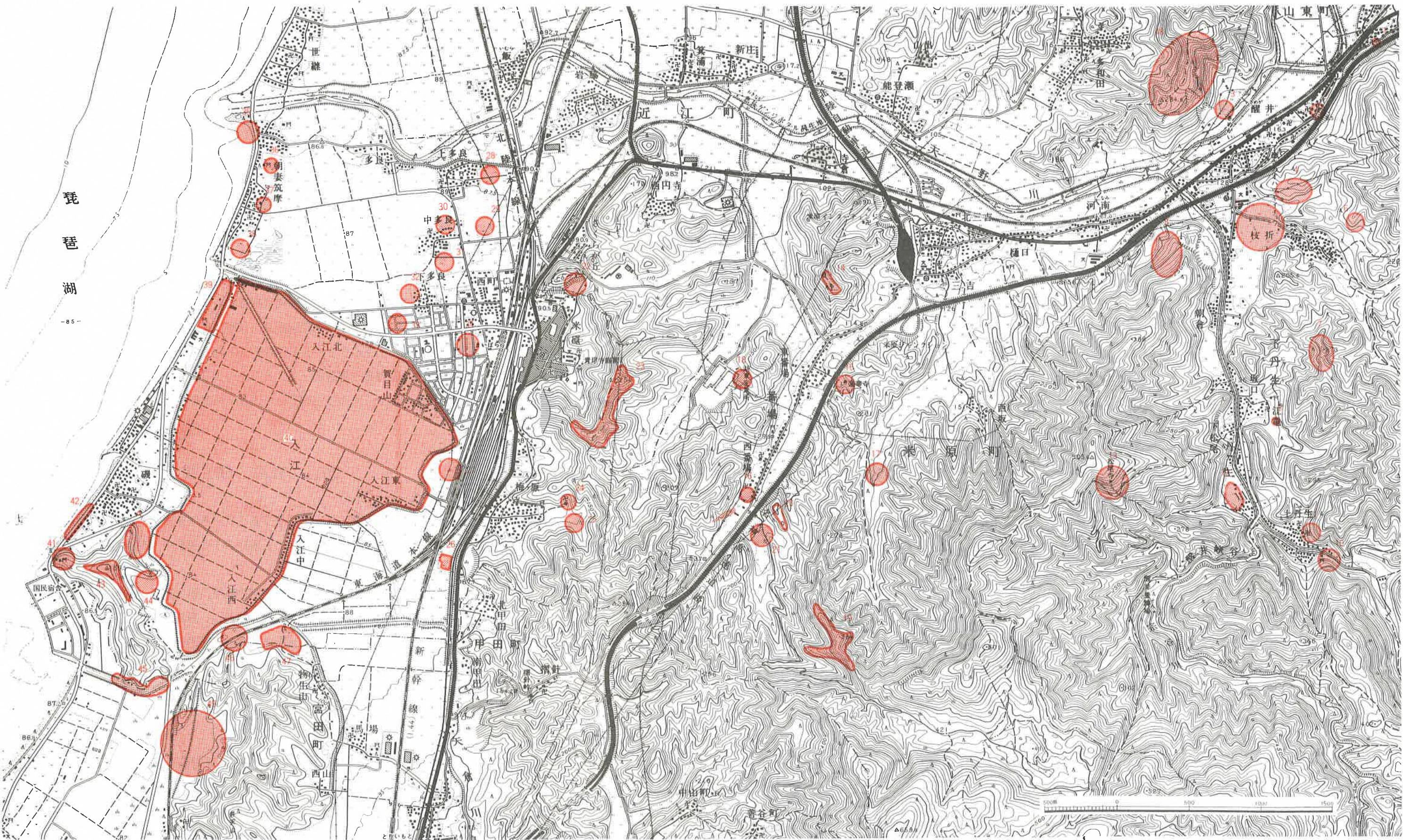
西田弘「滋賀県下の古墳出土鏡について(3)」（『滋賀文化財だより』No.53 1981）

④ 田中勝弘『三大寺遺跡群一坂田郡米原町枝折所在一』（米原町教育委員会1984）

⑤ ④に同じ

⑥ 中井均『筑摩湖岸遺跡・磯湖岸遺跡試掘調査報告書』（米原町教育委員会1985）

中井均『筑摩湖岸遺跡調査報告書』（米原町教育委員会1986）



A. 磯山城遺跡 (今回調査地)

- | | | | | | |
|------------|-----------|-----------------|--------------|---------------|------------|
| 1. 等倫寺古墳 | 2. 地藏堂前遺跡 | 3. 森の谷古墳 | 4. 片山古墳群 | 5. 三大寺跡・塚原古墳群 | 6. 耳谷古墳 |
| 7. 土肥城跡 | 8. 石瀨山古墳群 | 9. 丹生古墳 | 10. 上丹生A遺跡 | 11. 法性坊遺跡 | 12. 上丹生B遺跡 |
| 13. 松尾寺遺跡 | 14. 地頭山城跡 | 15. 蓮華寺遺跡 | 16. 本授寺遺跡 | 17. 薬師谷遺跡 | 18. 不動谷瓦窯跡 |
| 19. 鎌刃城跡 | 20. 殿屋敷城跡 | 21. 今福寺遺跡 | 22. 岩谷窯跡 | 23. 太尾山城跡 | 24. 霊水寺遺跡 |
| 25. 善後寺遺跡 | 26. 福島城跡 | 27. 米原駅西遺跡 | 28. 本願寺遺跡 | 29. 中多良遺跡 | 30. 立花遺跡 |
| 31. 蘭華寺遺跡 | 32. 下定使遺跡 | 33. 中多良入江内湖周辺遺跡 | 34. 米原駅前遺跡 | 35. 朝妻港遺跡 | 36. 朝妻城跡 |
| 37. 法善寺遺跡 | 38. 今江寺遺跡 | 39. 筑摩湖岸遺跡 | 40. 入江内湖遺跡 | 41. 磯崎古墳群 | 42. 磯湖岸遺跡 |
| 43. 磯山城跡 | 44. 堂谷遺跡 | 45. 矢倉川河底遺跡 | 46. 入江内湖西野遺跡 | 47. 物生山遺跡 | 48. 醒井神籠石 |
| 49. 松原内湖遺跡 | | | | | |

第8図 周辺遺跡分布図

「この地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭60近複、第256号」

第Ⅱ章 調査の目的と方法

第1節 調査に至る経過

米原町では、従来上水道の用水を上丹生の水源池より供給していたが、近年の消費量に対してまかないきれないようになり、琵琶湖より取水して上水道用水にする計画がもちあがった。この計画に対し、米原町内の最良地として磯山西北端尾根が候補地となった。ところが当該地は周知の遺跡、磯山城遺跡の一部であり、現状でも人工的削平面が数段にわたって認められることから、中世山城としての可能性が高く、また山麓部は入江内湖遺跡の近接地であった。浄水場建設計画では大半が切り土工事となっており、尾根上削平地が失われるため、町教育委員会では工事の事前に発掘調査をおこなうことにした。

調査は標高120m付近の尾根上部分を中心に実施することとなったが、山麓部分に関しても居館部分に推定され、また入江内湖遺跡にも近接していることより、水道課と協議をおこなった。その結果、管理棟と排水池に関しては地中深くパイルの基礎が入ることが判明したので、この2棟の建設予定地も全面的に発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の目的

磯山城遺跡は当初室町時代の山城であったと考えられていた。近年の考古学的発掘調査は時代に縛られず、中世・近世・近代に至る数多くの遺跡がその対象となってきている。今回の事前調査の目的も同様で、中世山城遺跡の解明にあったといえる。

ところが尾根上部の調査中に縄文時代早期の押型文土器が出土した。このため山麓部調査をおこなうにあたって、その調査目的にやや方向の違った問題点がもちあがった。

つまり尾根上部で出土した縄文時代早期の土器を使用した人々の生活の場が山麓にあったのではなかったかという問題である。

この大前提をふまえたうえで、中世山城の居館部分検出をも忘れることなく山麓部の調査にのぞんだのである。

第3節 調査の方法

調査は調査期間の6ヶ月を2分化し、尾根上部分を3ヶ月として実施することとした。

まず尾根上部分の調査を昭和59年1月6日より始めたが山斜面が急なため、バックホウ等の重機を調査に使用することができず、表土より人力による作業となった。

トレンチの設定は、まず中世磯山城の削平面であったと思われる尾根上平坦面全域を1トレンチとした。この平坦面より北に下る尾根に2トレンチを設け、2トレンチ北端平坦面より東に向って山麓に下る尾根上に3トレンチを、そして1トレンチより南に高くなる尾根上に4トレンチをそれぞれ設定した。

山麓部に関しては、管理棟建設地にAトレンチ、排水池部分にBトレンチを設定し、特に遺跡の範囲を確認するため建設用地の東部に6ヶ所のグリットを設定した。(C-1, C-2……)この山麓部A, B, Cに関してはバックホウによって表土を排土し、遺構面および下層に関しては人力による掘削をおこなった。

第9図 遺跡周辺地形およびトレンチ配置図



第Ⅲ章 調査の結果

第1節 遺構と遺物

第1項 1～4トレンチの遺構と遺物

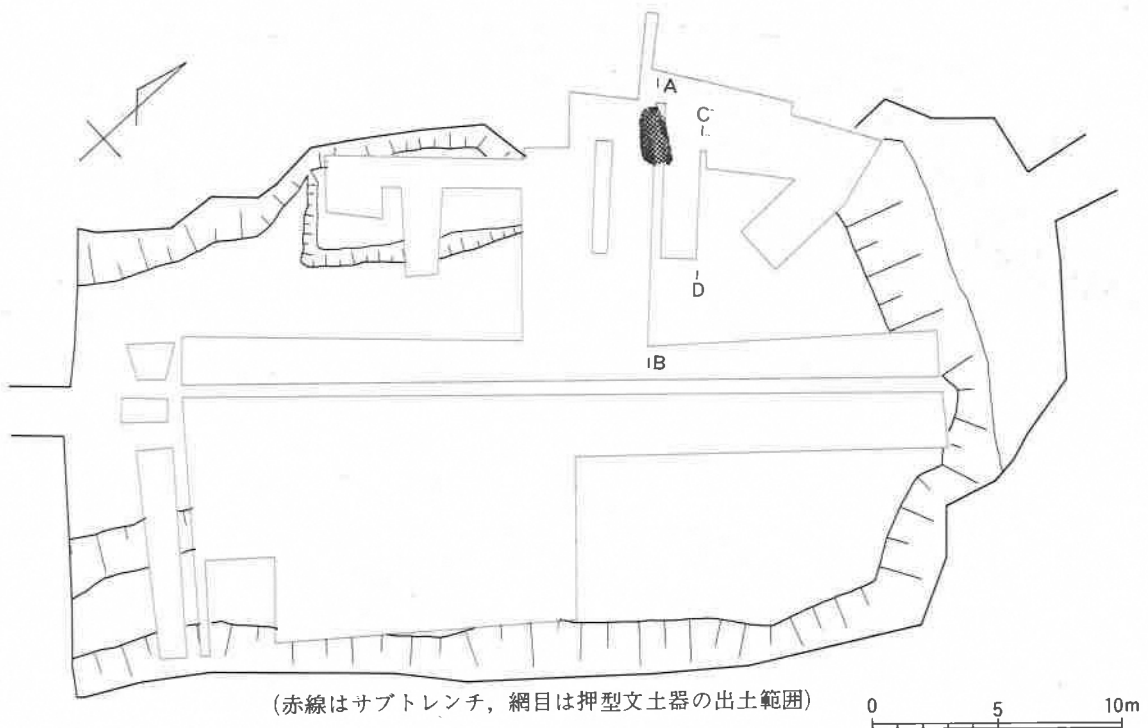
(1) 1トレンチ

a) 層序と遺構

1トレンチは従来、磯山城跡に伴う削平地の1つと考えられていたところで、東西約40m、南北25mを測る。調査前より明らかに人工的な加工面と判断できる平坦地であり、北方への展望もよくきく所であった。

調査の結果、ほぼ全域にわたって表土下15～20cmで地山の岩盤に至り、遺構は認められなかった。この表土中に須恵器片、天目茶碗片が包含されていただけである。ところが、平坦面の西部では、傾斜面に向って地山が深くなっており、堆積層にも変化がみられた。

これは本来やせていた尾根を中世に城郭の曲輪として利用する際、より広い平坦面が必要となり、東西傾斜面を埋めて整地した結果と考えられる。この整地層中（赤褐色粘質土）より完形の須恵器坏が2個体出土していることと、表土中に数多くの須恵器片が包蔵されていたことから、従来古墳が尾根上にあり、城郭の



第10図 第1トレンチ平面図

整地にはこの古墳が破壊されて整地用土に利用されたと考えられよう。

この整地層は平坦面西端部で厚さ80cmを測る。整地層と地山岩盤との間に厚さ20cmの紫暗褐色土の堆積がみられた。この紫暗褐色土層より縄文時代早期末葉の高山寺式土器が出土した。この層中で共伴したものはチャート製の石鏃が1点のみであり、他の遺物はまったく出土しておらず、縄文時代早期の単純層としてとらえられた。土器の出土状況は、半径2m内に3ヶ所投棄された状態であった。

以上のことより、縄文時代早期に生活面があり、古墳時代に古墳が築造され、16世紀に城郭を築く際古墳を破壊して、斜面を整地したことが判った。

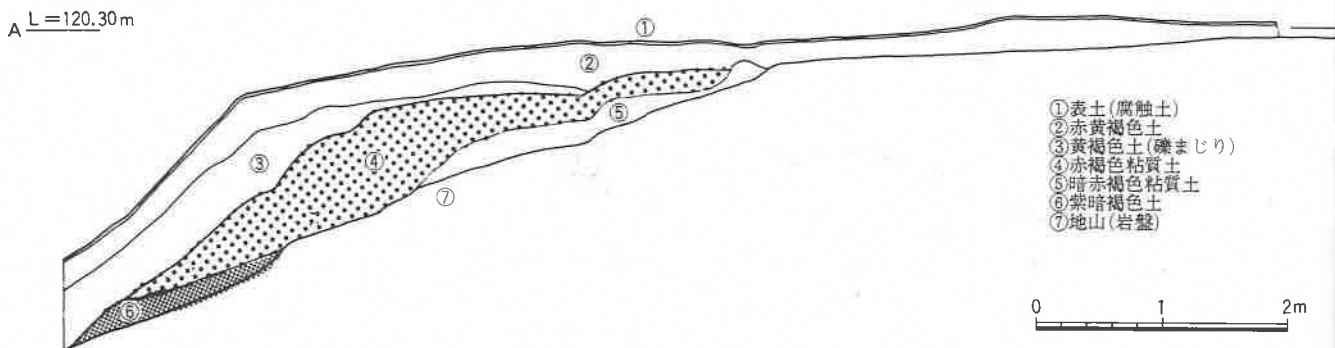
b)遺物

包含層出土遺物 (第13図, 図版68)

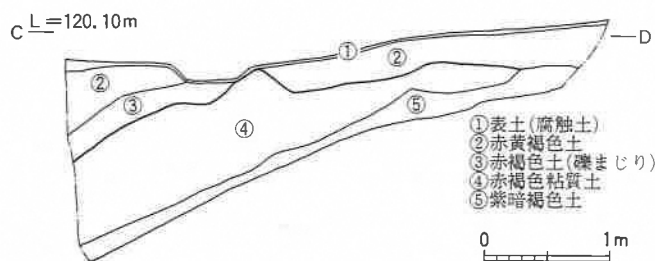
表土および整地層 (赤褐色粘質土) より出土した遺物は須恵器と陶磁器類であった。須器は甕, 瓶, 高坏, 坏等があるが, いずれも小破片である。図示した2点のみ完形で出土している。(1)は口径10.2cm, 器高5cm, たちあがりはやや内傾して口縁に至るが, 高さは1.7cmと高い。端部内面に段を有する。外面底部より3分の1までケズリとなる。(2)は口径10.6cm, 器高5cm, たちあがり部1.7cmを測る。端部内側にはやはり段を有する。たちあがり部は(1)より強く内傾する。ケズリは底部より2分の1となる。これらは田辺昭三の陶邑古窯跡群中TK47に相当するものであろう。

陶磁器はやはり小破片が多く, 図示できたものは3点にすぎない。(3)は美濃の鉄釉の碗である。(4)は瀬戸美濃系の天目茶入れと見られる。底部には糸切り痕を残す。(5)は瀬戸美濃系の灰釉茶碗である。いずれも16世紀と考えられ, 城郭に伴うものであろう。

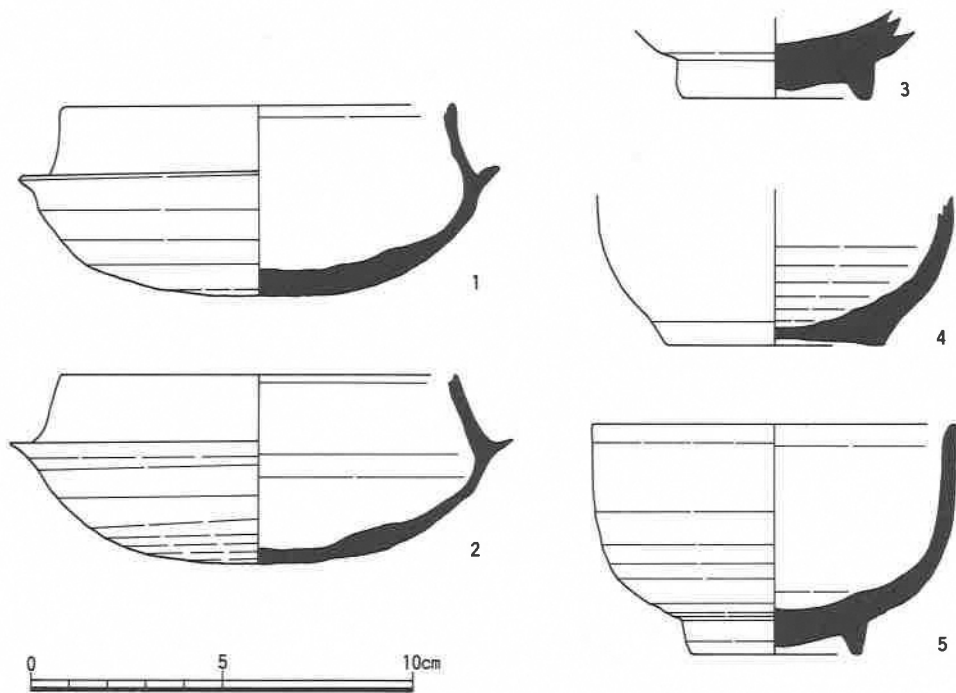
紫暗褐色土層出土遺物 (第15図~第17図, 図版23~図版25)



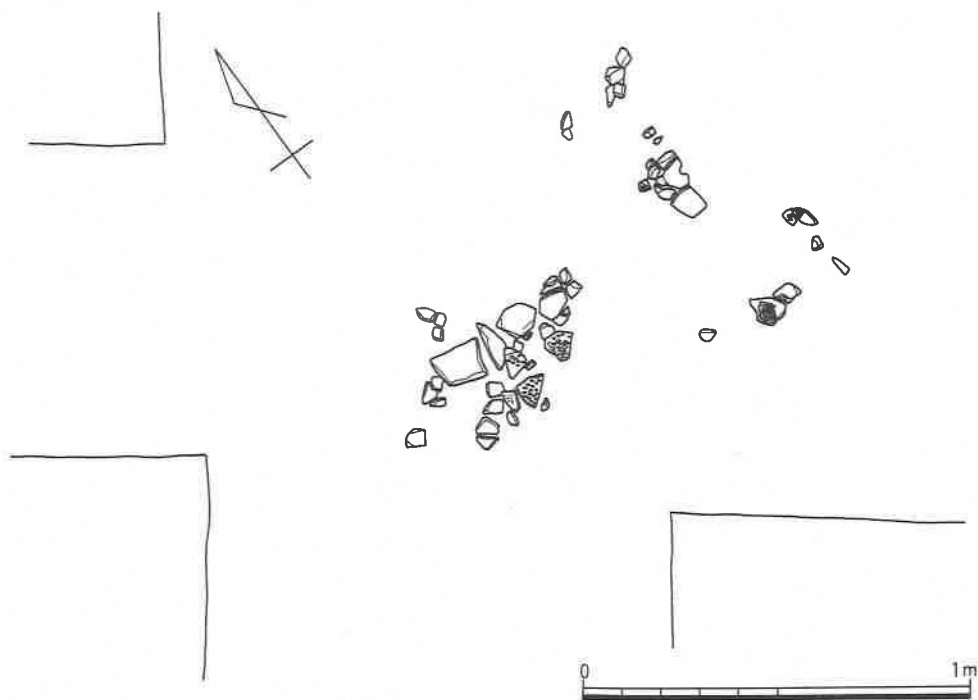
第11図 第1トレンチサブトレンチ北壁 (A-B) 土層断面図



第12図 第1トレンチサブトレンチ北壁 (C-D) 土層断面図



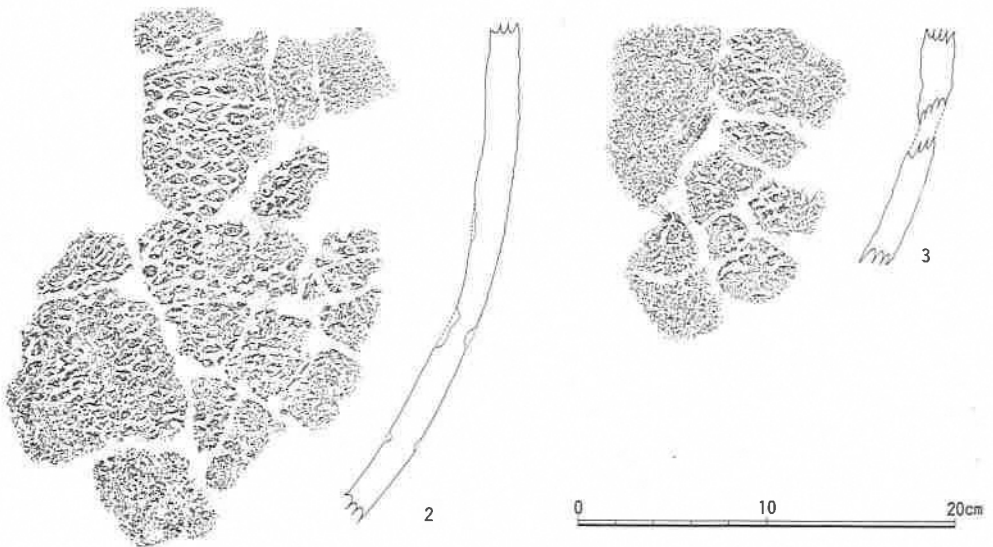
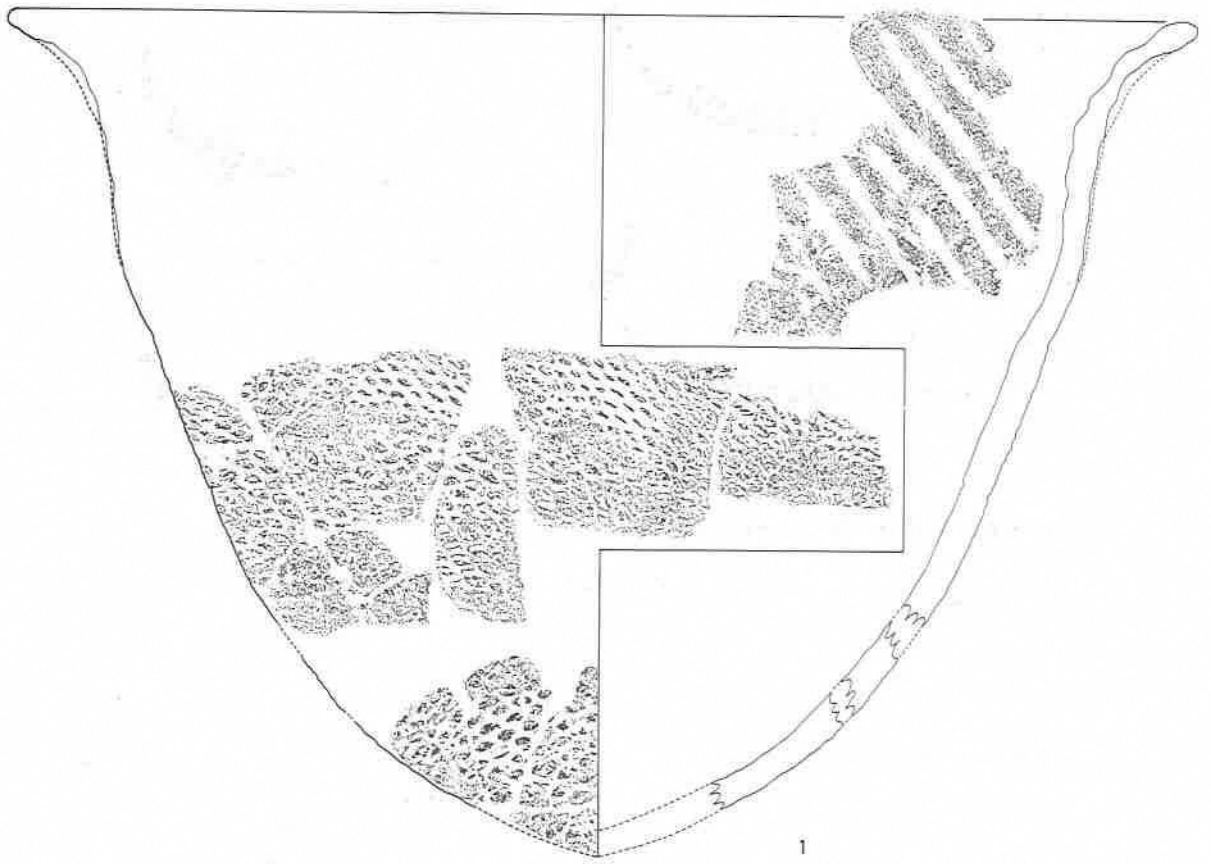
第13図 第1トレンチ包含層出土遺物実測図



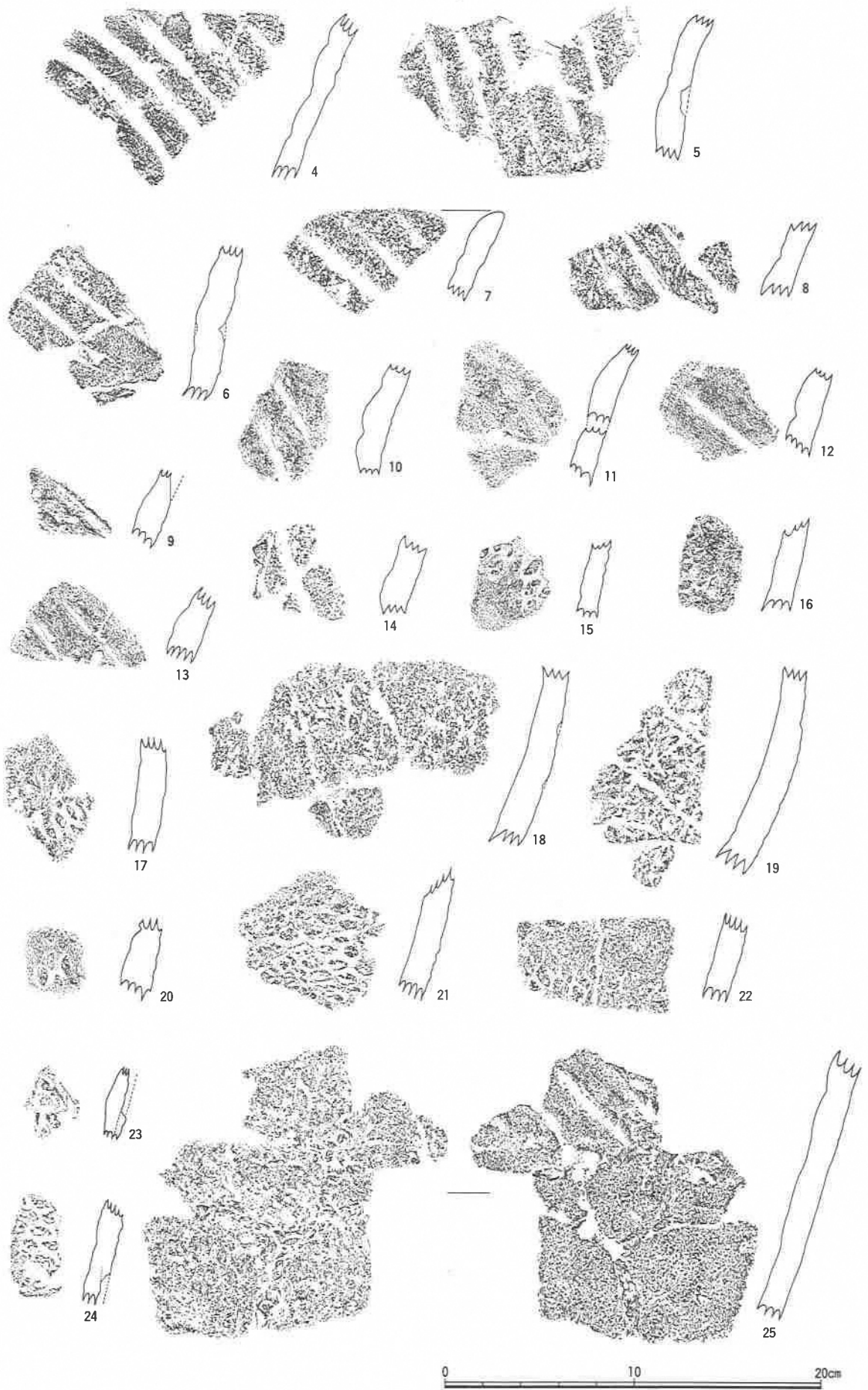
第14図 第1トレンチ高山寺式土器出土状態実測図

紫暗褐色土層中より出土したものは、縄文時代早期の高山寺式土器のみである。出土状況より3個体分の甕であり、外面はすべて回転押型文が施されている。押型文は楕円形のものばかりである。しかし残存度が非常に悪く、押型文の磨滅がいちじるしいため、図示できたものは37点のみである。

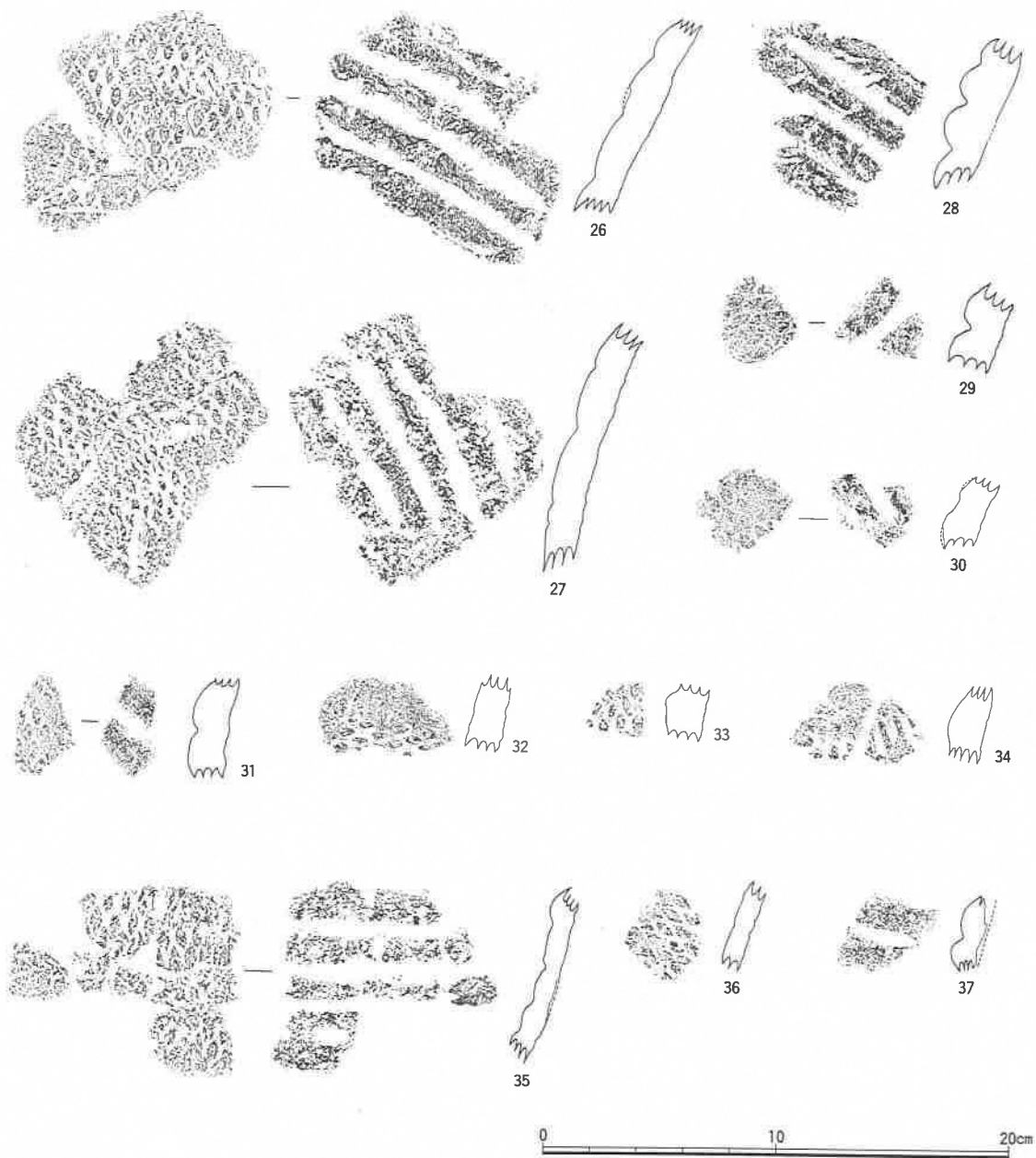
これらは和歌山県田辺市高山寺貝塚より出土したいわゆる高山寺式土器とよばれるものである。(1)は口縁より底部付近まで接合でき、おおよその復元が可能であった。復元した口径は62cm、器高44cmを測る。器形は口縁部が外反し、尖底となる。施文は外面全体に最大長1.2cmの楕円形の押型文を施し、内面は口縁か



第15図 第1 トレンチ紫暗褐色土層出土押型文土器実測図(1)



第16図 第1トレンチ紫暗褐色土層出土押型文土器実測図(2)



第17図 第1トレンチ紫暗褐色土層出土押型文土器実測図(3)

ら胴部にかけて斜行沈線文を施している。外面胴部に剥離が生じており、詳細に観察すると、この剥離した中にも楕円の押型文が施されており、この土器は製作時に口縁部と胴部を別々に作り、後にはめこんで、接合したものと考えられる。これは剥離を受けない胴部に重ねられた押型文からも納得できる。土器の大きさ、制作技法ともに福井県破入遺跡出土土器に類似する。(2)～(3)はともに(1)と同一個体である。器壁の厚さは1.5cmにおよび繊維の混入は肉眼では認められない。破片の反りよりいずれも胴部より底部にかけてのものと考えられる。

(4)～(25)も(1)～(3)と同一個体と考えられるが接合は不可能であった。これらの外面に残る押型文は長径1.2cm、短径0.6cmである。器壁の厚さは1.5～1.8cmを測る。(23)～(24)は、外面が剥離しているが、その剥離面にも楕円の押型文が認められ、(1)と同様の製作課程をへたものであることがわかる。さて、これら(1)～(25)の特徴は楕円形の押型文が大きく、いびつに施されていること、内面の斜行沈線文が浅く、沈線間の畝が丸味を帯びた扁平であるといえる。また胎土は非常に粗く、2～5%の岩粒を多量に含んでいる。

なお(9)、(11)の外面には径1.6cm程度の凹があり、木の実押圧痕と見られる。

(26)～(34)は別個体である。外面の楕円文は(1)～(25)に比べて小さく、長径0.9cm、短径0.5cmを測る。その施文も密である。また内面の斜行沈線文も深く削り込まれている。(27)は内面斜行沈線がとぎれていることより、胴部付近の破片と推され、外面は幅3.1cmにわたり、押型文が乱れている。これはやはり、製作時に、胴部で継ぎたした際生じた乱れであろうと考えられる。(28)の斜行沈線は非常に深く0.5cmにも及んでいる。そして何度か押し引いて沈線文を施したらしく、施文工具の押し引き痕を残している。(1)～(25)の色調が暗黄褐色であるのに対して、(26)～(34)は赤褐色を呈する。胎土はやはり粗く2～5㎍の岩粒を多量に含んでいる。器壁も1.5～1.8cmと厚い。

(35)～(37)は、また別の個体で、楕円形の押型文が菱形に近く、規則的に密に施文している。押型文は長径1.2cm、短径0.6cmを測る。また内面の斜行沈線は器形の反りからみると、横行沈線文とも呼べそうに、横位に施している。胎土は前述2個体同様、岩粒を多く含む粗い胎土である。色調は赤褐色を呈する。なお前述2個体との大きな違いは、この(35)～(37)は器壁が非常に薄いということであり、0.9～1.2cmしかない。

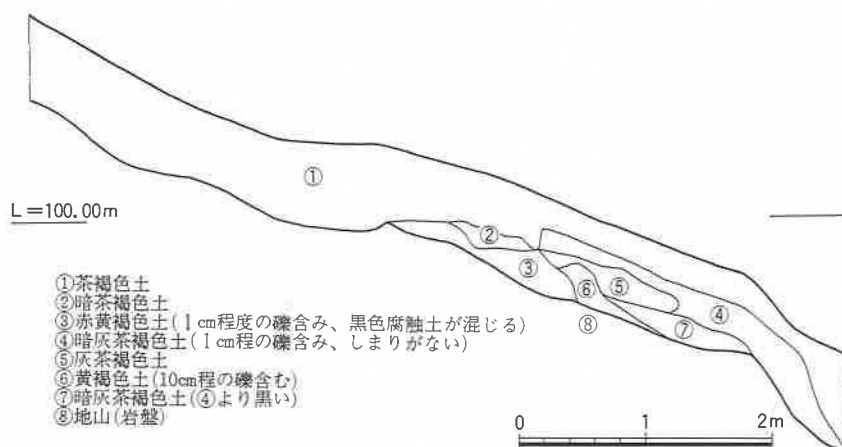
(2)2 トレンチ

第1トレンチと磯山北端削平地を含む間に設定した。当初中世城郭に伴う削平地と考えられていたが、調査の結果、明らかに地山上に盛土がおこなわれてはいたが、出土遺物が皆無であったため、時代は決定できなかった。

(3)3 トレンチ

a) 層序と遺構

2トレンチより東に5ヶ所の中世山城に伴うと見られる削平地らしき平坦地があったので、その性格を明らかにするためにトレンチを設定した。調査の結果、表土下の包含層中より縄文時代早期の押型文土器、及び須恵器、陶磁器片の出土をみた。この遺物を包含する層が人為的に段を形成しており、地山面は尾根より山麓にかけて、一切の平坦面を有していない。この平坦面の時期は陶磁器が16世紀後半のものと見られることより、それ以降と考えられ、あるいは磯山城に伴うものとも考えられる。なお、包含層と地山との間で木炭を採集したため、参考までに¹⁴Cの鑑定をおこなった。結果は付論を参照されたい。



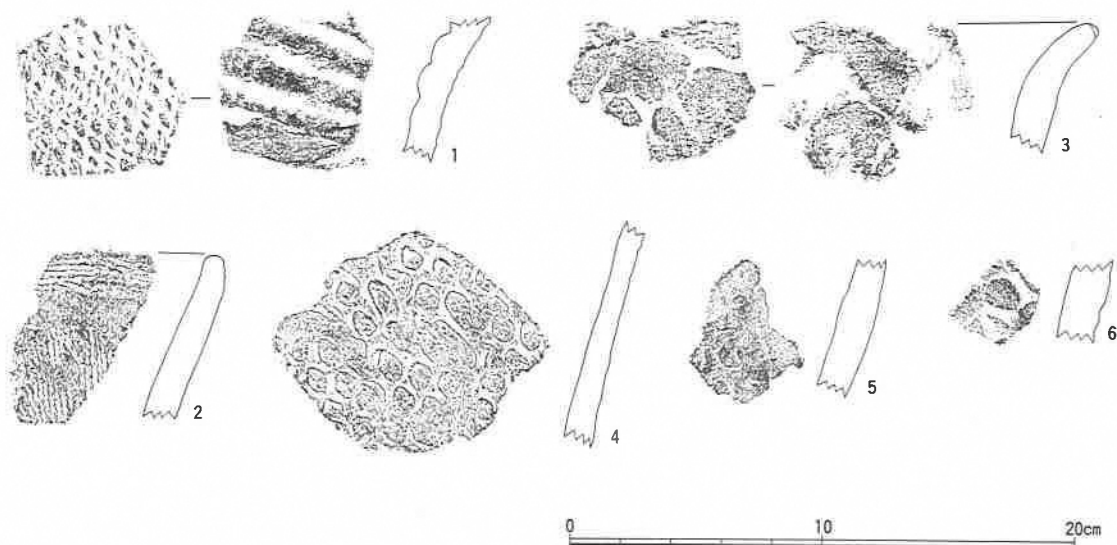
第18図 第3トレンチ3段目北壁断面図

b)遺物 (第19図, 図版26)

須恵器, 陶磁器はともに小片であり, 図示できなかった。ここでは縄文式土器のみ図示しておく。(1)は楕円形の押型文を外面に施文し, 内面斜行沈線文を施す。高山寺式土器である。(2)は口縁端部外面に横位, 体部に縦位の撚糸文を押圧施文した土器で, 胎土中にわずかながら繊維の混入が認められる。愛知県先苜見塚第1地点第2類3種に相当するものであろう。(3)~(6)は外面楕円形押型文を施し, 内面(3)は口縁部であるが斜行沈線文を施さず, 平滑に調整している。外面の楕円文は異常に大きく, その押捺は浅い。(4)には繊維の混入も顕著に認められる。岐阜県不老井遺跡出土土器に類似する。

(4)4 トレンチ

1 トレンチの南西側, 磯山頂上部へ至る斜面にトレンチを設定した。表土直下で地山の岩盤が露出し, 遺構, 遺物は皆無であった。



第19図 第3トレンチ出土土器実測図

第2項 A~Bトレンチの遺構と遺物

(1)Aトレンチ

a)歴史時代の層序と遺構

調査当初, 山麓部分は磯山城の居館と推定していたが, 尾根部分で高山寺式土器の出土を見たため, 縄文時代の遺構の検出も調査の目的に加えられた。Aトレンチは管理棟の建設予定地で, 地盤が弱く, 基礎にパイルを打ち込むこととなっていたため, 建設予定地全域14m×28mにトレンチを設定した。

層序は第Ⅰ層が竹林の根による攪乱土で, 第Ⅱ層が黄褐色土で, この層中に縄文~須恵器に至る遺物が含まれていた。この第Ⅱ層を除去すると西から東へ傾斜する面があり, この面を掘り込んで, 住居跡, 方形竪穴状遺構, 多数のピット, 溝状遺構を検出した。これらは遺構内出土の須恵器より7世紀の遺構であると考えられる。以下各遺構の概略を記す。

SB01

トレンチ西端に, 直径10mの竪穴状の遺構を検出した。残念ながら円型になると考えられる遺構の半分のみがトレンチ内に検出できたので, 全体像は不明である。調査できた東半分は, 遺構面より80cmも掘り込ん



第20図 A トレンチ検出遺構図

であり、埋土中に多量の縄文式土器を含んでおり、山部より流入したものと考えられる。また炭を含んだ層が三重に堆積していた。最下面より須恵器が多量に出土しており、この遺構の年代は、これら須恵器の時期—7世紀—のものとしておきたい。ここでは一応住居跡としてとらえているが、直径が巨大であり、他の施設である可能性も高い。なお、このSB01等の西端の遺構は地山を掘り込んでいたが、東に行くに従って、整地した層を掘り込んで遺構が存在する。

SB02

Aトレンチでは多数のピットが検出されたが、柱間の通るものはほとんどなかった。このSB02は1間×1間の小規模な掘立柱建物で、柱間は4面とも柱掘方心で2.1mを測る。

SB03

SB02と同様、1間×1間の小規模な建物であったと思われる。柱間は南北が柱掘方心で1.8m、東西が柱掘方心で1.1mを測る。ややいびつな長方形を呈するが建物の方位はSB02とほぼ同一となっている。

b)歴史時代の遺構内出土遺物(第23図～第24図、図版26)

遺構はすべて7世紀のものと考えられるが、そのベースになる第Ⅲ層や遺構埋土中からも流入した縄文式土器が出土している。ここではそれらについてのみ図示し、概説する。

SK2

(1)は外面に楕円形の押型文を施す早期の土器である。内面は斜行沈線を施さない。(2)～(4)は早期条痕文系の土器で、外面に貝ガラによる爪形文を施す。(2)、(4)は口縁頂部に刻目を、内面にも爪形文をそれぞれ施している。粕畑式に相当するものであろう。(5)～(6)は中期の土器で、(5)には横位の爪形と縦位の爪形を配しており、船元Ⅰ式に、(6)は撚りの固い縄文を全面に施し、アナガラ属の貝による刺突文を配しており、船元Ⅱ式に、それぞれ相当するものと考えられる。

SK3

(8)は早期の撚糸文土器で、押型文と併行するものであろう。(9)は早期条痕文土器で、繊維の混入が認められる。外面に二条の爪形を、内面に一条の爪形をそれぞれ施し、口縁頂部には刻目を施している。粕畑式に相当するものである。(10)は中期の土器で口縁部にアラガラ属の貝を連続押捺し、突帯より下は、骨状の連続爪形文を鎖状に施す。船元Ⅱ式に相当するものであろう。(11)は晩期の突帯文土器である。突帯上の刻目は不規則でいびつである。

SK4

(7)は早期の押型文土器である。外面は、磨滅がいちぢるしいが楕円形の押型文を施し、内面は斜行沈線文を施す。高山寺式に相当するものであろう。

SK7

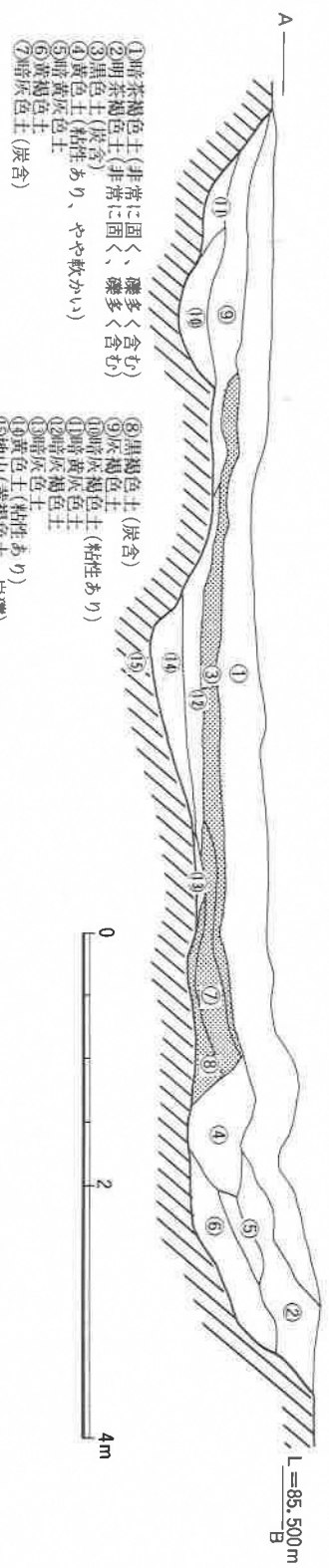
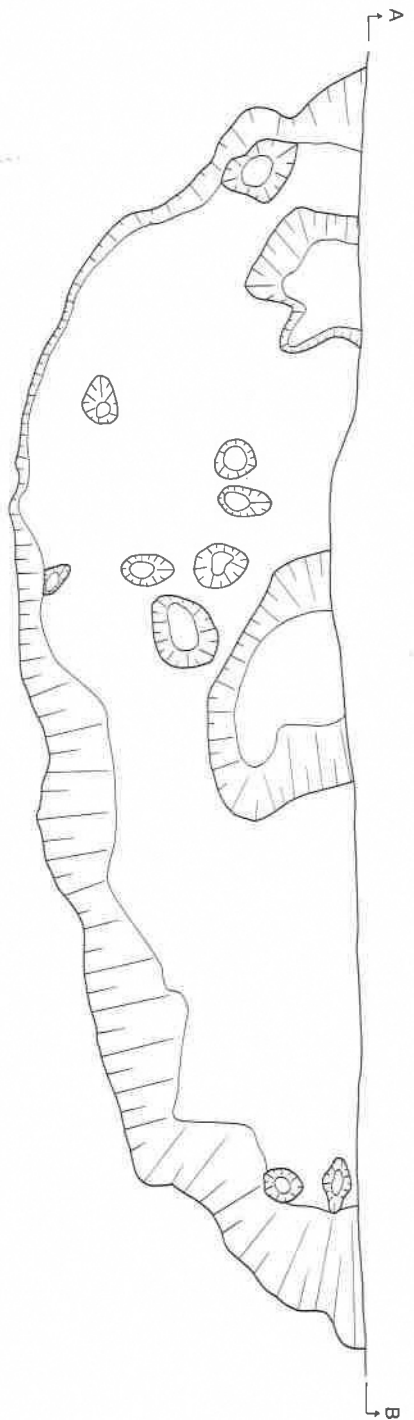
(12)は中期の土器である。(13)は後期の沈線文土器で、沈線内がていねいにナデられている。元住吉山Ⅱ式相当の時期。

SK9

(14)～(15)はいずれも早期条痕文系土器である。繊維はともに顕著に認められる。(14)は外面に爪形文を施し、口縁頂部に刻目文を有する。粕畑式に相当するものであろう。(15)は条痕文のみの無文土器である。口縁頂部に刻目を施している。胎土中に雲母を多量に含んでいる。

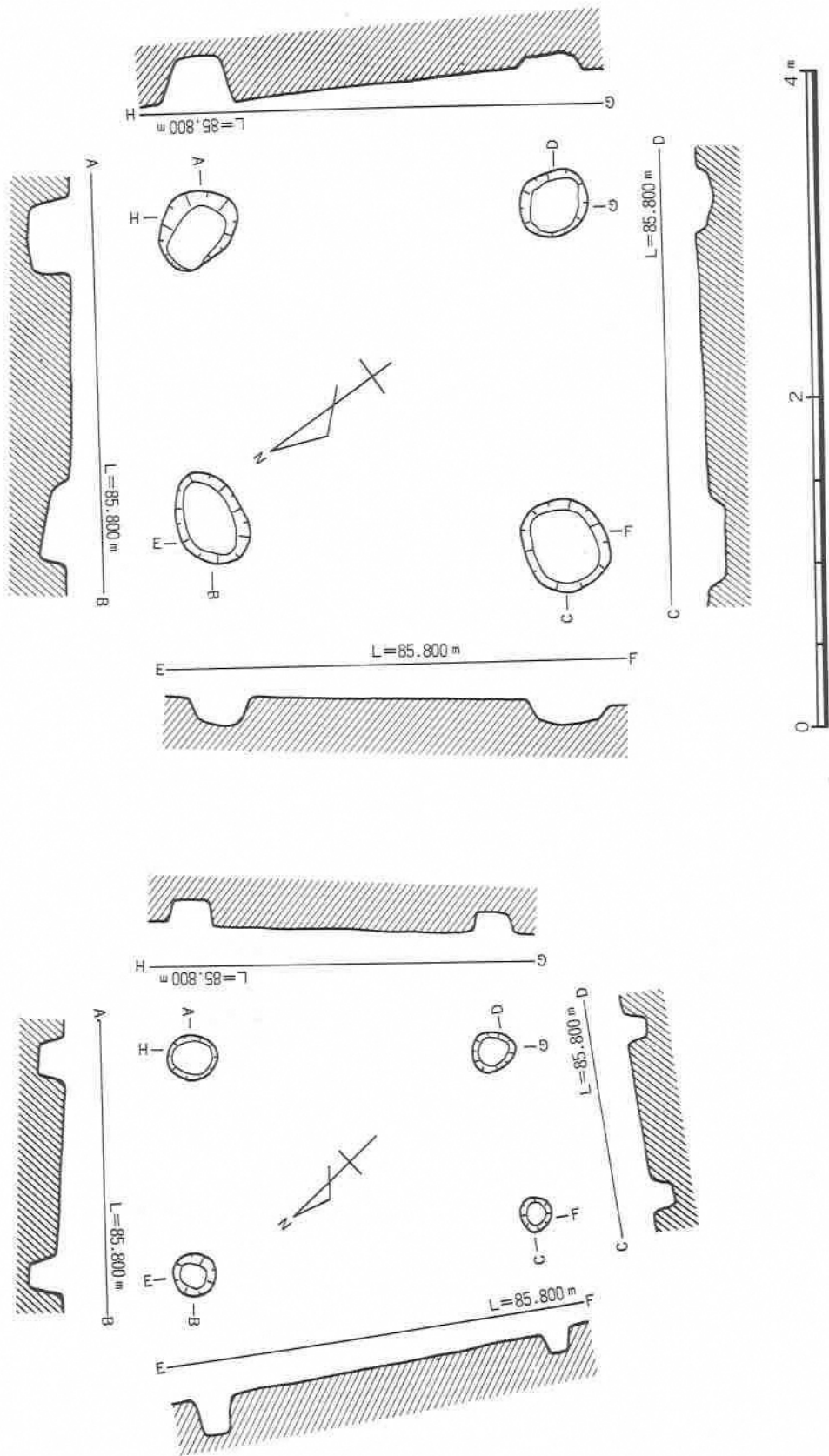
P1

(17)～(18)は早期の土器である。(17)は繊維が認められるが、(18)ではほとんど認められない。(17)は条

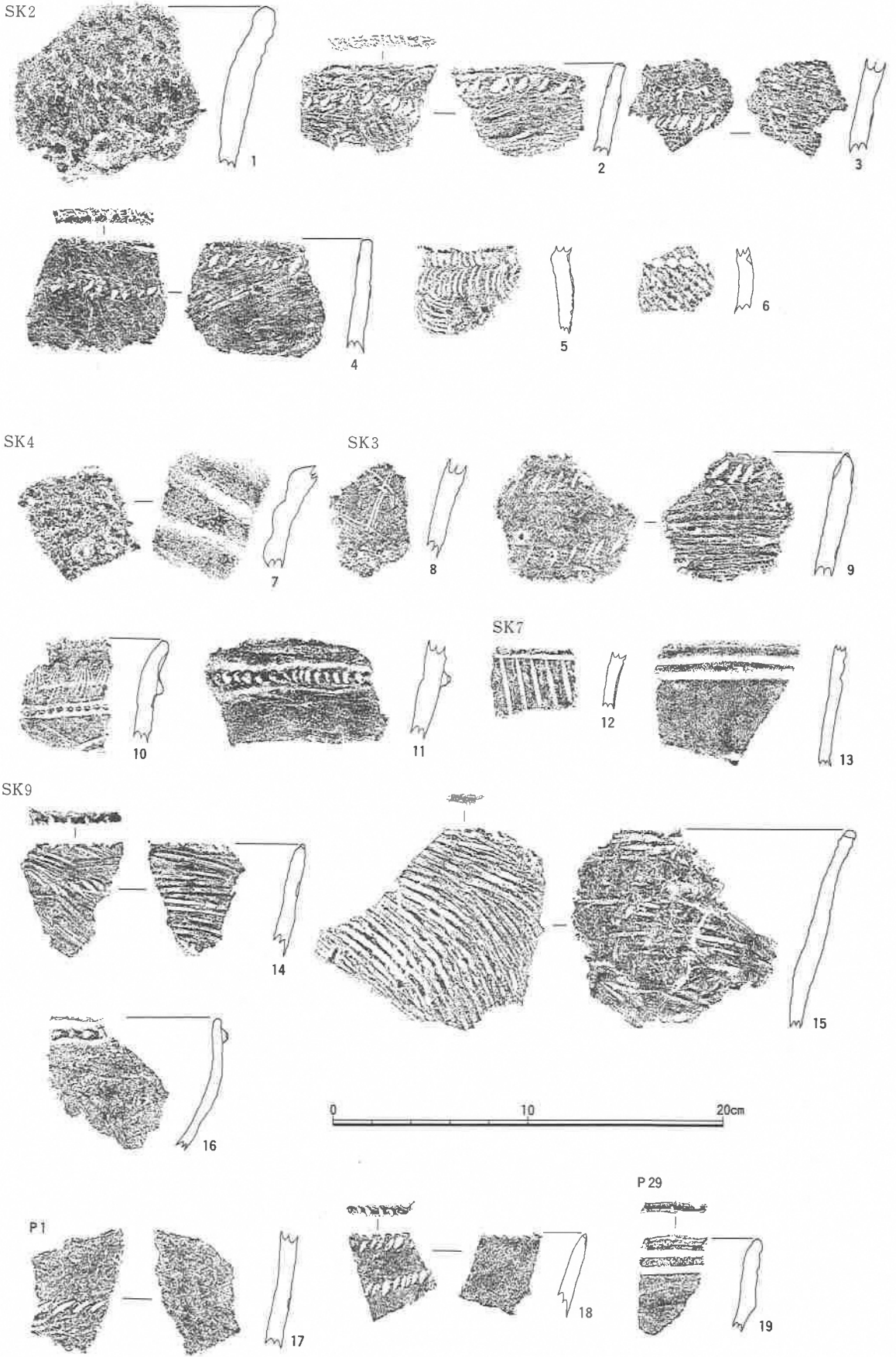


- ①暗茶褐色土 (非常に固く、礫多く含む)
- ②明茶褐色土 (炭含)
- ③黒色土 (粘性あり、やや軟かい)
- ④黄色土 (粘性あり)
- ⑤暗黄灰褐色土
- ⑥黄褐色土
- ⑦暗灰色土 (炭含)
- ⑧黒褐色土 (炭含)
- ⑨灰褐色土
- ⑩灰灰褐色土 (粘性あり)
- ⑪暗黄灰褐色土
- ⑫暗灰色土
- ⑬暗灰色土
- ⑭黄色土 (粘性あり)
- ⑮地山 (黄褐色土、岩礫)

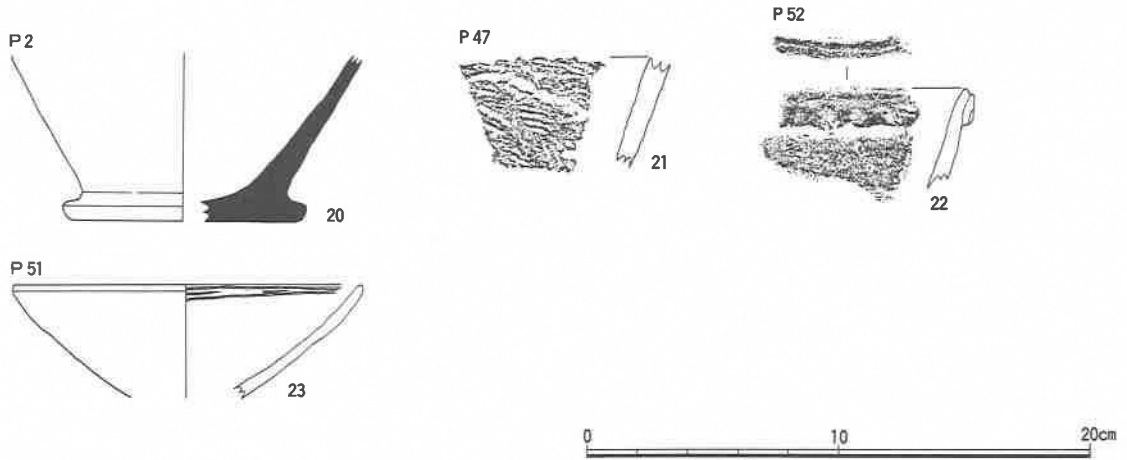
第21図 AトレンチS B01実測図



第22図 A トレンチ SB02 (右), SB03 (左) 実測図



第23図 A トレンチ遺構埋土出土土器実測図(1)



第24図 A トレンチ遺構埋土出土土器実測図(2)

痕文が認められるが、(18)はナデられている。これらのことから、(17)は粕畑式、(18)は石山式に相当するものではないかと考えられる。

P 29

(19)は後期から晩期にかけての沈線文土器で頸部より口縁部にかけて屈曲する器形で、口縁部に2条の沈線を施す。沈線は断面U字状にまとまる。

P 2

(20)は須恵器のねり鉢の底部である。

P 47

(21)は早期の条痕文系土器で、繊維が混入しており、施文は押し引きに近い連続爪形文を施している。

P 52

(22)は晩期の突帯文土器である。口縁と突帯とを、ほぼ同時に仕上げようとしている製作は、晩期も後葉、長原式に相当するものであろう。

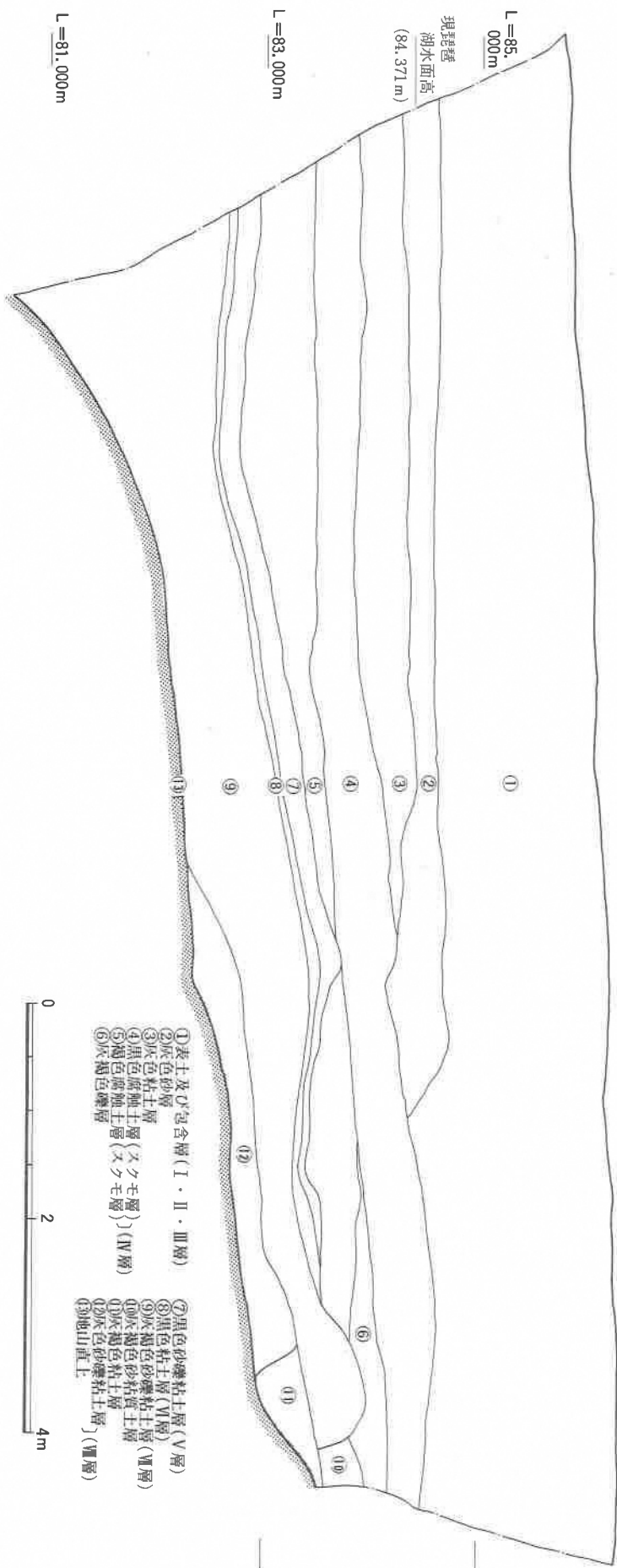
P 51

(23)は晩期の浅鉢で、内外面ともに磨かれている。内面口縁部に2条～3条の細沈線が施されている。

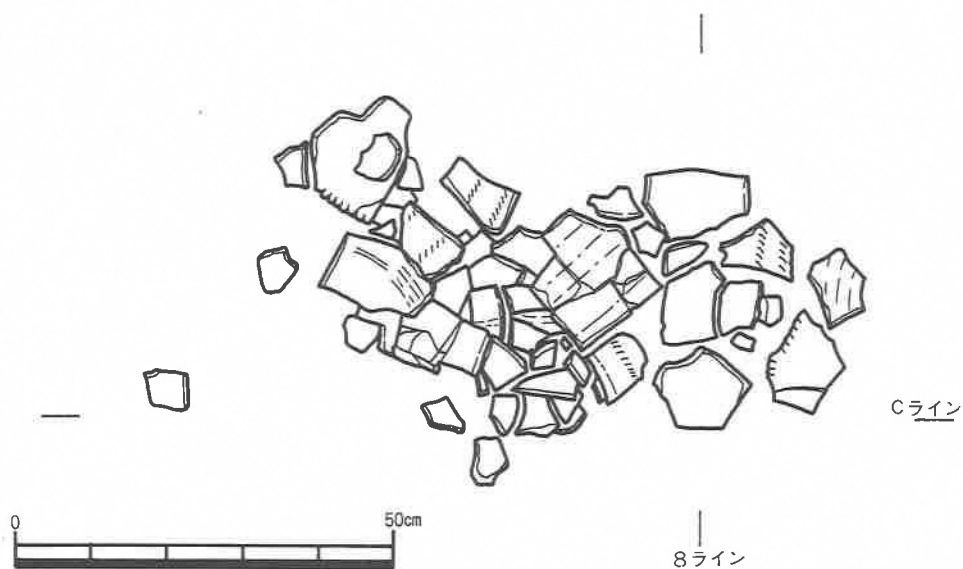
㊦縄文時代の層序と遺構

前述したように第Ⅲ層（黒色粘土層）を掘り込んで7世紀の遺構を検出したのであるが、この遺構面のベースにも土器片が多く含まれていたため、下層にも遺構が存在するのではないかと考えられた。7世紀の遺構面調査終了後、ただちに下層の調査を開始した。この結果、縄文時代早期～須恵器に至る遺物を包含する堆積層を5層確認することができた。第Ⅲ層を除去すると、第Ⅳ層は非常に厚く堆積した黒色・褐色の腐触土（スクモ層）で植物遺体が非常に多く含まれていた。第Ⅴ層は黒色砂レキ粘土、第Ⅵ層は黒色粘土、第Ⅶ層は灰褐色砂レキ粘土、第Ⅷ層は地山直上面、灰色砂レキ粘土という状態であった。これら各層には、おびただしい縄文時代の遺物が含まれており、別に1節を設けて、各堆積層ごとに後述する。

このように、多量の遺物が出土したのであるが、縄文時代の住居跡等、生活遺構は検出されなかった。しかし、Aトレンチの東側ほぼ中央部、標高83.0m付近で埋葬施設を検出した。



第25図 Aトリンチ南壁土層断面図



第26図 A トレンチ縄文式土器出土状態実測図

S X 1

この埋葬施設 S X 1 に葬られた遺体は 2 体以上と考えられるが、明らかに埋葬状態を残すものは 2 体のみである。残念ながら墓壙等の掘り込みは認められなかった。1 体は頭部より足先まで、ほぼ原形をとどめて出土している (2 号人骨)。この 2 号人骨は頭蓋頂部を西にして、まずおお向きに寝かせ、腰の部分より足をまっすぐに頭部まで折りまげた、いわゆるエビ折り状の、きわめて特異な葬法状態を示している。このように極端な折りまげ方は、死後硬直が起こるまでにヒモなどでしばらなければならなかったと考えられる。現在、このような埋葬法の出土例は他に聞かない。人骨の特徴等については付論を参照されたい。ここでは性別が男性、年齢 30 代後半から 40 歳代、身長 165cm~170cm ということのみを記しておく。

1 号人骨は腰より下部のみが残存していた。この葬法は、腰より上部が残存しないが、頸骨と大腿骨をヒザ部分で折り曲げており、仰臥の屈葬であったと推される。性別は男性で、成人と考えられる。

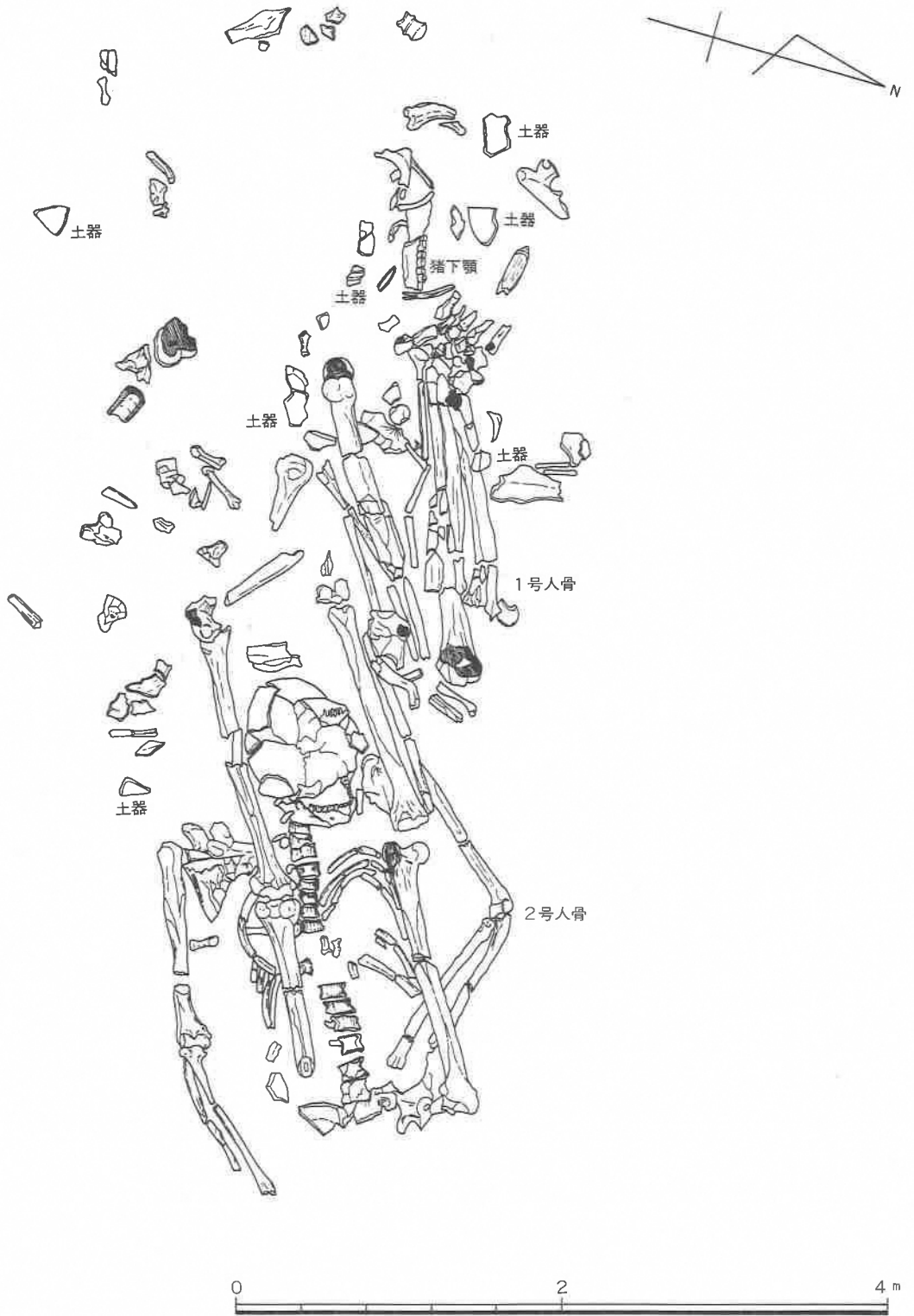
これら 2 体の埋葬順序は、1 号人骨を埋葬したのち、その横にくり返し 2 号人骨を葬ったと考えられる。これは 1 号人骨の上半身が崩壊しており、2 号人骨が完形であり、かつ周辺に 1 号人骨の骨片が散乱していることより明らかである。

さて、検出した 2 体の人骨の年代であるが、人骨と同一層で出土している土器が高山寺式から塩屋式に至るものであり、特に粕畑式に位置づけられる条痕文系土器が最も多く出土している。これら出土土器には明らかに時間差があり、決定しがたいが、最も新しいものと併行すると仮定して、早期末前期初頭の塩屋式の時期としておきたい。また人骨そのものを他遺跡出土の縄文人骨と比較しても早期最末期のものであろうと推される (付論参照)。

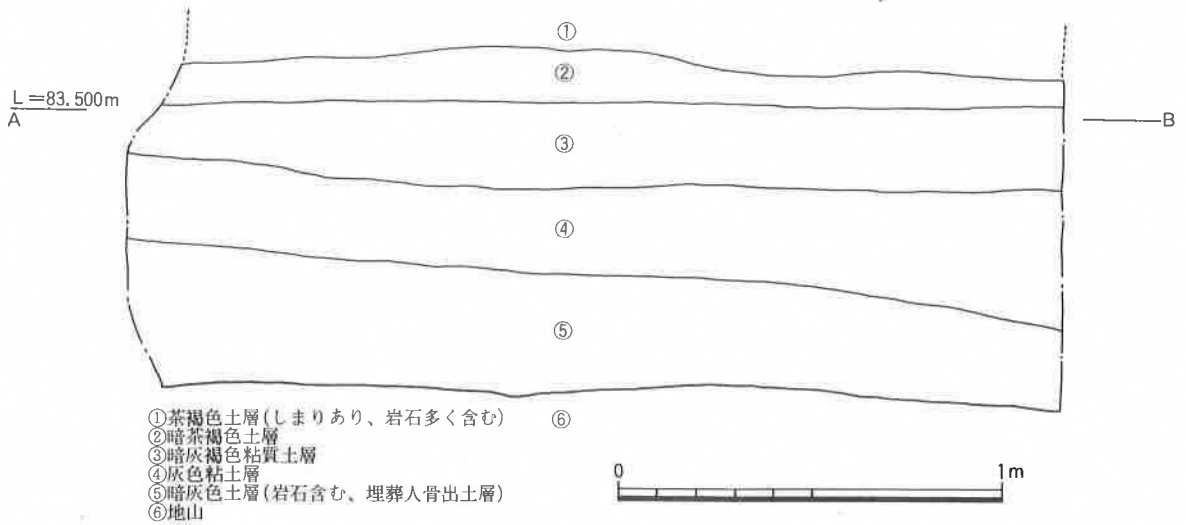
さらに人骨に付着していた土より火山ガラスが検出されており、測定の結果アカホヤの火山ガラスであることが確認できた。火山ガラスの移動は充分考えられるが、アカホヤ噴火前後の埋葬は、土器年代、人骨比較年代とほぼ一致し、無視できない (付論参照)。

ただ、人骨付近で採集した木片により ^{14}C の測定をおこなったが、 $4230 \pm 60 \text{ B.P.}$ という結果であった。採集に問題があったのか、あるいは、採集資料が上層スクモの沈下物であったのか、検討を要する (付論参照)。

最後に埋葬時の状況であるが、縄文時代早期の調査地周辺は土層よりみて低湿地ではなかったかと考えられ、そこに墓壙を掘らず、直接折りまげた遺体を投棄に近い状態で葬ったと考えられる。これは人骨周辺に投棄された多量の獣骨や土器片より見ても考えられることである。



第27図 Aトレンチ埋葬施設(SX1)検出状態実測図



第28図 Aトレンチ埋葬施設(S×1)北壁(A-B)土層断面図

d) S X 1 周辺出土の遺物 (第29図～第31図, 図版27～図版28)

S X 1 周辺で出土した遺物はすべて縄文式土器であった。(1)は楕円形の押型文土器で、楕円は7×7㎝でほぼ円形に近いものである。土器片中央に1.8cm幅で押型文の重複が見られ、その内側には粘土のまきあげ痕も認められる。高山寺式に相当するものであるが、器壁の厚さは1cmとやや薄い。

(2)は口縁と胴部の境に段を有し、幾何学文を施している。この幾何学文の交点に竹管による円形刺突があり、早期鶴ヶ島台式に相当するものであろう。(3)は幅の広い沈線による幾何学文を施す。口縁端部は平坦であり、内外面より刻目を施す。いずれも胎土中繊維が認められる。

(4)～(8)は、早期茅山下層式に相当するものと考えられる。(4)～(5)には明瞭な段が認められ、文様はいずれも沈線による区画内に縄文、爪形文を施している。

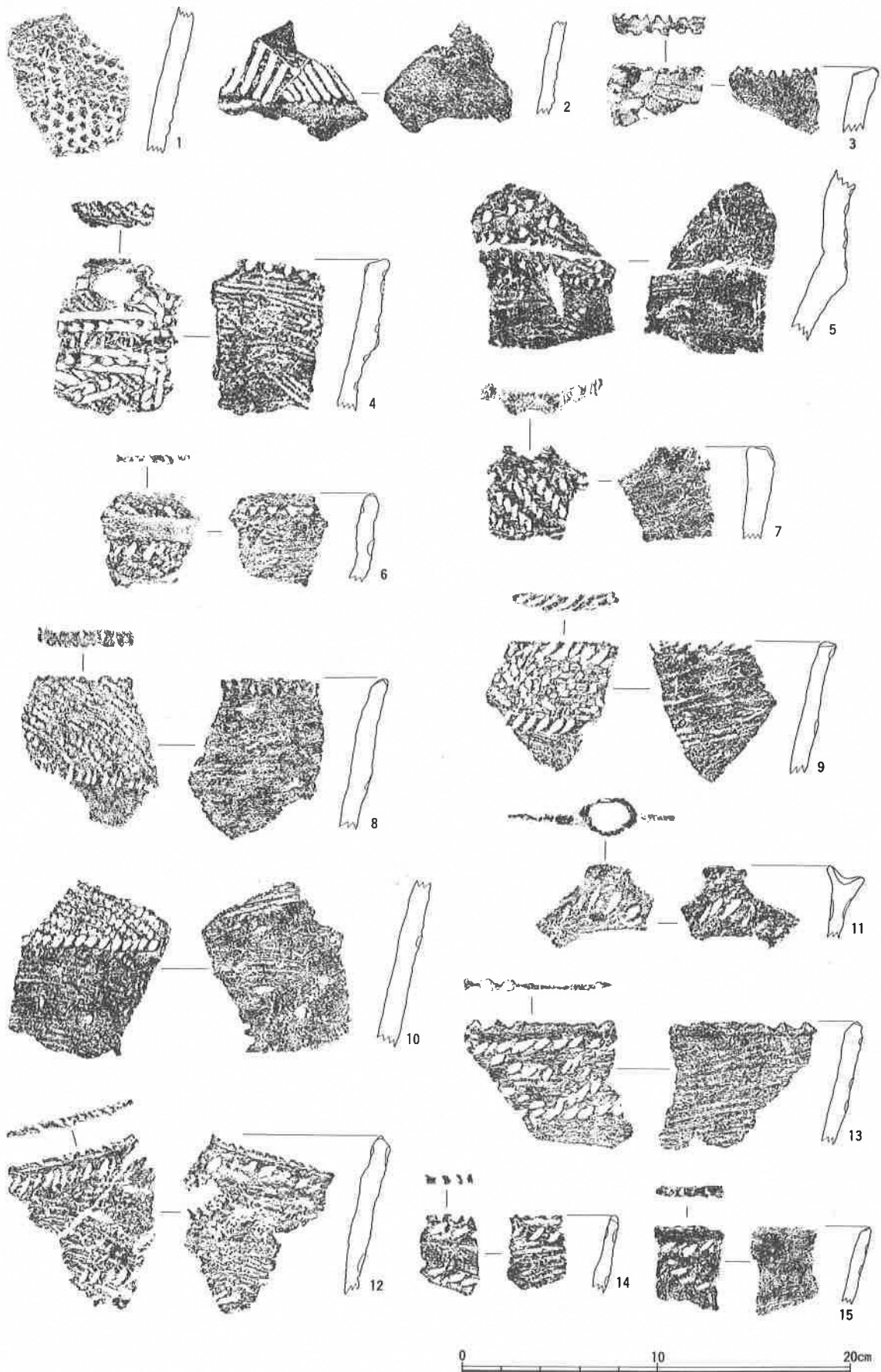
(9)～(21)は、茅山下層式から粕畑式への移行段階の土器群であり、東海地方では八ツ崎Ⅰ式と呼ばれるものである。(9)～(10)はすでに口縁部と胴部を区画する段を有さず、その痕跡として、爪形文をその部分に施している。口縁部の施文は縄文である。(9)は口縁端部に上面より刻目を施す。(11)は凹んだ皿状突起を口縁に有し、(12)は波状の口縁となる。文様は次の粕畑式のように2条の水平な爪形文ではなく、口縁部と胴部付近に2条の平行する爪形文を施し、その区画内に波状の爪形文を施している。また(17)はこの爪形文間に指頭圧痕文があり、茅山下層式の系譜を引き継いでいる。口縁は残存しているものの端部にはすべて刻目が施されており、(16)は端部内外両面より刻目を施している。(11)～(12)、(14)は内面にも爪形文を施す。

(22)～(38)は、水平の単純な爪形文のみを施す条痕文系土器で、粕畑式に相当するものである。口縁の残存するものは、すべて端部に刻目を有している。また(23)～(24)は内面にも爪形文を施す。(38)の爪形施文は貝殻腹縁でおこなっている。

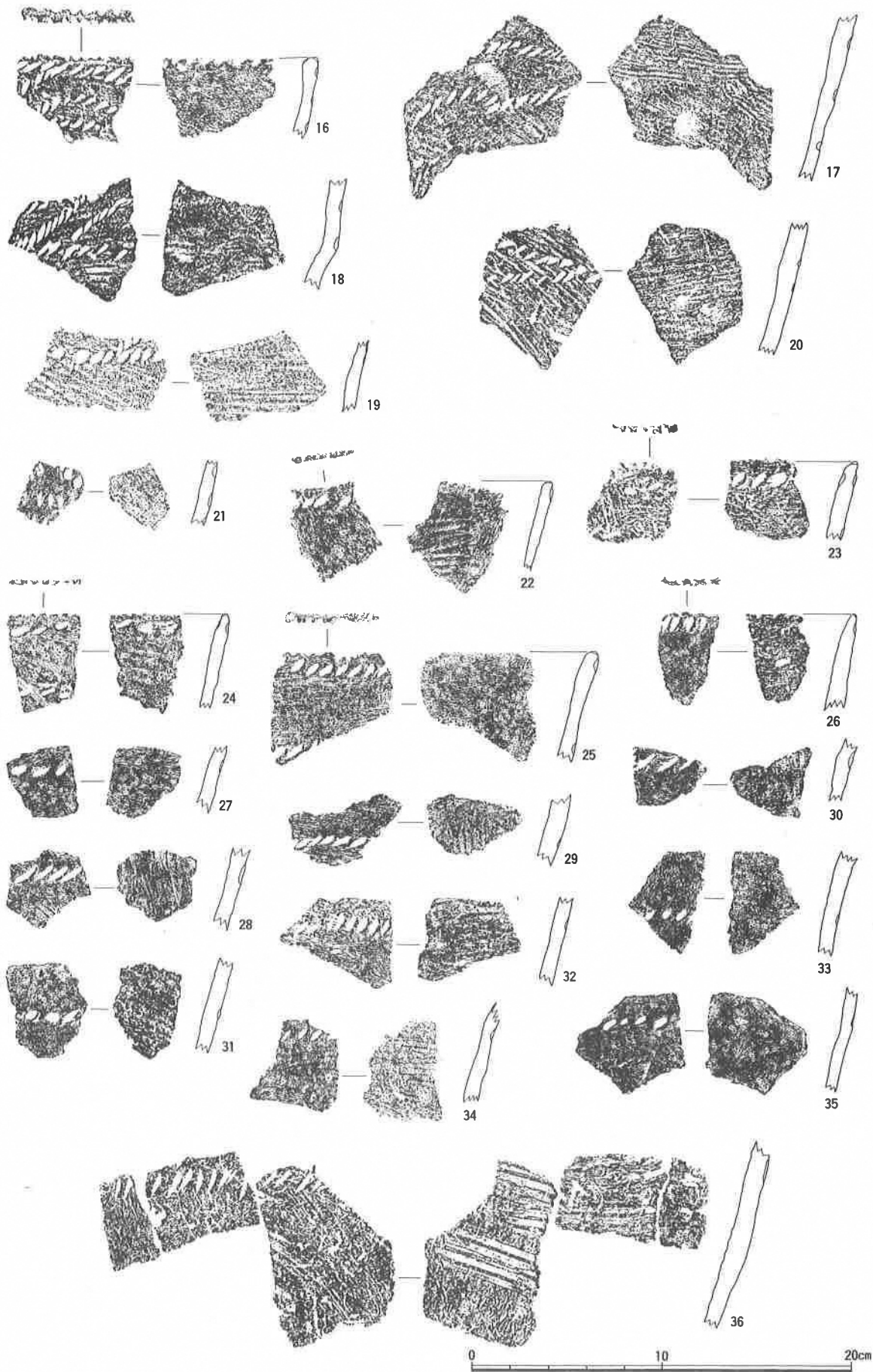
(39)は低い隆帯を有し、隆帯上に爪形文を施す土器で、入海Ⅱ式に相当するものである。

(40)～(42)は、すでに隆帯もなく、入海Ⅱ式以降のものと考えられ、条痕文もナゲ消され平滑となっていることより、石山式に相当するものであろう。ただ石山式が一般に3～5㎝の薄手土器であるのに対し、これら3点はやや器壁が厚い。

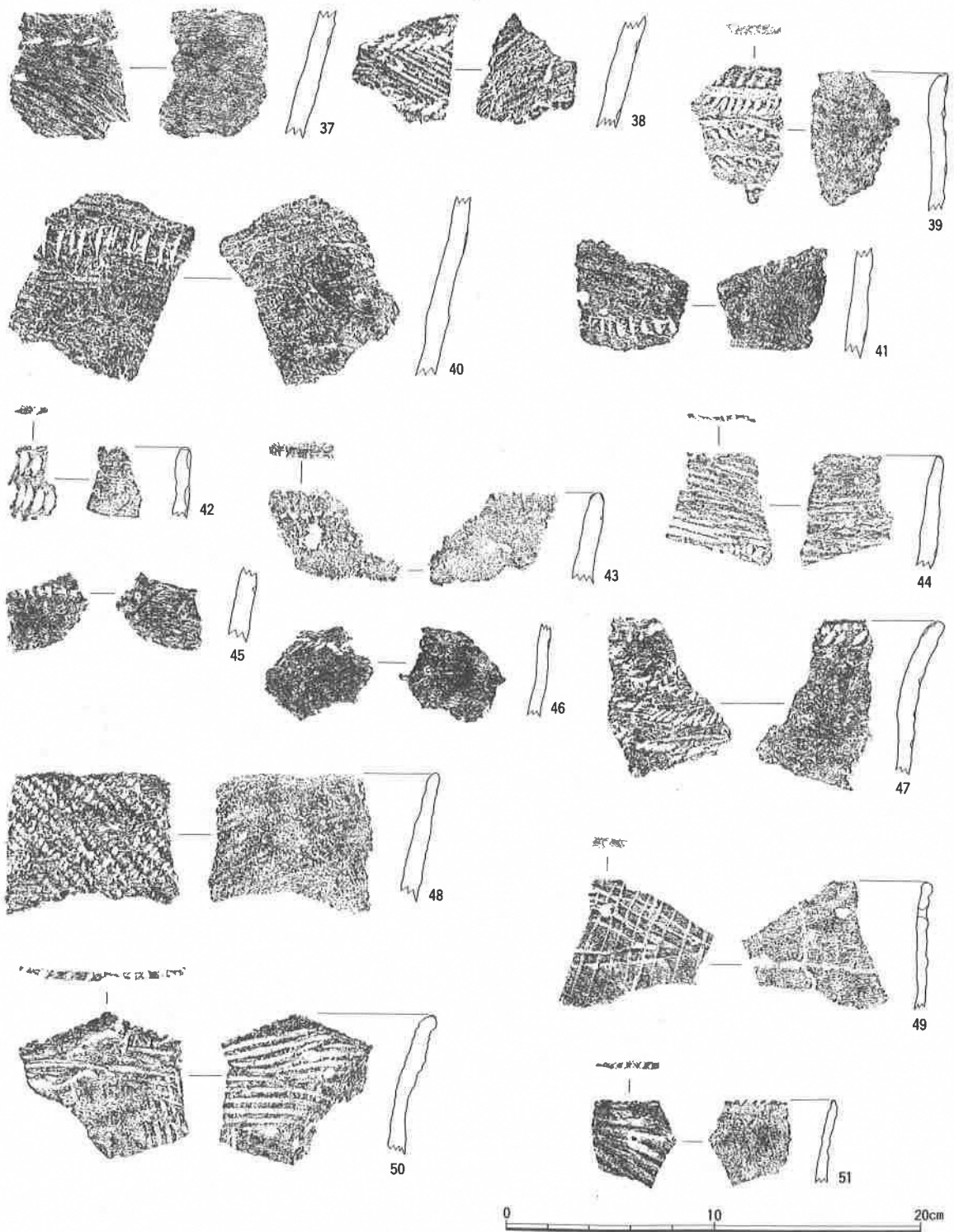
(43)～(46)は繊維を含む条痕文系土器であるが、その爪形文が非常に小さい。(44)は貝殻腹縁により施文され、(45)は刺突文である。いずれも早期末葉条痕文系土器である。



第29図 A トレンチS×1周辺出土縄文式土器実測図(1)



第30図 AトレンチS×1周辺出土縄文式土器実測図(2)



第31図 AトレンチS×1周辺出土縄文式土器実測図(3)

(47)は口縁がやや外反する器形であり、外面波状の押し引きに近い爪形文を施す。口縁端部やや内側に刻目を施し、その直下に爪形文を施す。石山式に相当するものか。

(48)は外面に縄文を施すもので、(8)に類似しているが、胴部で文様を区画する爪形文がここでは見られず、茅山下層式より新らしい時期と考えられる。

(49)はS X 1出土土器群中最も新らしい型式の土器である。細い隆帯を貼り付け、その上部を篋もしくは楯状工具で沈線文を施した文様は典型的な塩屋式で、条痕もなく、繊維も認められない。早期最終末に位置づけられる。

(50)～(51)は無文の条痕文系土器で、口縁端部に刻目を施す。胎土中に雲母が多量に混入され、焼成も堅緻である。後述する各層出土の無文の条痕文系土器群中にも胎土、焼成が非常に似ているものがあり、この無文条痕文土器が1つの型式を有すると考えられる。しかし早期条痕文土器類のどの型式と併行関係にあるのかは不明である。

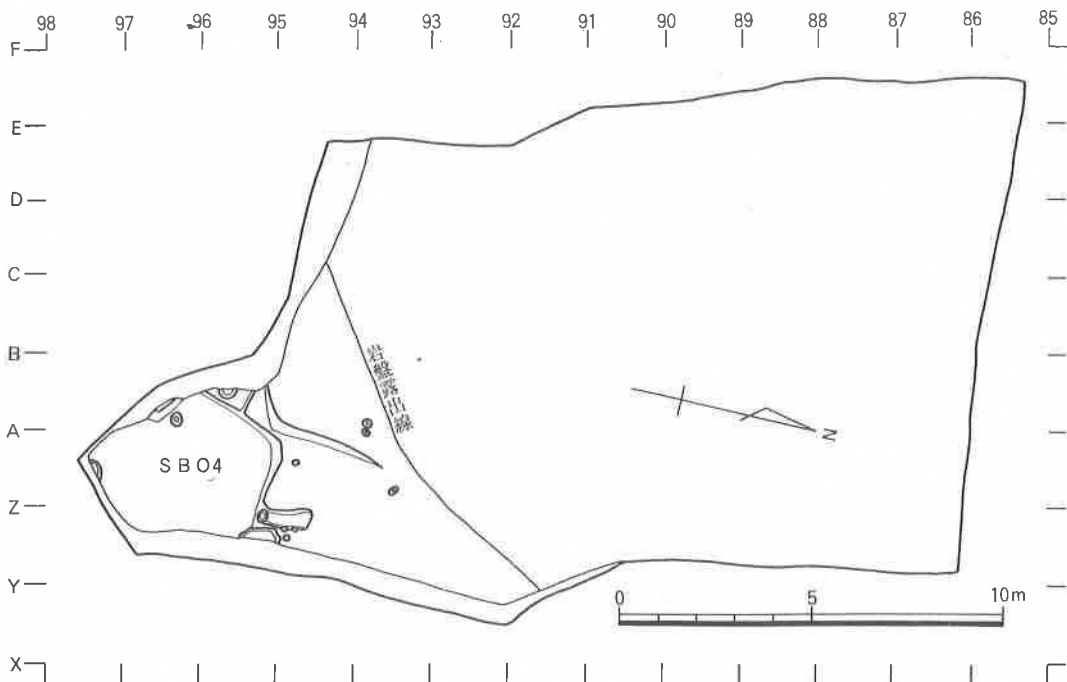
(2) Bトレンチ

a) 層序と遺構

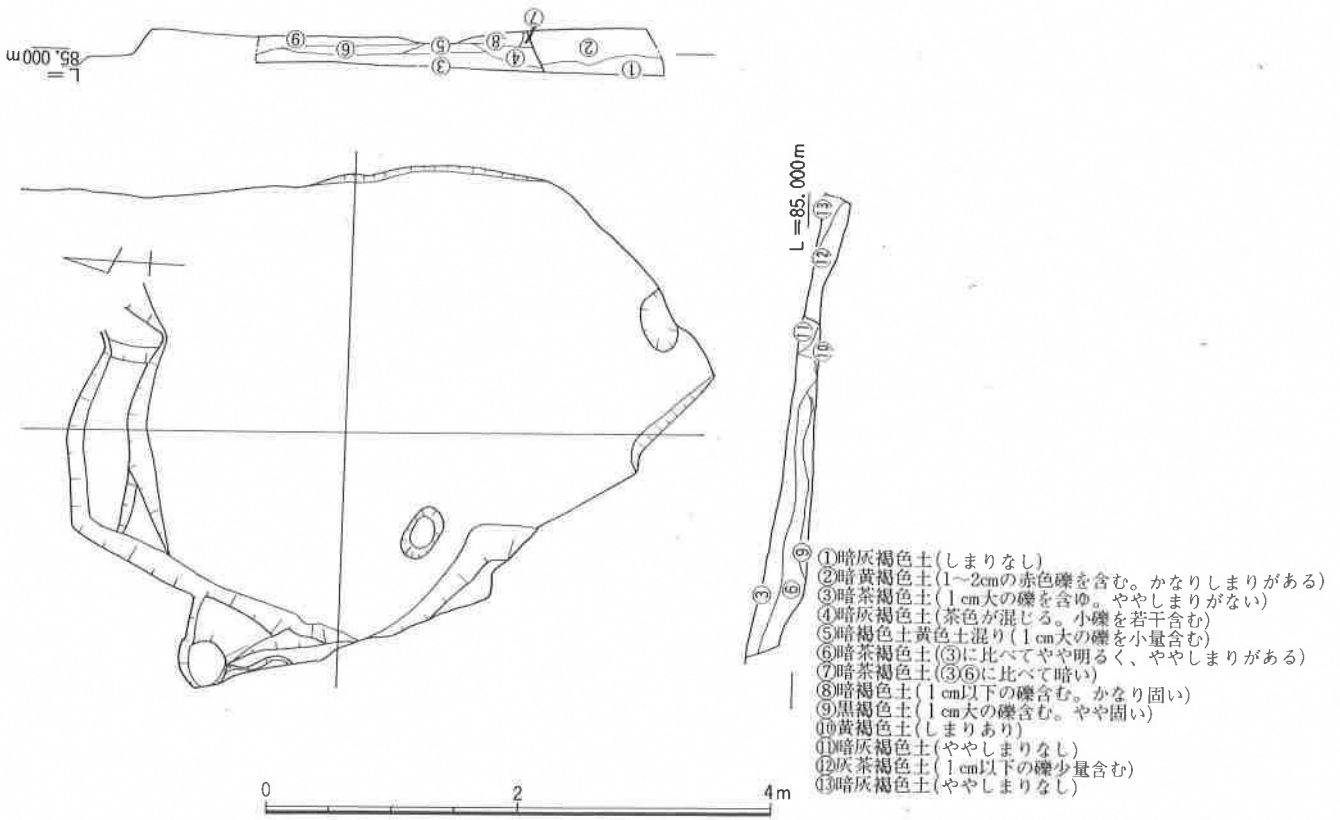
Bトレンチは排水池にあたる部分で、南北24m、東西13mにわたって設定した。ところがトレンチのほぼ大半が山腹部分であったため、表土を除去すると、直下に地山の岩盤が表われた。南端部分でようやくAトレンチと同様の堆積層があらわれた。その結果、ピット、土壇、住居跡を検出できた。

S B O 4

Bトレンチ南端で隅丸方形の竪穴住居跡を1棟検出した。一辺約3mの小規模なもので、北辺と西辺の肩部のみを残している。北辺には1段のテラスを設けている。また西辺のやや南寄りにカマド状の遺構があり、焼土が多く集中していた。柱穴は1本分のみ検出した。遺構検出面より30～40cmの掘り込みが残っている。埋土中に縄文式土器が含まれるが、床面では7世紀の須恵器が出土しており、Aトレンチ検出の遺構と同一時期のものである。



第32図 Bトレンチ検出遺構図



第33図 BトレンチSB04実測図

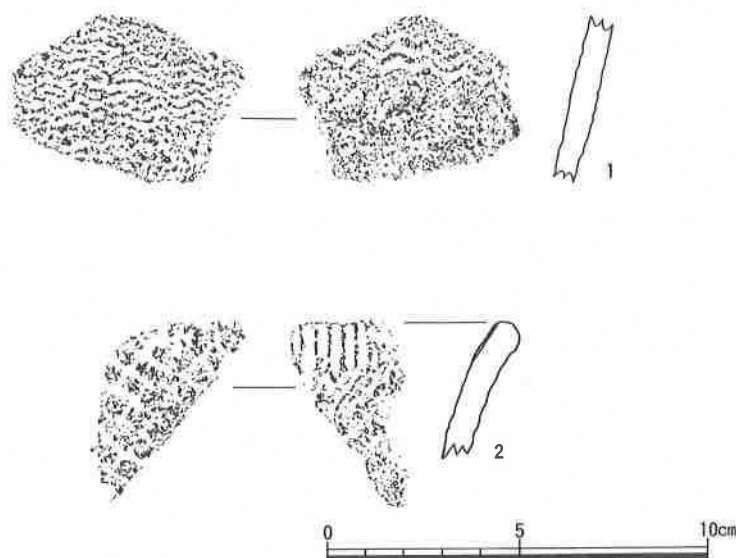
a)遺物(第34図~第35図, 図版28~図版29, 図版68)

SB04より出土した遺物を記す前に、Bトレンチ包含層より出土した土器をまず概説したい。包含層より出土した縄文式土器は、わずか2点にすぎない。(1)は磨滅が激しいが、外面全体に山形の押型文を施す。内面も口縁部分のみに山形文を施している。(2)は楕円形の押型文を外面に施しているが、楕円文と呼ぶより、格子目状の施文と呼ぶほうが近い。また内面口縁部1.3cmにわたり原体条痕が垂下している。これは黄島下層式に相当するものであろう。

SB04埋土中の土器であるが、(1)~(14)は縄文時代早期の土器である。(1)は外面に山形の押型文を施すもので、山の幅は1.1cmを測る。(2)~(13)は、外面に楕円形の押型文を施すものである。しかし、内面に斜行沈線文を有するものは皆無である。(2)~(5)は楕円文もやや大きく、施文もいびつである。(6)~(13)は楕円文も小さく、施文も密である。なお器壁は(5)、(8)が非常に薄くなっている。(14)は外面口縁より下がったところに斜行する沈線が施されている。

(15)~(20)は同じ埋土中より出土した晩期の土器である。(15)は口縁端部を平坦にし、突帯上に○状の刻目を施す滋賀里Ⅳ式土器である。(16)~(17)は、端部の平坦面は消えており、船橋式に相当しよう。(18)~(19)はすでに端部と突帯を同時におこなう長原式期のものであり、(20)はその胴部突帯部分である。

(21)~(24)はやはりSB04埋土、あるいは床面より出土した須恵器である。(21)は杯蓋で、丸味のあるシャープさを欠くものである。(22)、(23)は杯であるが、受け部が退化しており、口径に比して、器高も低い。(24)は、杯である。これらは陶邑古窯跡群のTK209~TK217に近いものであろう。(24)はそれよりやや下るものかもしれない。SB04は、これら須恵器の時期に相当するものであり、(1)~(20)の縄文式土器は明らかに流入したものである。



第34図 Bトレンチ包含層出土縄文式土器実測図

第3項 Cトレンチの遺構と遺物

遺跡の東限を確認する目的をもって、Aトレンチの東に計6ヶ所トレンチを設定した。調査の結果、ほぼ同様の堆積層を確認した。第Ⅰ層は耕土・床土層、第Ⅱ層は黒色粘土層、第Ⅲ層は黒色腐触土(スクモ層)、第Ⅳ層は砂層となっていた。これらの堆積状況は、北西より南東にかけて深くなっていく。

しかし遺物の出土は皆無に近く、C-5トレンチで砂層上面にわずか数片の縄文式土器と推される小片が出土したにすぎない。このことより、磯山城遺跡の東限はAトレンチとCトレンチの間ですでに終わっているようである。

第2節 Aトレンチ包含層出土の遺物

Aトレンチからは遺構面より上層および下層より縄文式土器を中心として、多量の遺物の出土をみた。本来包含層出土遺物として一括して記載すべきかもしれないが、ここでは最下層より第2項に記した各層ごとに出土した遺物を記載することとした。これによって、どの遺物がどの層より出土したか明瞭になろう。

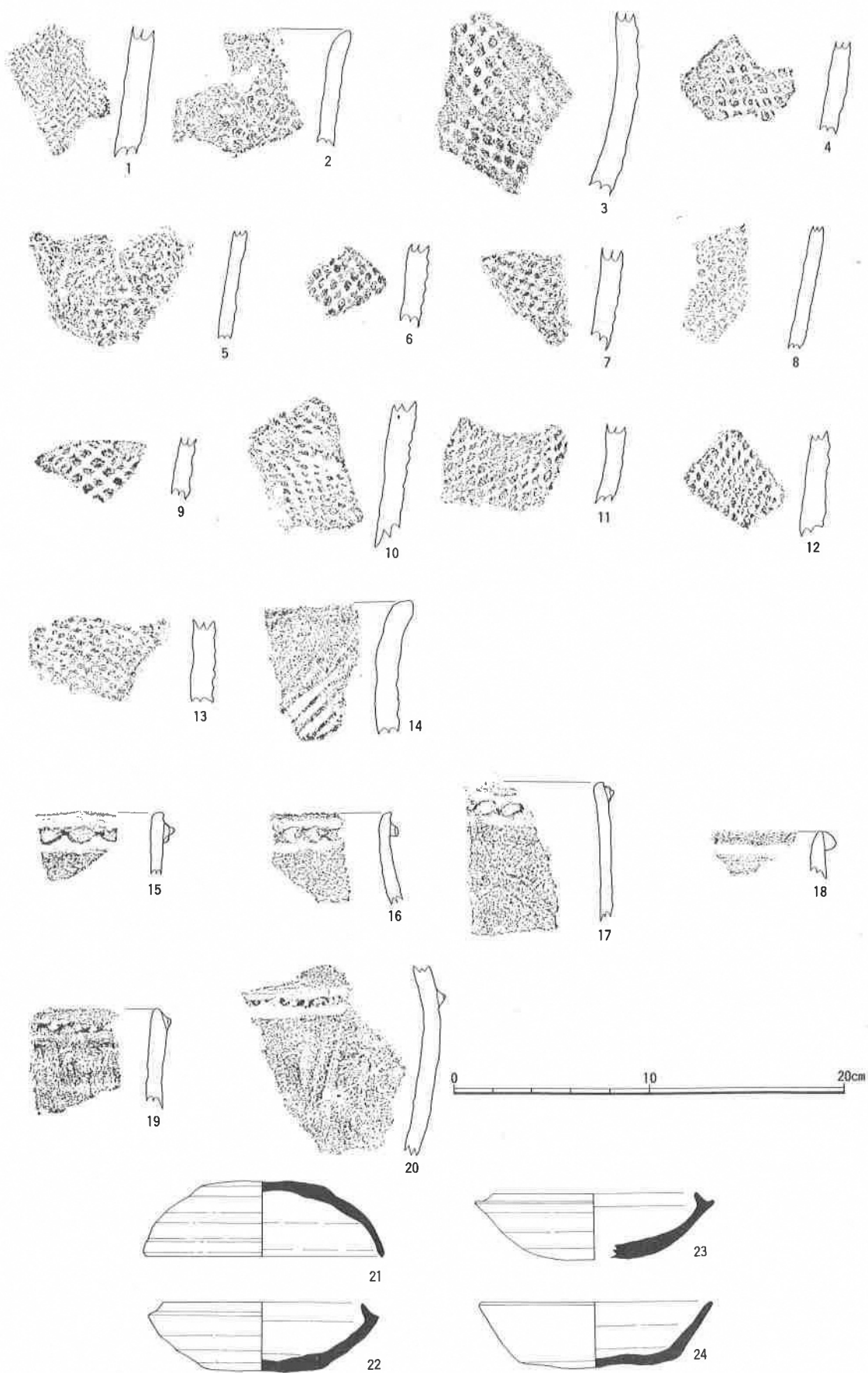
ただし、第Ⅰ層竹林による攪乱層、第Ⅱ層黄褐色土層、第Ⅲ層黒色粘土層及び第Ⅳ層黒色腐触土(スクモ層)は便宜上、一括して、包含層と呼び、以外は各土層名によって分類した。

なお各層ごとに図、図版ともに通し番号を土器に付しているので、早期～晩期は一連の番号であり、図及び図版挿入番号は一致している。

第1項 縄文式土器

(1) 分類

第Ⅰ層より第Ⅷ層までには多量の縄文式土器が出土している。ここでは最下層より順次上層に各土器を概観するわけであるが、全ての土器を分類した後、各層ごとに詳細に検討を加えるつもりである。やや煩雑な面もあるが、御容赦願いたい。さて、出土した縄文式土器の型式分類は以下の通りである。



第35図 BトレンチS B 0 4埋土出土土器実測図

[早期]

S-1群土器 いわゆる押型文土器で、楕円形の押型文を除くもので、3タイプがある。

a類 格子目の押型文を有するもの。

b類 回字形の押型文を有するもの。

S-2群土器 楕円形の押型文を有する土器で、いわゆる高山寺式土器に相当するもので、9タイプが存在する。

a類 外面に楕円形の押型文を有し、内面も口縁付近に押型文を施すもの。

b類 外面に楕円形の押型文を施し、内面口縁部に縦位の原体条痕を施すもの。

c類 外面に楕円形の押型文を施す。ただし器壁の厚さが1 cm以下の薄手のもの。

d類 外面に楕円形の押型文を施し、内面に斜行沈線文を有するもの。この斜行沈線は断面が三角形を呈する。

e類 d類と同じではあるが、内面の斜行沈線は浅く、棒状工具で施したと考えられるもの。

f類 e類と同じではあるが、内面の斜行沈線間の畝が丸味を帯び、やや高まりを有するもの。

g類 f類に類似するが、内面の斜行沈線間の畝は平たく、扁平である。

h類 外面の楕円文が大きいもの。内面の斜行沈線はg類に似る。

i類 外面に楕円文を施すが、内面はまったく平滑で施文していないもの。

S-3群土器 早期押型文土器に伴うと考えられる撚糸文土器で2タイプがある。

a類 縦位に施文するもの。

b類 格子目伏に交差する撚糸文を施すもの。

S-4群土器 この群は文様に幾何学文を施文し、口縁と胴部の境に屈曲する段を有し、胎土中に繊維を含む。関東地方の鶴ヶ島台式に相当するもので2タイプがある。

a類 押し引きによる幾何学文を施すもの。

b類 細隆起線文による施文をするもの。

S-5群土器 口縁部と胴部に屈曲する段を有し、指頭による凹線文や刺突文を施すもので、胎土中に繊維を含む。関東地方の茅山下層式に相当するもので8タイプがある。

a類 篋状により三角形の区画を作り、区画外を篋状工具によって刺突文を施しているもの。

b類 屈曲がやや弱くなり、爪形文や指頭沈線によって屈曲を表わすもの。

c類 屈曲部に沈線を施さず、刺突文のみを配し、施文帯も刺突文のみのもの。

d類 屈曲部段上に刺突を施し、施文帯は指頭による圧痕文のみによるもの。

e類 口縁端部に刻目を施し、内面に施突文のあるもの。

f類 施文が縄文だけによるもの。

g類 屈曲部段上に縄文原体圧痕を施すもの。

h類 屈曲はほとんどなくなるが、施文法が明らかにこの群に属するもの。

S-6群土器 口縁と胴部の屈曲はほとんど認められないが、施文は次のS-7群のように単純なものではなく、爪形、縄文をやや複雑に組み合わせるもので、胎土中に繊維が含まれる。これはS-5群からS-7群に至る過渡的なもので、東海地方で八ツ崎Ⅰ式と呼称されるものに相当する。3タイプがある。

- a類 屈曲はやや残存する。屈曲部に大形の爪形を施し、文様は縄文による施文を有するもの。
- b類 屈曲はやや残るものの、指頭により屈曲を意識している。文様は波状の爪形文を施すもの。
- c類 b類と同様であるが、施文は縄文地文に波状の爪形文を施しているもの。

S-7群土器 口縁と胴部の屈曲はすでに消滅し、底部より斜上方へ直にたちあがる。外面全体に条痕文を施し、2～3条の平行する爪形文のみを施している。胎土中に繊維を含む。東海地方の粕畑式に相当するものであり、8タイプがある。

- a類 条痕地に2～3条の平行する爪形文を施すもの。
- b類 爪形文が横位に近く、直線的となるもの。
- c類 爪形に相当する部分に縄文原体圧痕を施すもの。
- d類 爪形文が貝殻腹縁を利用しているもの。
- e類 爪形文を施さないが、大形の皿状突起を有しているもの。
- f類 爪形文が異常に大きいもの。
- g類 器壁が薄いもの。
- h類 爪形文上部に縄文原体圧痕を施しているもの。

S-8群土器 口縁部を内外面より交互に押えた大きな刻目や、外面に2～3条の突帯をもち、この突帯も上下より交互に押えた刻目をもつ土器。胎土内に繊維を含む。東海地方の上ノ山式に相当するもので、2タイプがある。

- a類 突帯上を上下より交互に押えた刻目を有する典型的な上ノ山式土器であるもの。
- b類 外面羽状に極端な刻目を施すもの。

S-9群土器 口縁外側に刻目を入れた突帯を数条めぐらしている。胎土中に繊維を含む。東海地方の入海Ⅰ式に相当するもので、2タイプがある。

- a類 断面が凸状あるいは三角形に近い高い突帯を有するもの。
- b類 断面が低い突帯を有し、口縁端部内外面より大きな刻目を施すもの。

S-10群土器 口縁に刻目をつけ、外側文様帯の上下に刻目列をめぐらし、その中間に突帯の直線と波状文を施す。突帯文と同じ直線文の間に波状文を入れた文様に刻目をつけたものもある。胎土中に少量ながら繊維が含まれる。東海地方の入海Ⅱ式に相当するもので、5タイプがある。

- a類 突帯は認められない。羽状の連続爪形文を施すもの。
- b類 突帯は認められない。波状の連続爪形文を施すもの。
- c類 突帯を付し、突帯上に爪形文を施す。突帯のない部分にも波状の爪形文を施す。
- d類 突帯を付すが、その爪形文は小さく石山式への先駆的なもの。
- e類 突帯を付し、爪形文はその突帯上だけに施すもの。

S-11群土器 堅く焼けしまった土器で、条痕文はほとんど認められない。一般に器壁は薄い。胎土中に少量の繊維を含む。外面の施文は爪形文、篋描の波状文等がある。石山式（石山Ⅵ式）に相当するものである。

S-12群土器 条痕文を意識的に波状文としているもので、器壁は薄い。胎土中にわずかながら繊維を含む。東海地方の天神山式に相当するものである。

S-13群土器 細い突帯を付したのち、櫛状工具によって沈線を施したもの。胎土中に繊維は認められない。器壁は非常に薄く、いわゆる“オセンベ土器”と呼ばれるもので、塩屋式に相当するものである。この塩屋式は前期初頭に付置づける説もあるが、早期末とするのが一般的である。

S-14群土器 これは前記のいずれかに属すると考えられるが、やや疑問の残るもので、所属型式が現状では不明の、その他の土器で6種類がある。

- a 類 押し引きによる波状文を施すもの。（S-11群に近い）
- b 類 押し引きと爪形文を併用するもの。
- c 類 縦位と横位の細線文を施すもの。
- d 類 文様意識に欠ける、連続性のない小さな爪形文を施すもの。
- e 類 竹管状工具によって施文されるもの。

S-15群土器 胎土・焼成から明らかに早期の土器で、その文様が縄文だけで構成されている土器で、4タイプがある。

- a 類 単なる縄文を施すもの。
- b 類 羽状となる縄文を施すもの
- c 類 多状の縄文を施すもの。
- d 類 縄文原体を押捺するもの。

S-16群土器 貝殻による条痕文のみを施している土器。

S-17群土器 条痕をナデ消し、器面を平滑に調整した無文の土器。

〔早期末～前期初頭〕

SZ-1群土器 器壁は非常に薄い“オセンベ土器”であり、胎土中に繊維を含まない。大津市粟津湖底遺跡より類似する一群が出土している。未命名型式の土器群である。次の5タイプが出土している。

- a 類 竹管状工具による押し引き沈線文を施すもの。
- b 類 間隔の開く小さな爪形文を施すもの。
- c 類 器壁の薄い条痕文系の土器で、内外面に指頭圧痕を残すもの。
- d 類 条痕文と爪形文を併用して文様化するもの。

e類 条痕文地に整った押し引き施文をおこなうもの。

SZ-2群土器 厚い器壁に、胎土中繊維を含むもの。関東地方では類似する土器が下吉井遺跡より出土しており、前期に位置づけられている。

〔前期〕

Z-1群土器 簡略化された条線と刺突文を主とするもので、東海地方の清水Ⅰ上Ⅰ式に相当するもの。

Z-2群土器 薄い器壁で焼成は堅緻である。施文は「3」字状刺突文と考えられるものと、「3」字がくずれ、「D」字状になるものがあり、羽島下層Ⅱ式から北白川下層Ⅰa式に相当するものと考えられる。次の2タイプがある。

a類 鳥浜貝塚2のH-Ⅱに相当する「3」字状の刺突文を有するもの。

b類 「3」字がくずれ「D」字に近くなるもので、鳥浜貝塚2のH-Ⅲ～HⅣに相当するもの。

Z-3群土器 「C」字状の連続する爪形文を施すもので、北白川下層Ⅰb式に相当する。

Z-4群土器 「C」字状の連続する爪形文と胴部に縄文を施す土器で、北白川下層Ⅱa式に相当するものである。次の2タイプがある。

a類 連続する爪形文に加えて、刺突文を併用しているもの。

b類 刺突文のないもの。

Z-5群土器 口縁部に爪形文帯をもち、胴部に縄文を施す土器で、北白川下層Ⅱb式に相当するものである。次の3タイプがある。

a類 爪形文上下に区画沈線をもたないもの。

b類 爪形文に割り付けの区画沈線を有するもの。

c類 平行する爪形文帯の間に弧状の爪形文を施し、さらに縦位や横位に爪形文を付飾しているもの。

Z-6群土器 突帯文と縄文とを併用する土器。北白川下層Ⅱc式に相当するもので、次の4タイプがある。

a類 突帯上に刻目のあるもの。

b類 突帯上に斜位の長い刻目があるもの。

c類 突帯上に爪形文のあるもの。

d類 突帯上に縄文のあるもの。

Z-7群土器 いわゆる特殊突帯文を付した土器である。北白川下層Ⅲ式から大歳山式に相当すると思われるが、いずれも小破片のため、次の2タイプに分類しておく。

a類 北白川下層Ⅲ式に属すると考えられるもの。

b類 大歳山式に属すると考えられるもの。

Z-8群土器 半截竹管による平行線、弧線などを組み合わせたもので、関東地方の諸磯 a 式に相当する土器である。

Z-9群土器 前記のいずれにも属さない所属型式不明の前期土器。

Z-10群土器 Z-4群よりZ-9群のいずれかに属すると考えられる縄文を施した土器。

Z-11群土器 無文の前期土器

〔中 期〕

C-1群土器 外面と1部口縁内面に地文として粗い撚りの縄文を施し、C字形の爪形文を主文とする土器、器形はキャリパー形となるものが大半である。これらは鷹島式ないし船元Ⅰ式に相当するもので、2タイプがある。

a 類 前期大歳山式の伝統を残し、口縁内面に段を有し、縄文を施している。鷹島式に相当すると考えられるタイプ。

b 類 棒状工具や貝殻による刺突を併用し、口縁端部も平坦ではなくなる。船元Ⅰ式に相当すると考えられるタイプ。

C-2群土器 基本的に突帯を付するもので、器面にC-1群同様、粗い撚りの縄文を施している。ただし、若干この縄文がなく、平滑な器面のものもある。これらは船元Ⅱ式に相当するもので、次の3タイプが出土している。

a 類 典型的な船元Ⅱ式タイプで、器面全体を粗い縄文地とし、∞状の突帯を付し、その上から骨状の爪形文を施すもの。

b 類 器面に縄文はなく、刺突による施文を施したもの。

c 類 突帯を付すが、突帯上には施文しないもの。

C-3群土器 竹管状工具で縦横に線描きした施文を有するもの。船元Ⅲ式に相当し、次のタイプが出土している。

a 類 粗い縦位の縄文を地文とし、突帯文と竹管状工具による平行線文を加えたもの。

b 類 a 類と同様であるが、突帯文は消滅し、竹管文のみの施文を有するもの。

c 類 b 類と同様であるが、地文の縄文のないもの。

C-4群土器 地文が撚糸文となり、竹管による沈線を横位に平行に施したもの。里木Ⅱ式に相当するもの。

C-5群土器 C-1群～C-4群とはまったく異なる1群で、東日本の影響を受けたと考えられるもの。北白川C式と呼称されるものに相当すると考えられる。

C-6群土器 非常に屈曲の強い「く」字状の口縁を有する土器。東海地方の北裏C式に相当するものか。

C-7群土器 半截竹管による押し引き隆帯をつくりだしたものや、網目状の撚糸文を施文したもので、北陸地方の新保式に相当すると考えられるもの。

C-8群土器 C-1群よりC-7群までには属さないが、明らかに中期の土器をこの群に一括した。次の4タイプがあるが、型的には、まったく別々の型式である。ここでは便宜的に一括にしたにすぎない。

a類 突帯を付すもので、醍醐式に入るものか。

b類 東海地方の土器で咲畑式に相当するもの。

c類 北陸地方の土器と考えられるもの。

d類 中部山岳地方の土器で貉沢式に相当するもの。

[後 期]

K-1群土器 磨消し縄文を施す土器で、この群は2条の沈線間のみ縄文を残す。中津式に相当するものである。

K-2群土器 口頸部が垂直に近く立ち上る鉢で、縄手式に相当するもの。

K-3群土器 浅い沈線間にのみ縄文を残す磨消し縄文で、従来の北白川上層式に相当するものである。

K-4群土器 京都府桑飼下遺跡出土後期土器と類似したもので、桑飼下式と呼称されるものに相当する。

K-5群土器 沈線文を主文とするもので、内面にも沈線を有する。沈線の始点および終点に刺突を加える。元住吉山Ⅱ式に相当するものと考えられる。

K-6群土器 数段にわたり2～3条の沈線を施し、巻貝による扇状押捺を加えたもの。宮滝式に相当するものと考えられる。

K-7群土器 所属型式の不明な土器類で、2タイプがある。

a類 沈線文系の土器

b類 刺突文を有する土器。

[晩 期]

B-1群土器 晩期滋賀里Ⅰ～Ⅱ式に相当すると考えられる沈線文系の土器で、次の2タイプがある。

a類 沈線が細いもの。

b類 竹管の外表面で施したと思われる沈線を有するもの。

B-2群土器 突帯を付す土器で、口縁端部刻目が平坦となるもの。滋賀里Ⅳ式に相当するもので、次

の2タイプがある。

- a類 突帯上の刻目は明確な「D」字形となるもの。
- b類 口縁端部は平坦としているが、突帯上の刻目は篋状工具による押し引きとなるもの。

B-3群土器 突帯を付す土器で、口縁部の面取りはなくなり、刻目も伴わないもの。船橋式に相当するものである。次の4タイプがある。

- a類 流れるような「D」字形の刻目を突帯に施すもの。
- b類 小さな「D」字形の刻目を突帯に施すもの。
- c類 楕円形の「O」字形の刻目を突帯に施すもの。
- d類 貝殻によって刻目を突帯に施すもの。

B-4群土器 口縁部と突帯を同時に製作した突帯文土器。長原式と呼称されるものに相当するもので、次の4タイプがある。

- a類 流れるような「D」字形の刻目を突帯に施すもの。
- b類 小さな「D」字形の刻目を突帯に施すもの。
- c類 楕円形の「O」字形の刻目を突帯に施すもの。
- d類 貝殻によって刻目を突帯に施すもの。

B-5群土器 B-2群～B-4群以外の突帯文系土器で、ここでは突帯上に刻目のないものをこの群とした。次の3タイプがある。

- a類 口縁端部に面取りがあり、滋賀里IV式に含まれるもの。
- b類 口縁端部に面取りがなく、船橋式に含まれるもの。
- c類 口縁と突帯を同時に製作したもので、長原式に含まれるもの。

B-6群土器 晩期の無文土器

B-7群土器 上記以外の晩期の土器。次の2タイプがある。

- a類 疑突帯の土器。所属型式は不明。
- b類 クルス状の三叉彫刻を施す、北陸地方の八日市新保式に相当するもの。

以上、Aトレンチ各層より出土した縄文式土器は早期より晩期に至る52型式を概観した。次に各層ごとに詳細に述べていく。ここでは最下層より順次見ていくことにする。

(2)第Ⅷ層最下層地山直上出土縄文式土器

Aトレンチの地山は、1トレンチ同様の岩盤であった。また部分的にこの地山の上に堆積する灰色砂礫粘土を最下層とした。出土した縄文式土器は以下のようである。

S-2群土器 (第36図, 図版29)

- i類-(1)

(1)は、楕円形の押型文土器で、楕円の大きさは、1.1cm×4㎝で、磨滅が激しい。

S-5群土器 (第36図, 第図版29)

a類-(2~5)

(2)~(5)は、口縁直下に一段の段を有し、段直下に指頭による沈線を施している。段より上の部分に、篋状工具と考えられるもので、三角形の区画をおこない、区画内に縄文施文を施し、区画外では刺突文を施す。

b類-(6~7)

(6)~(7)は、屈曲がほとんどなくなり、沈線も幅広となり、指頭によったと考えられる。

c類-(8), (10)

(8)は段直下に沈線を施さず、刺突文のみを配しており、段上の区画も、刺突のみによっている。

d類-(9)

(9)は、(8)と同じく段上に刺突をおこなうが、区画には、指頭による文様区画をおこなった形跡がうかがえるだけである。

e類-(11)

(11)は、口縁端部に刻目を施し、内面条痕文とナデの境に刺突文を施している。

f類-(12~14)

(12)は、口縁端部に刻目を施し、文様は、縄文で統一されてしまっている。(13)~(14)も縄文のみによる文様である。

これらの土器は、茅山下層式に類似するものであり、器壁は10㎝内外で、胎土は粗く、(7), (9)以外は、強く内外面に条痕を認めることができる。繊維の混入はすべてに見られる。

S-6群土器 (第37図~第38図, 第44図, 図版30, 図版33~図版34)

a類-(15~21), (80~81)

(15)~(21)までは、段はほとんど認められないが、底部より、やや屈曲を残して口縁に至っている。その屈曲部分に、大形の爪形文を施し、爪形文より上部に縄文施文をおこなっている。口縁は、(15), (17)~(18)が波状口縁で、端部は(15)~(18), (21)が刻目を施している。特に(21)は、口縁内面にも爪形文を施している。(80)~(81)は、典型的なS-6群土器で、胴部と口縁部境に、明瞭な屈曲を持っており、爪形は波状に施されている。

b類-(22~25)

(22)は爪形文を波状に施しており、やや文様としての意識をもつ。特に爪形間に指頭による沈線を施しており、前段階(茅山下層式)の手法を踏襲している。(23)~(25)は口縁に大型の皿状突起を有している。

これらは、前段階(茅山下層式)の手法を踏襲しつつ、次の〔粕畑式〕への移行段階としてとらえることのできる土器群で東海地方では、〔八ツ崎I式〕として分類されている土器群である。

S-7群土器 (第38図~第43図, 図版30~図版33)

a類-(26~65)

これらの土器群は、いわゆる粕畑式と呼ばれるもので、S-6群土器にみられた屈曲もすでに消滅し、底部から、口縁にまっすぐにいたる。外面には連続爪形文を、水平に施している。(26)~(27), (30), (37)は、口縁端部に小さな皿状突起をもつ。(32), (35)は波状口縁となる。(26)~(32), (34)~(39), (41)~(42), (44), (46), (63)には、口縁端部に刻目を有している。また(27)~(28), (36), (38)~(40), (42)~(43)は、内面にも爪形文を施している。

皿状の突起は、S-6群土器に比較して非常に小さい。又、皿状突端と同じく粕畑式の特徴である、棒状突起は見られない。

b 類—(66)

(66)は、連続爪形文間の間隔がなく、1本の直線的な施文となっている。

c 類—(67)

(67)は、施文原体が貝によらず、縄文原体の圧痕によるものと見られる。

(68)は、乳房状尖底部であり、粕畑式に伴うものと考えられる。

S—10群土器 (第43図, 図版33)

a 類—(69)

(69)は、羽状の連続爪形文を施している。石山貝塚出土111に類例が求められる。

S—14群土器 (第43図, 第44図, 図版33, 図版34)

a 類—(70)

(70)は、原体の外側圧痕による押し引き沈線文を、波状に施しており、調整は内外面ともにナデている。繊維は含まれている。石山貝塚出土145に類例があり、石山式に類似するものと思われる。

b 類—(71)

(71)は、(70)と同様に押し引きによるが、同時に、爪形文も有するもので、繊維を含み、早期末〔石山式〕から前期への過渡期としてとらえられる。

c 類—(82)

(82)の器形は、胴部と口縁部境に、若干の屈曲を有しており口縁はやや外反するが、文様区画とはしていない。屈曲より上部には、縦位に、下部には、横位の2～3条ずつの細沈線文を施す。繊維は多量に含んでいる。口縁端部に刻目を施している。早期末に位置づけているが、下吉井式よりやや新しいとの見解もある。

S—16群土器 (第43図, 図版33)

(72)～(78)は、条痕文を施す土器片であり、早期末の特徴を有している。(72)、(73)は、口縁端部に刻目を施す。胎土の類似より、粕畑式に伴う条痕文系土器とみられる。

S Z—1群土器 (第43図, 図版33)

a 類—(79)

(79)は繊維を含まず、器壁も薄くなっている。平口縁部に2段の竹管状工具による押し引き施文をおこなう。粟津湖底遺跡に類似土器がある。

(3)第Ⅶ層灰褐色砂礫粘土層出土縄文式土器

第Ⅶ層は粘質の強い堆積土で、地山の岩粒が多量に含まれていた。出土した縄文式土器は以下のようなものである。

S—2群土器 (第45図, 図版35)

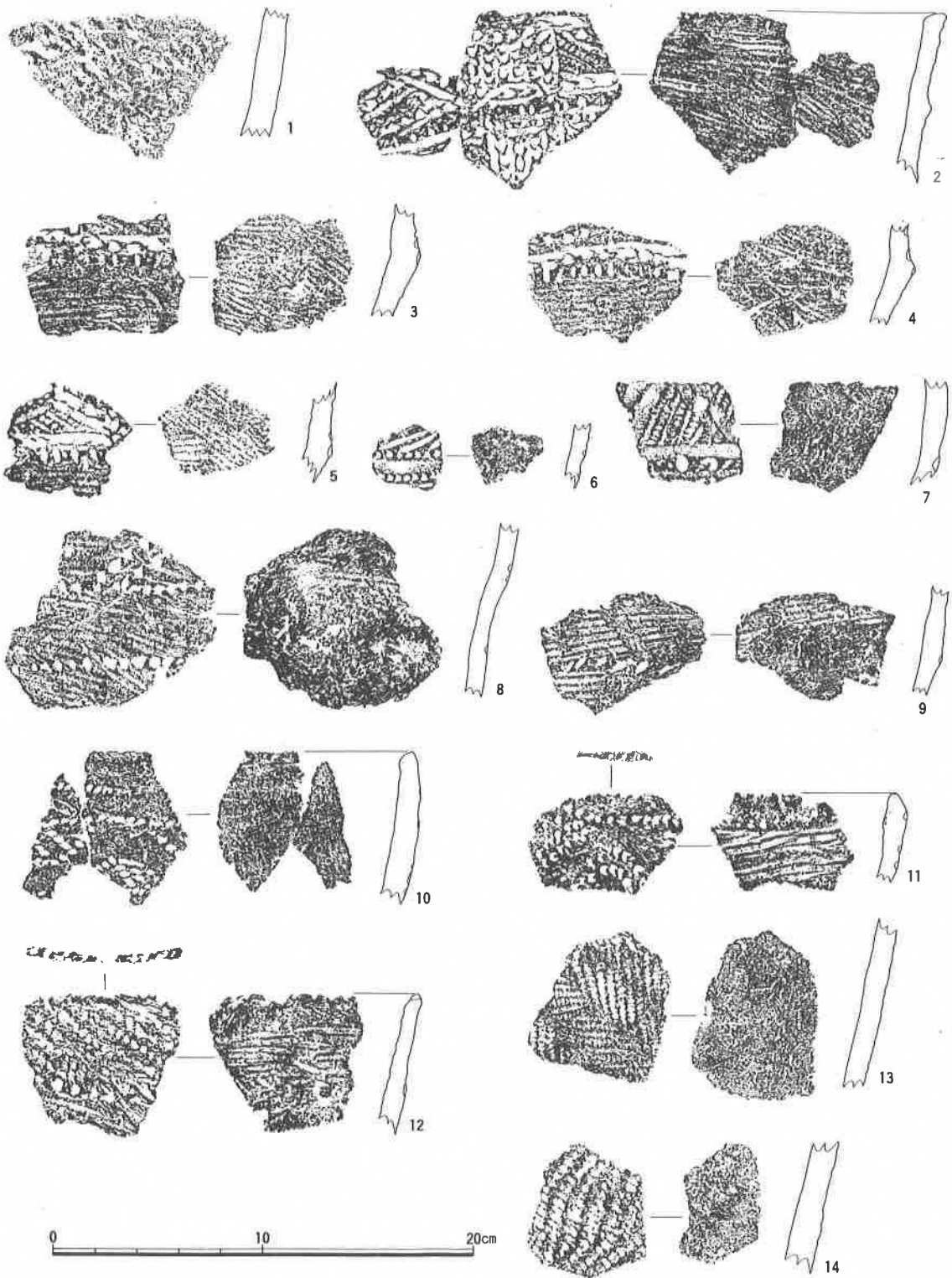
d 類—(1)

(1)は楕円の押型文土器で、外面はほとんど剥離しているが、楕円の大きさは8㍓×4㍓の大きさであったと推される。内面の斜行沈線は、非常にシャープである。

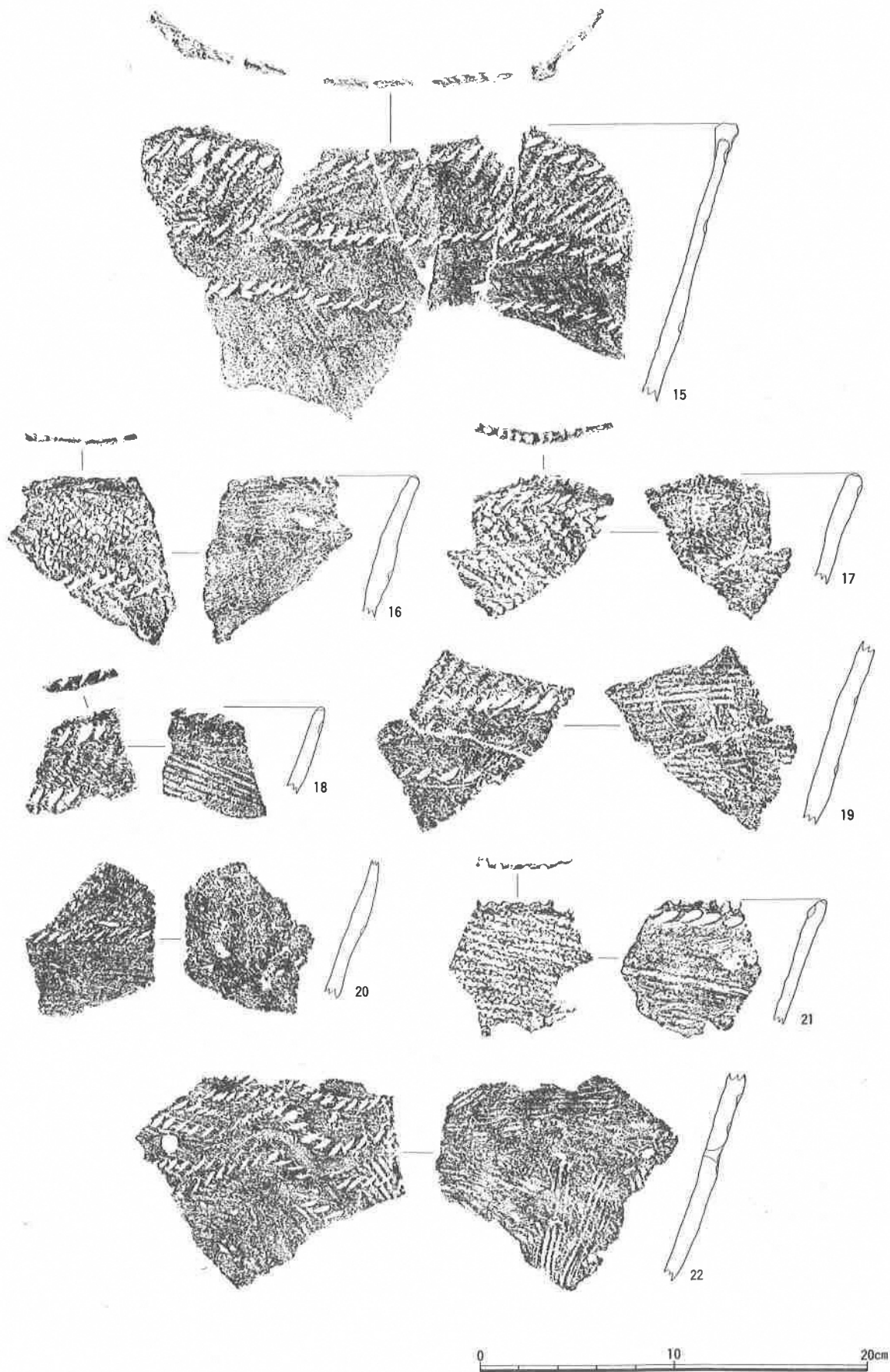
S—4群土器 (第45図, 図版35)

a 類—(2)

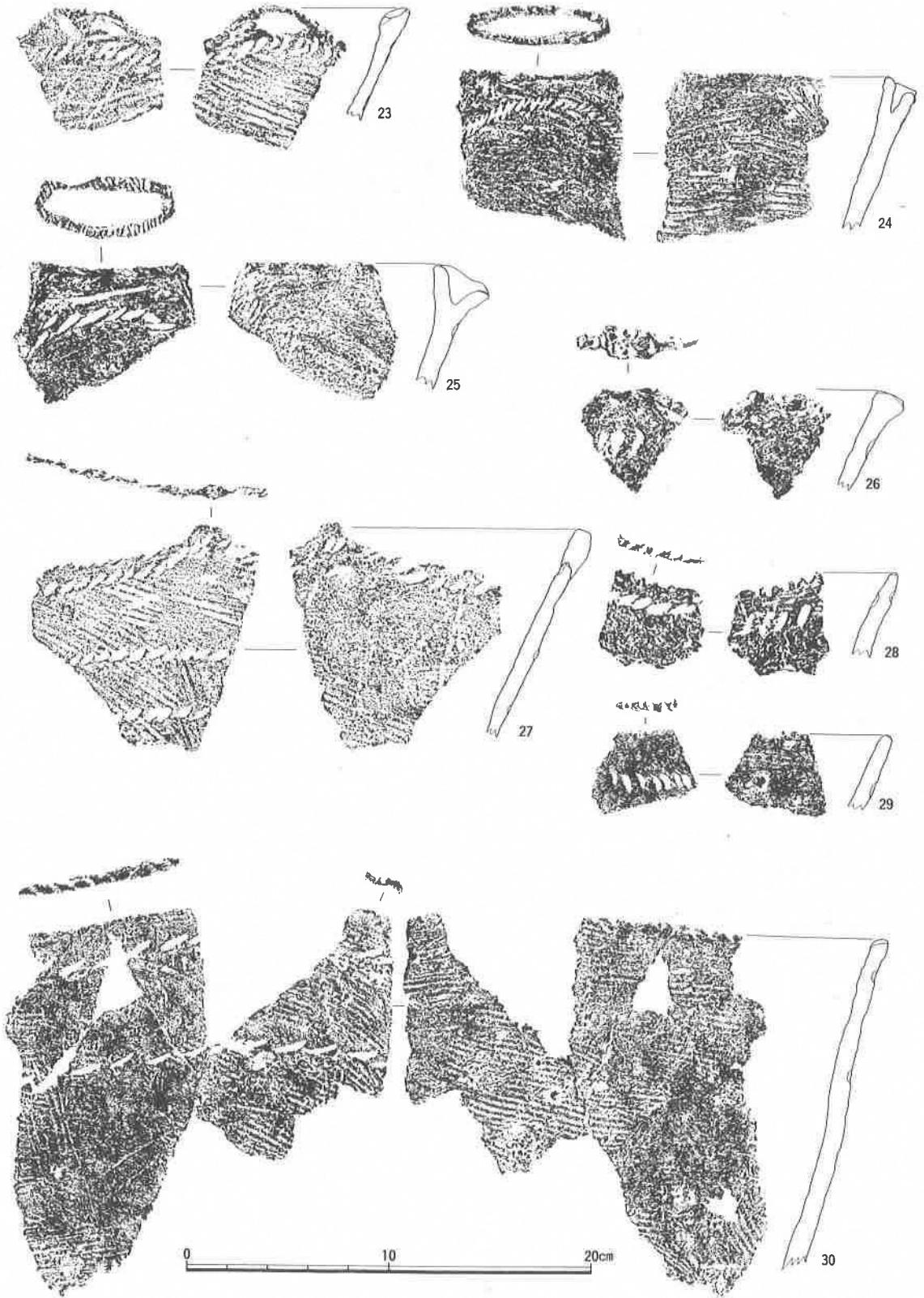
(2)は口縁と胴部の境に明瞭な段を有し、口縁部施文帯に押し引きによる幾何学文を施し、交点に円形刺突を施す。段下にも同様な施文を施している。



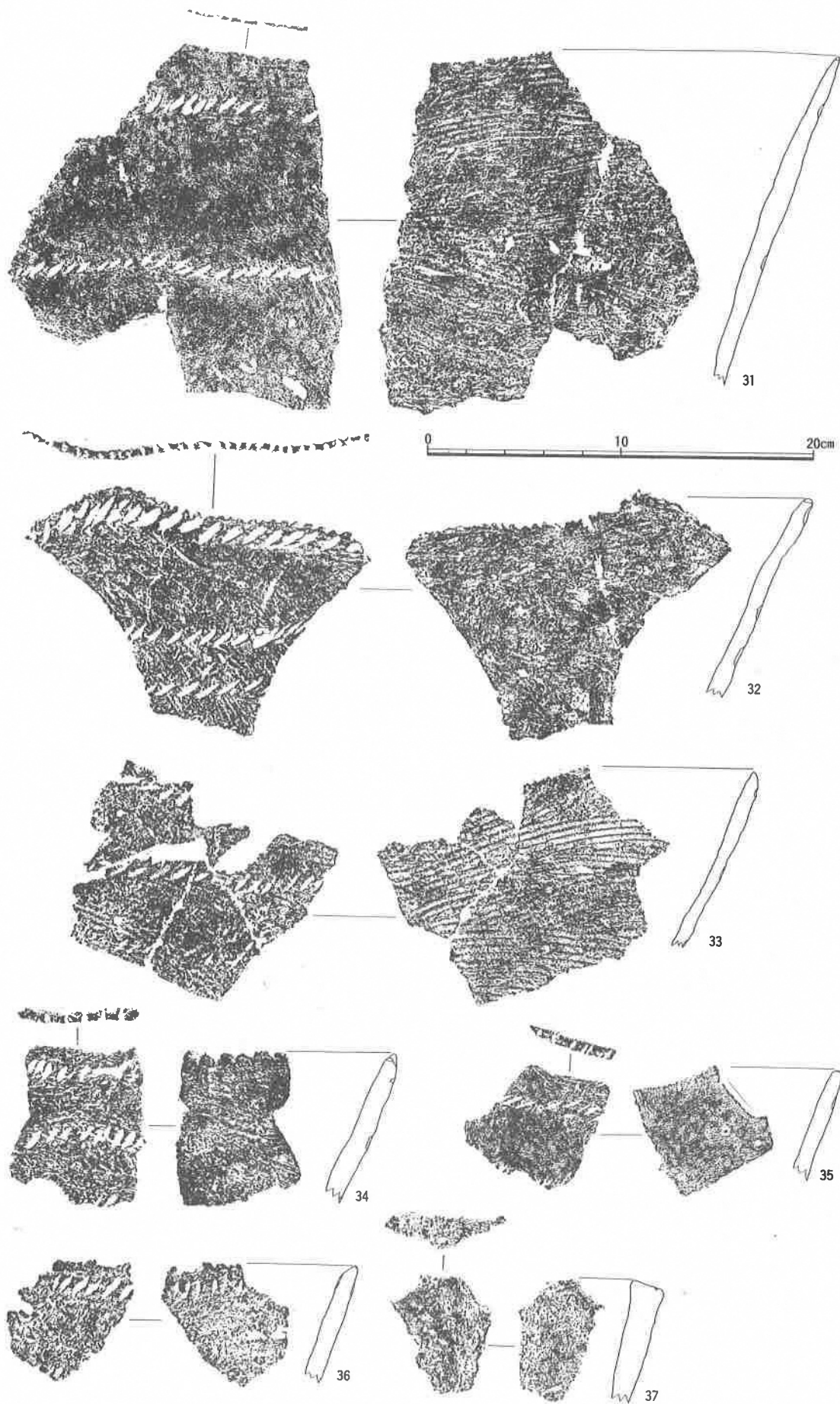
第36図 Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)



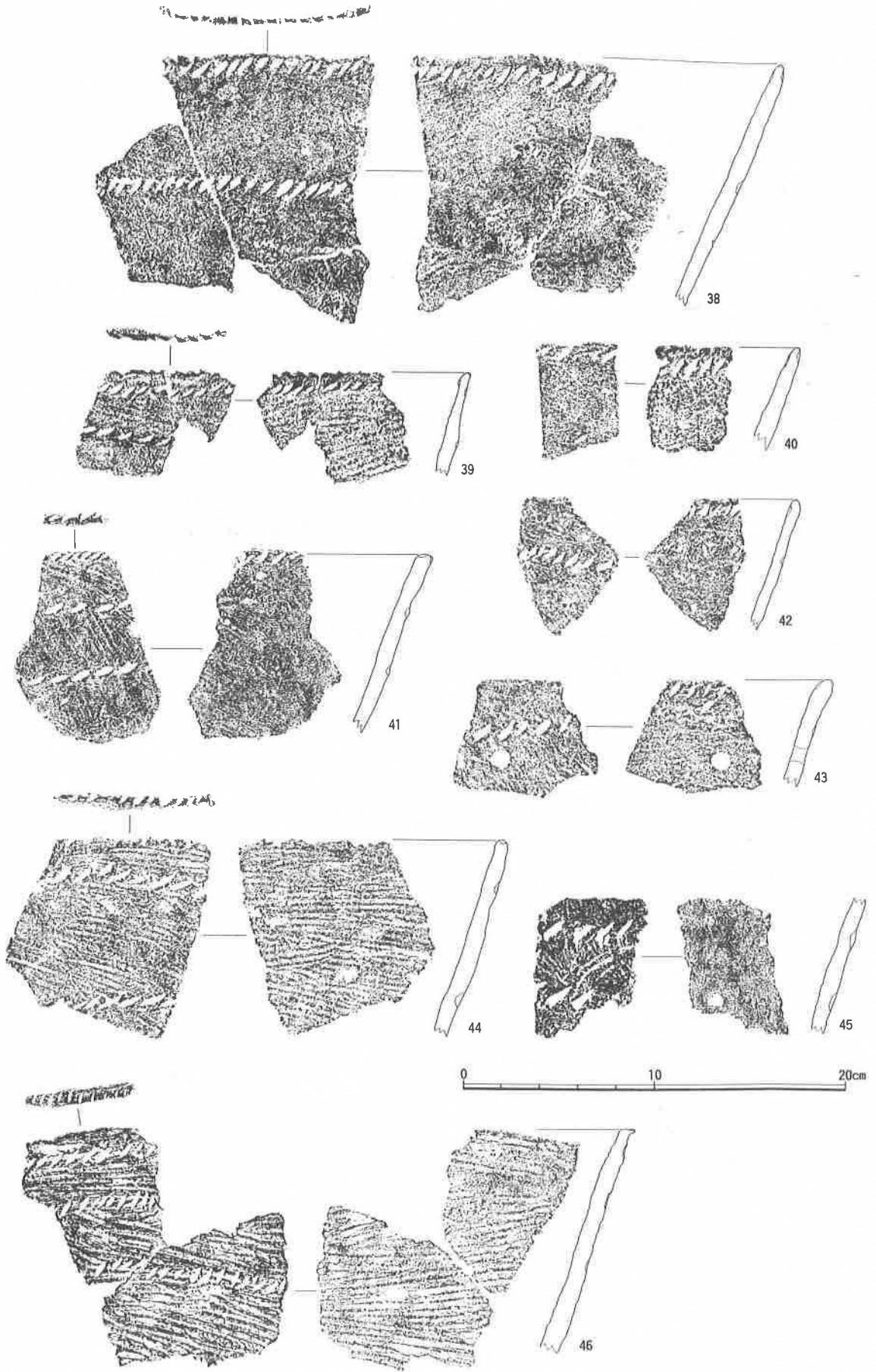
第37図 A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)



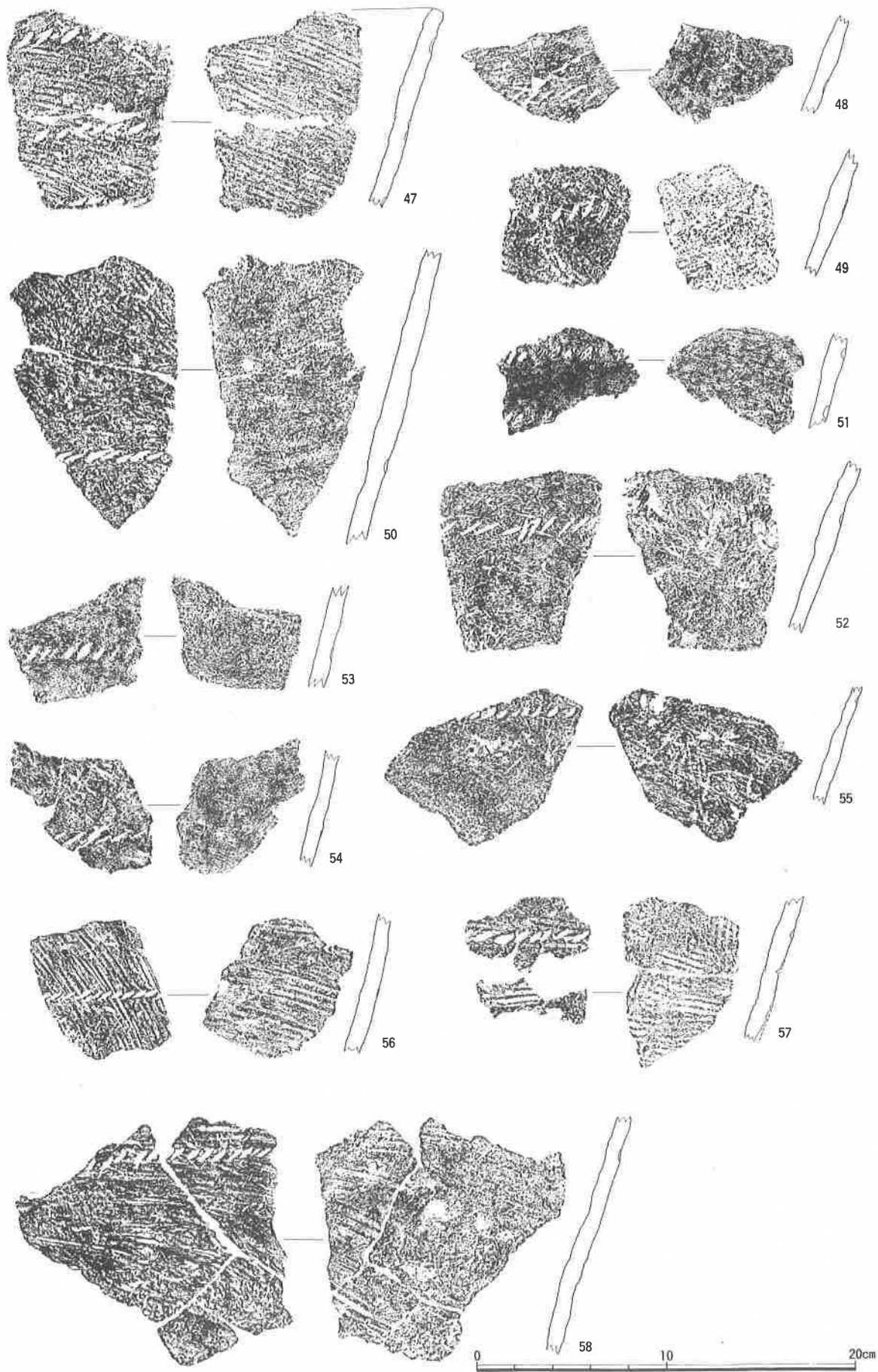
第38図 Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(3)



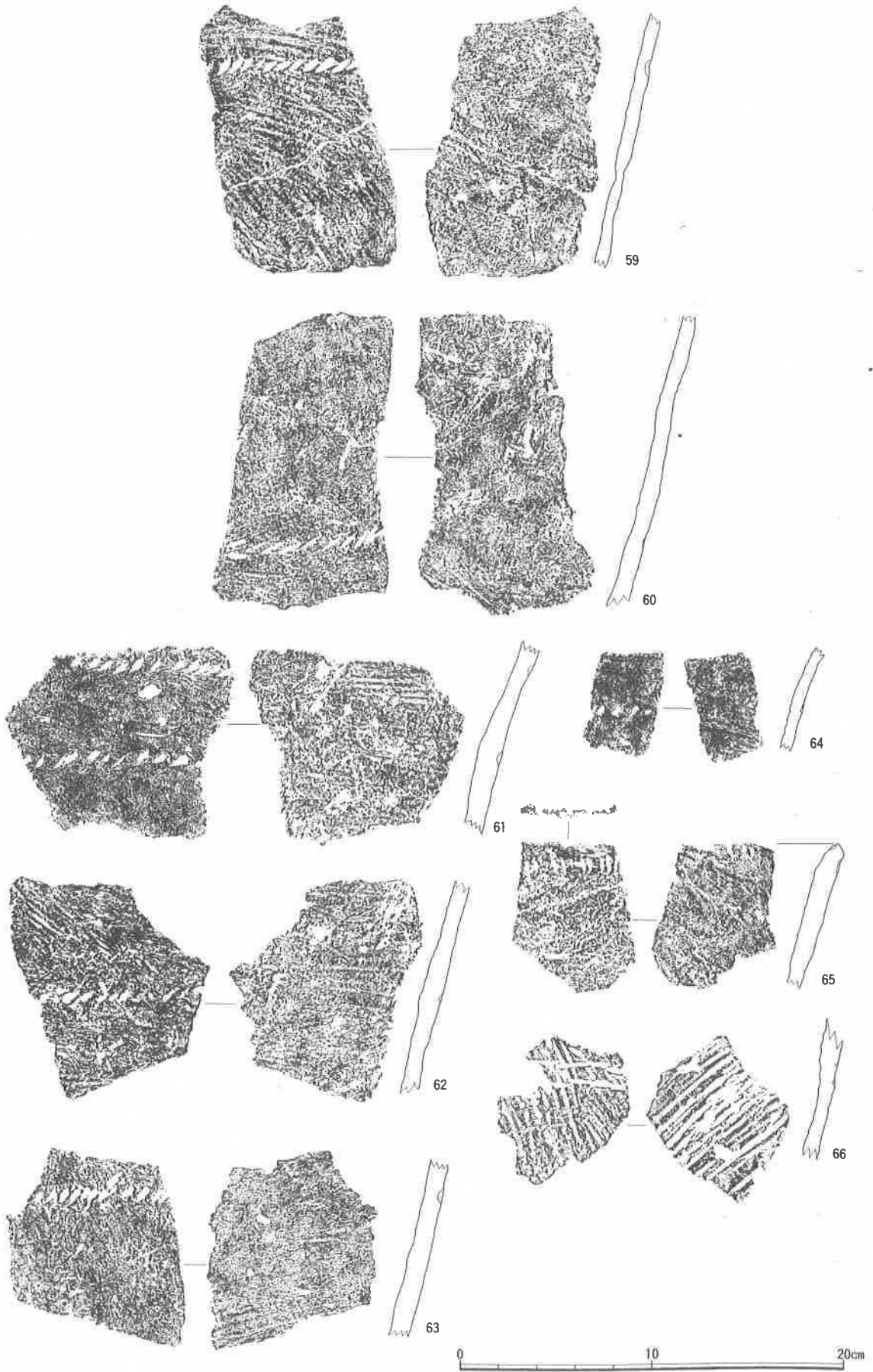
第39図 A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(4)



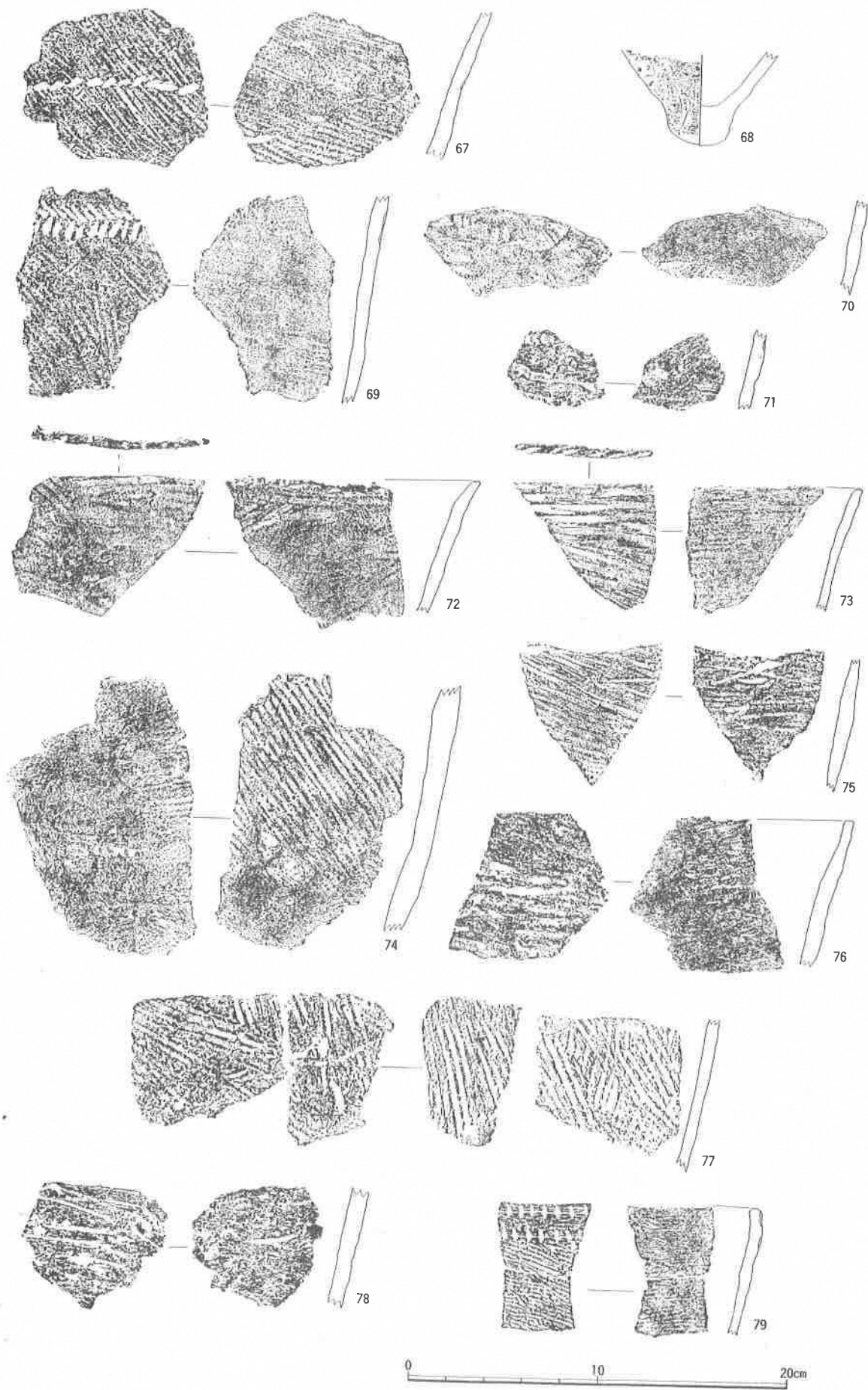
第40図 Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(5)



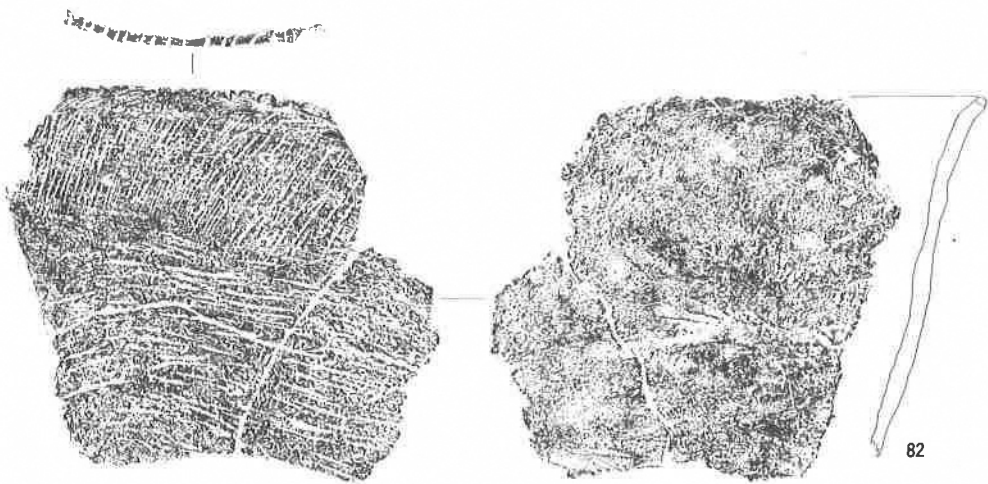
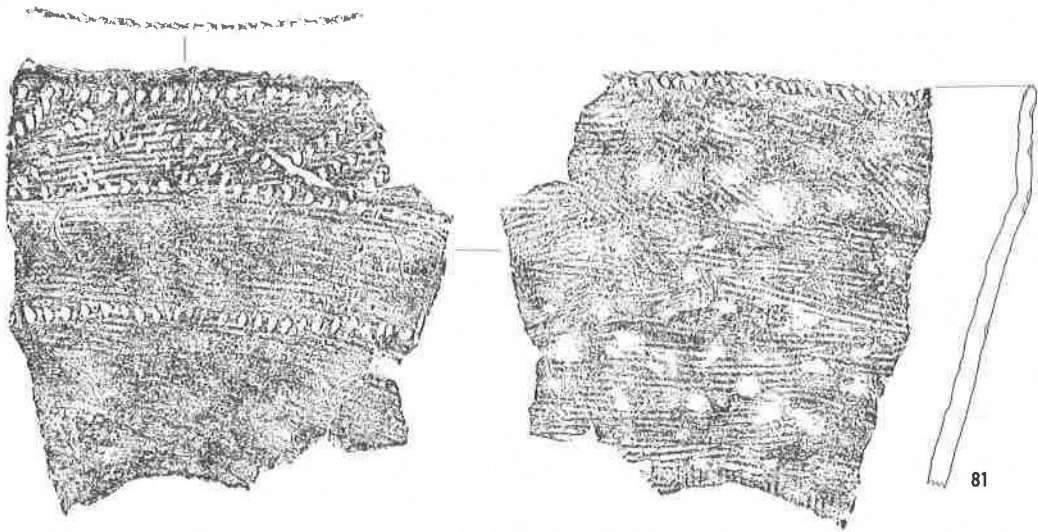
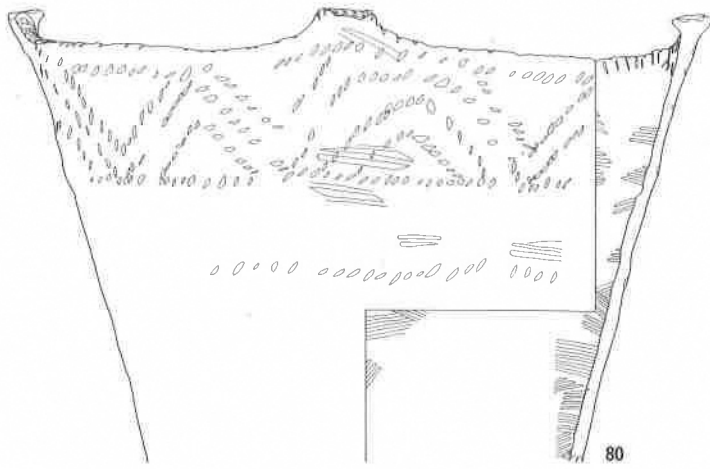
第41図 Aトレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(6)



第42図 A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(7)



第43図 A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(8)



0 10 20cm

第44図 A トレンチ第Ⅷ層出土縄文式土器（早期）実測図(9)

S-6群土器 (第45図, 図版35)

a類- (3)

(3)はほとんど屈曲が認められない。しかし、屈曲部に相当する個所に爪形文を配し、口縁端部付近にも爪形文を配し、その間に縄文を施す。端部に刻目、内面にも爪形文を施す。

b類- (4~8)

(4)~(8)は、やはり屈曲がほとんどなく、器形は粕畑式に似るが、爪形の施文法は、端部付近と胴部付近に施し、その間を波状の爪形文を施している。(5)は、小さな皿状突起がつく。

(9)~(10)は、底部が平底となっており、粕畑式の乳房状尖底とは明らかに違うので、このS-6群土器としたが、あるいはS-5群(茅山下層)に伴うものかもしれない。また(9)は、非常に大きな平底で、胎土に雲母を多く含んでおり、第43図(72)~(78)で見たように、条痕文のみの土器に近似している。

S-7群土器 (第46図, 第47図, 図版35, 図版36)

a類- (11~25)

外面は、水平な連続爪形文を施している。(11)は、小さな皿状突起がつく。(14)は、内外面ともに、貝殻条痕が非常に明瞭である。

d類(26)

連続爪形文は、貝殻の腹縁部を利用した、いわゆる、連続貝殻腹縁文となっている。

e類- (27)

連続爪形文を施さず、貝殻条痕文のみの土器であるが、大きな皿状突起を持つ。爪形の文様構成が不明であるので、ややS-7群には疑問も残る。

S-10群土器 (第47図, 図版36)

b類- (28~29)

すでに突帯(隆帯)はほとんど消滅しているが、刻目が大きく、波状になっている。類似に石山貝塚134~135がある。

c類- (30)

口縁端部は内外面より、刻目を施し、文様帯の上にも刻目をめぐらしている。文様は隆帯上に刻目を施し、波状になるものと考えられる。石山貝塚116に似る。

d類- (31)

隆帯上に刻目を施すが、その刻目は小さくいびつである。石山式への先駆的なものであろうか。

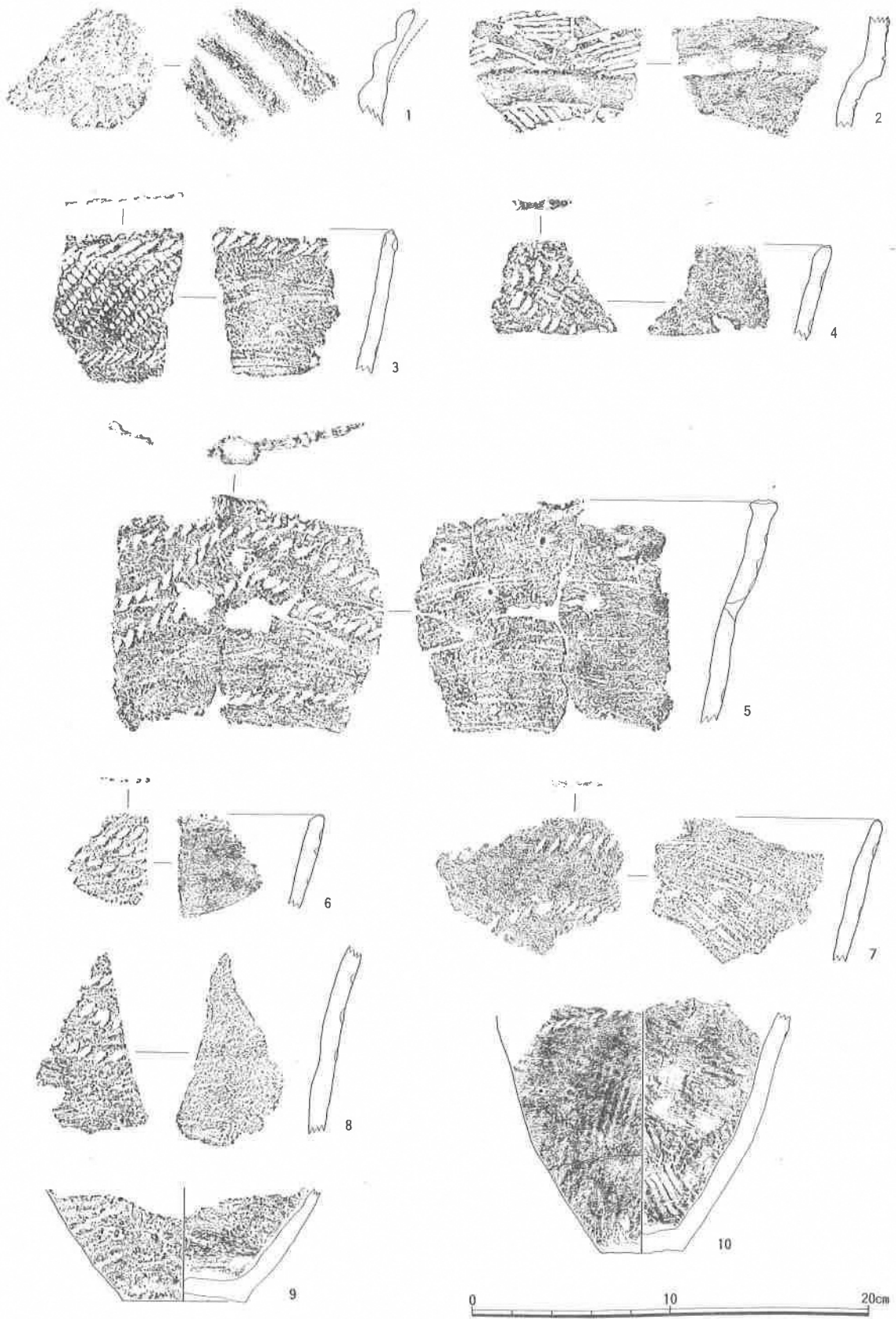
S-12群土器 (第47図, 図版36)

(32)は、貝殻で条痕文を施したあと、同じ原体で連続性のない疑波状の文様を施す。愛知県天神山遺跡出土の土器に酷似する。

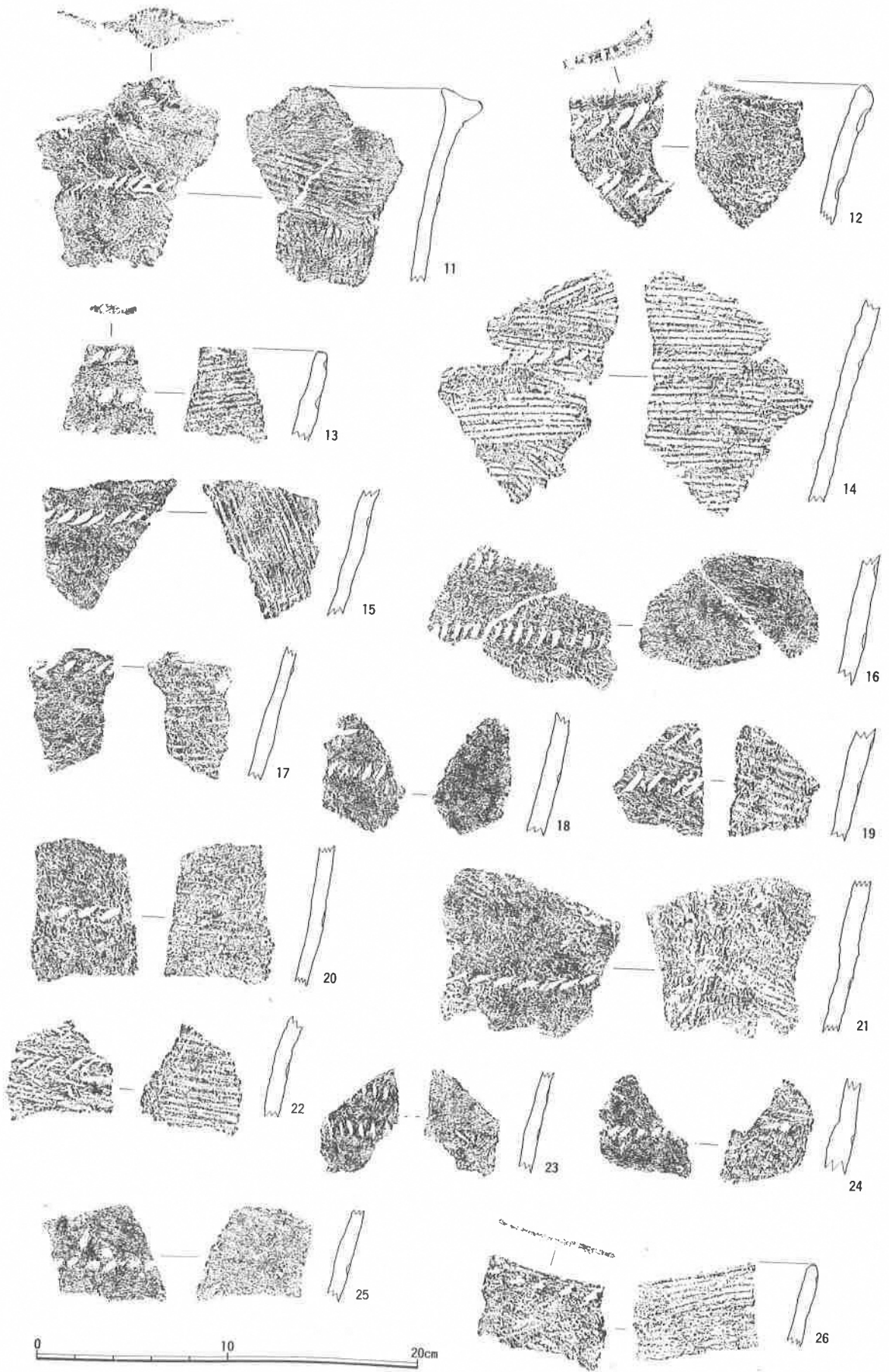
S-14群土器 (第47図, 図版36)

d類- (33~34)

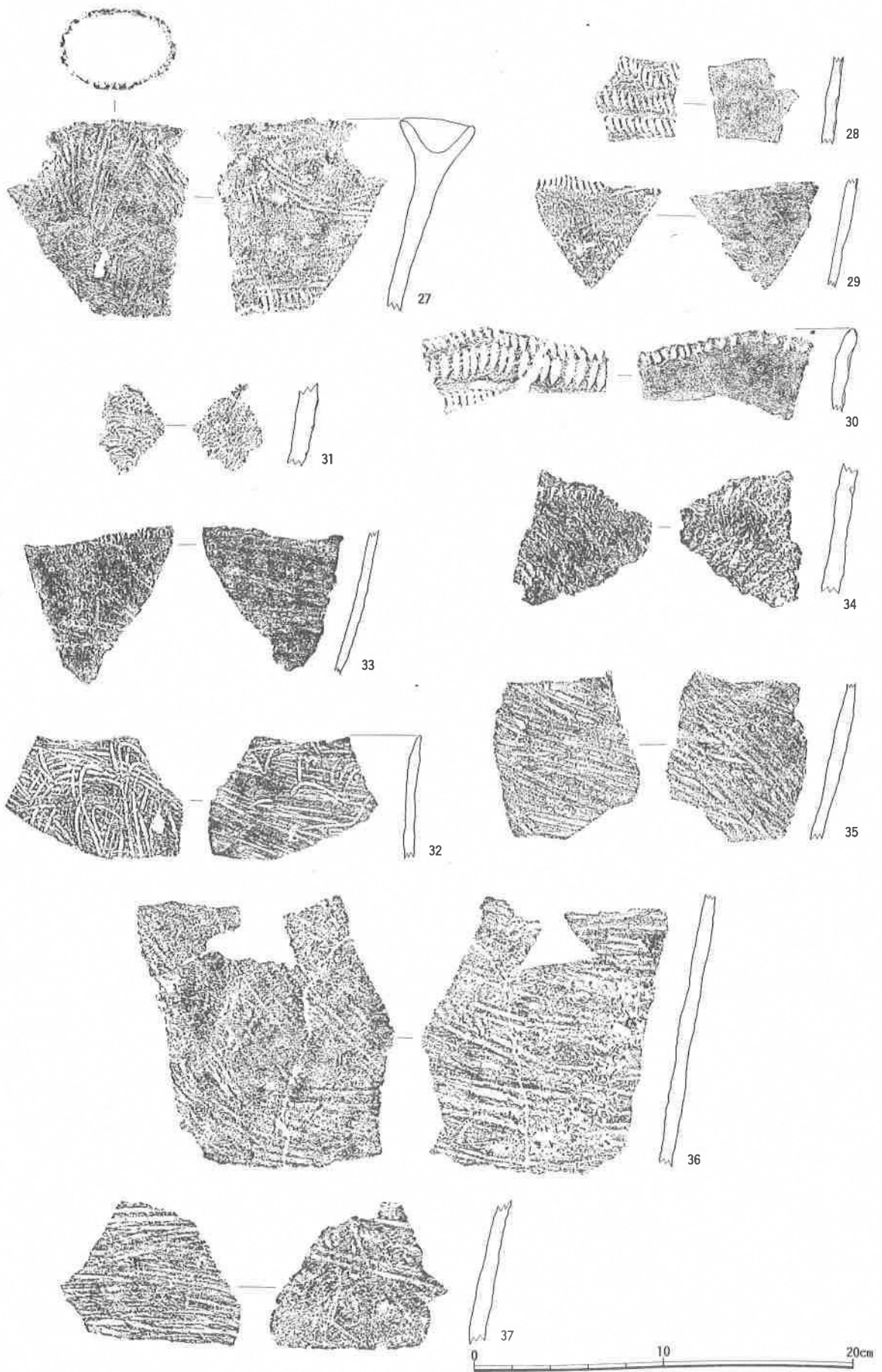
繊維の混入はほとんど認められない。文様は、連続性のない刻目文で、かつ、刻んだというよりは、ナデたというようなもので、ほとんど文様感覚はない。ただし(33)は器壁が非常に薄くなっており、S-11群に近い。



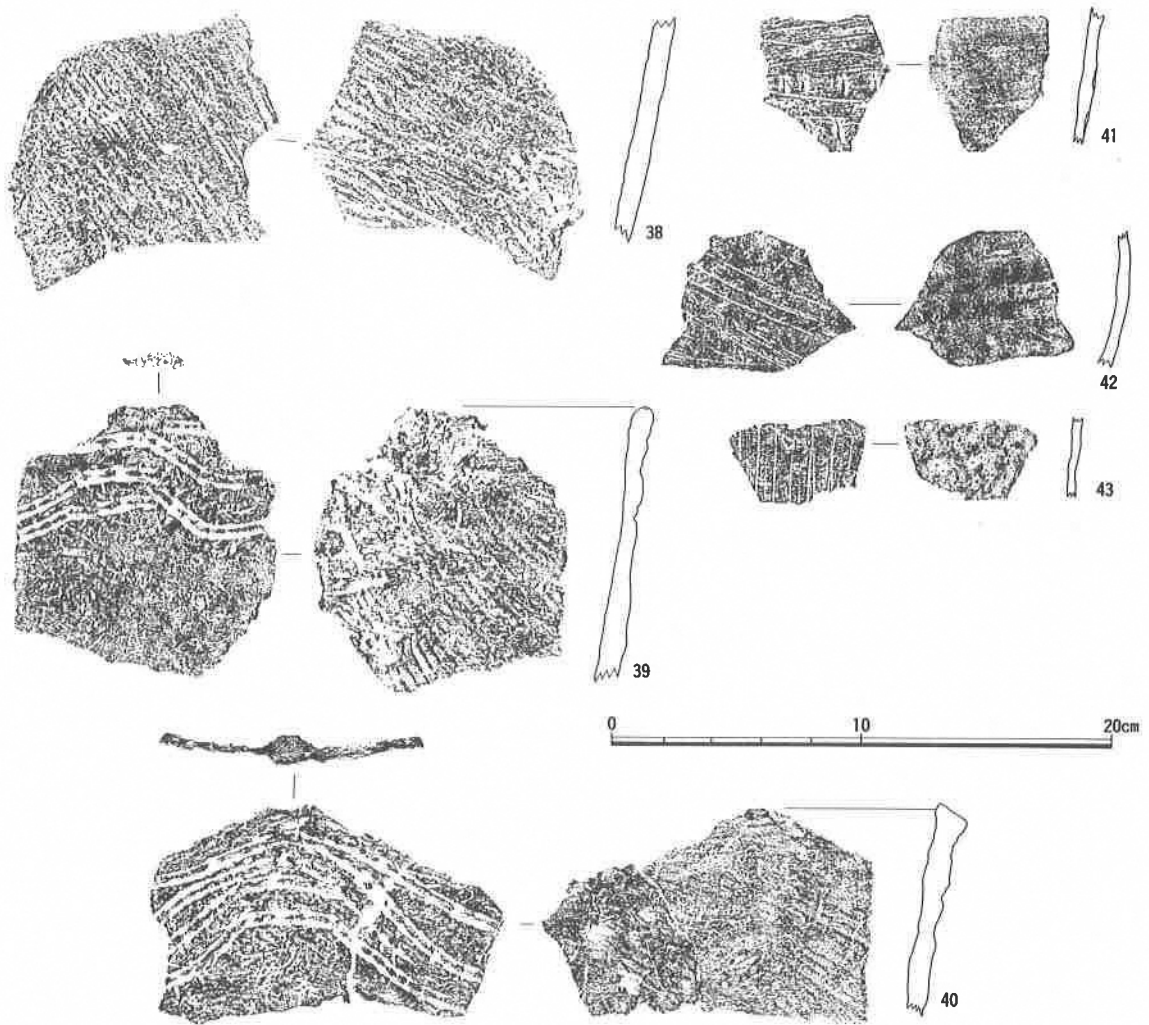
第45図 Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)



第46図 Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器(早期)実測図(2)



第47図 A トレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期）実測図(3)



第48図 Aトレンチ第Ⅶ層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(4)

S-16群土器（第47図，第48図，図版36）

(35)～(38)は，内外面ともに条痕文のみの土器で繊維を含み，早期末の特徴を有している。胎土よりS-7群（粕畑式）に伴う条痕文土器と考えられる。

SZ-1群土器（第48図，図版36）

b類-(41)

(41)は，やや間隔のあく爪形文を施し，そのうえから簡略化した条痕文を施す。器壁も薄くなっており，繊維はすでに含まない。

c類-(42～43)

繊維を含まず，器壁もうすいオセンベ土器で，外面は沈線施文し，内面には指頭圧痕を施す。静岡県木島遺跡出土土器に似る。

SZ-2群土器（第48図，図版36）

(39)～(40)は口縁が波状（小さな皿形突起？）となり，半載竹管を用いて，押し引きをおこなっている。繊維は，かなり含んでいる。神奈川県下吉井遺跡出土A類土器に類例が認められよう。下吉井式は前期とされているが，ここでは一応，早期の胎土，焼成と同一であるため早期末～前期初頭におさめた。

(4)灰色粘土層出土縄文式土器

ここに言う灰色粘土層は南部断面には現われない堆積層で、中央部埋葬人骨付近で確認した、堆積土である。埋葬人骨と同一層よりも上層に相当する。南壁セクションの灰褐色砂礫粘土層に対応するもの。出土した縄文式土器は以下の如くである。

S-2群土器 (第49図, 図版37)

i 類-(1)

(1)は楕円形の押型文土器で、9㍉×4㍉大の楕円文を施す。器壁は1.4cmを測る。

S-5群土器 (第49図, 図版37)

f 類-(2~4)

胴部と口縁部の境に一段の段を有し、屈曲した器形になるものと思われ、屈曲部に爪形文を配し、口縁部までを文様帯としているようで、文様は、すべて、縄文によるものである。なお(3)は、屈曲部より下段にも水平な爪形文を配している。

h 類-(5)

f 類に比してやや器壁はうすくなる。文様が縄文によるため、S-5群に相当するものであろう。しかし、胴部の屈曲は不明であるため、S-6群になるかもしれない。

S-6群土器 (第49図, 図版37)

b 類-(9~10)

2条の水平な爪形文間に、波状の爪形文を施すものである。特に、(9)は屈曲を明瞭に残している。

c 類-(6~8)

爪形文を波状に施すのは、b 類と同じであるが、文様帯に縄文と爪形と同時に施している可能性が高く、縄文と爪形の両方を文様としているため、c 類とした。3点とも口縁は波状口縁となり、端部には刻目を施す。(7)には内面にも爪形文が認められる。

S-7群土器 (第49図, 第50図, 第51図, 図版37, 図版38)

a 類-(11~28)

条痕文地に、水平の二条の爪形文を配したもので、屈曲も段も認められない。(11)~(15), (19)は、口縁が波状口縁となっている。また(11)~(17)は、口縁端部に刻目を施している。特に、(13)~(15), (18)~(19)には、内面にも爪形文が配されている。

f 類-(29)

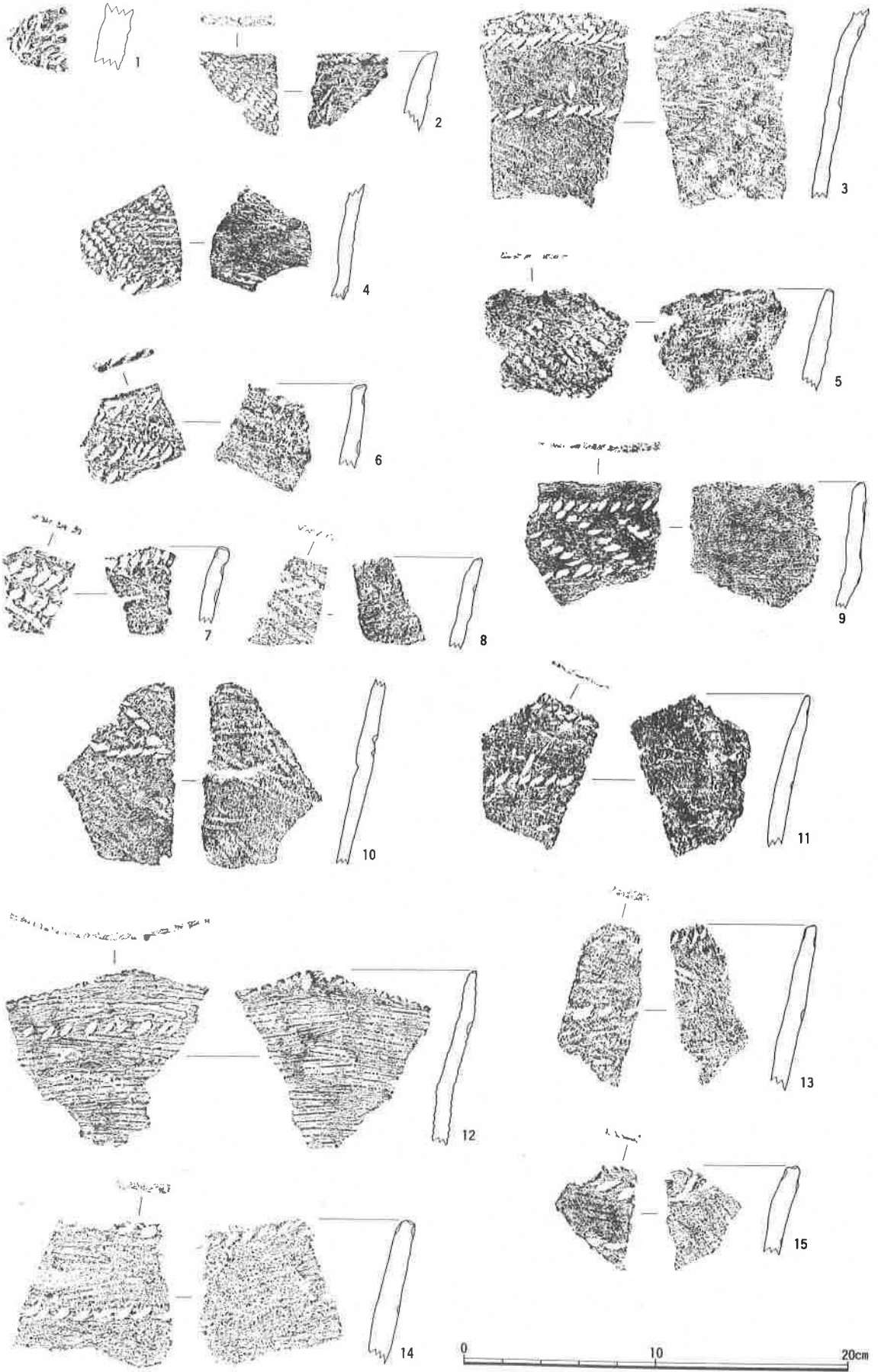
二条の爪形文は、水平で、a 類と同じ施文ではあるが、その爪形は、異常に大きく、石山貝塚149に似るが、繊維の含有量、器壁の厚さが1.3cmにも及ぶことから、石山式とは考えられず、S-7群に含めた。端部には、刻目、内面には、爪形をそれぞれ施している。

S-11群土器 (第51図, 図版38)

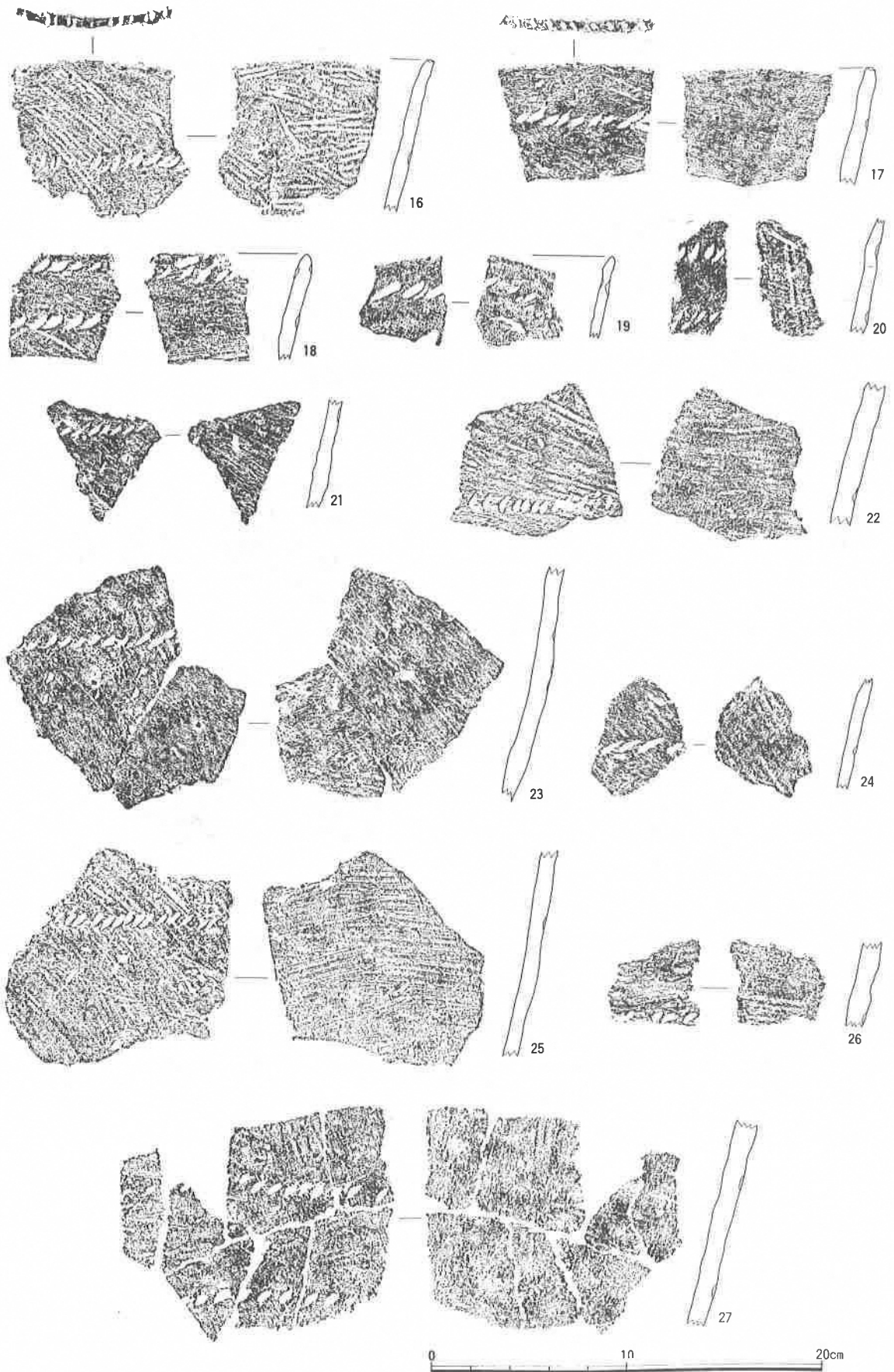
(30)~(31)は、いわゆるオセンベ土器のように器壁が薄く、4~5㍉を測る。繊維もほとんど認められない。(30)の刻目は、密であるが、(31)はやや間隔があく。しかも、外面全体を指頭圧痕によって調整している。

S-13群土器 (第51図, 図版38)

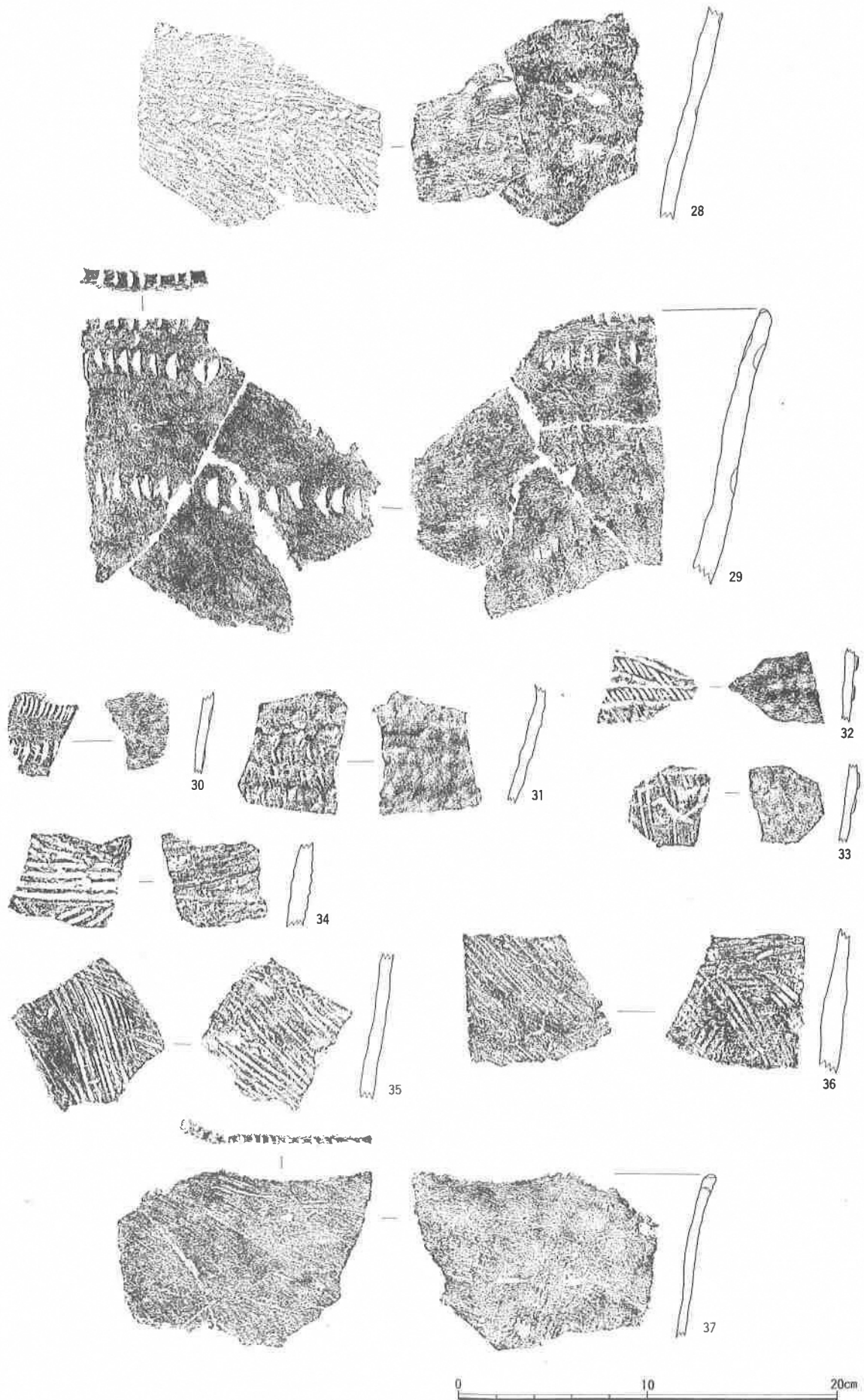
(32)~(33)の器壁は、うすくなり、5㍉程のいわゆるオセンベ土器である。繊維もまったく認められない。うすい隆帯を波状あるいは不規則に貼り付け、その隆帯上に楕状施文原体によって斜めに密に沈線を施している。愛知県塩屋遺跡出土土器とまったく同じものである。



第49図 A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(1)



第50図 A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(2)



第51図 A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期）実測図(3)



第52図 A トレンチ灰色粘土層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(4)

S-16群土器（第51図，図版38）

(34)～(37)は，すべて，条痕文地のみの土器である。

(37)は，口縁が波状口縁となり，端部に刻目を施している。胎土は，すべて，雲母，角セン石を多量に含んでおり，これら条痕文土器だけで一群を成すものと考えられる。

S-17群土器（第52図，図版38）

(38)は無文の土器である。(39)は口縁端部を指頭圧痕で上部から押えつけている。文様は認められず，無文土器としたが，あるいは，上ノ山式の断続突帯のない部分とも考えられる。愛知県八ツ崎具塚より類似土器が出土している。(40)の器壁は7㍉程で，S-16群（条痕文）に比してやや薄くなっている。外面には貝殻条痕は認められず，ナデ調整をおこなったようである。繊維を多量に含み，胎土もS-16群（条痕文）とは，ちが

い、雲母、角セン石は認められない。早期末の無文土器として位置づけできようが、その併行型式名は不明である。

S Z - 1 群土器 (第52図, 図版38, 図版39)

d 類 - (41)

口径20cmの小型の土器で口縁は波状口縁となっている。器壁も4㍉とうすい。前期北白川下層式への移行段階の土器として興味深い。

e 類 - (42)

口縁直下に、二段の押し引き文を施し、端部と押し引き文間に条痕文を残す土器。栗津湖底遺跡出土にやや近い土器があるが、この(42)と同様、早期末、前期初頭に位置付けできる土器と考える。

(5)第VI層黒色粘土層出土縄文式土器

第VI層は非常に粘性の強い堆積層で、その堆積幅は薄い。この層より早期～晩期の土器まで伴うようになる。しかし弥生式土器以降はまだ伴わない。出土した縄文式土器は以下のようである。

S - 2 群土器 (第53図, 図版39)

i 類 - (1)

(1)は、楕円形押型文を施す土器で、横位と縦位に楕円文を回転押捺する。楕円文は8㍉×4㍉で、緻密である。

S - 3 群土器 (第53図, 図版39)

b 類 - (2)

撚糸文で施文したと考えられる土器で、格子目状となっている。竹管に交差した縄文を回転させたものであろう。愛知県先苧貝塚では、高山寺式土器と併行にこの撚糸文系土器が出土しており、磯山でも、高山寺式土器と併行する土器と考えたい。

S - 4 群土器 (第53図, 図版39)

b 類 - (3 ~ 4)

細隆起線文によって文様帯を区画する。区画内に波状に4～5条の細隆起線文を施し、区画外は無文となり、交点に刺突文を施す。この区画交叉部における刺突文が鶴ヶ島台式のメルクマールとしてウエイトを占めている。ただし、この2つの土器では細竹管による押し引き文がまったく見られない。

S - 5 群土器 (第53図, 図版39)

c 類 - (5)

(5)は小片であるため屈曲が不明であるが、刺突文のみを波状に配することから、第36図(8)と同じ系統のものであろう。

b 類 - (6)

小片であるが、皿状突起を有する口縁部で縄文を施している。施文部分に指頭圧痕と考えられる浅い沈線を有し、文様区画をおこなっている。内面にも爪形文を配している。

f 類 - (7 ~ 10, 14)

口縁部と胴部の境に明確な屈曲を有し、屈曲部段上に爪形文を配する。屈曲部より口縁部の間の文様は縄文のみである。(8)は屈曲部より下の条痕文部分にも一条の爪形文列を配している。(9)～(10)は、屈曲部より下にも縄文が認められる。(14)は指頭痕による幅広な沈線も施されている。

g 類— (11~12)

f 類と同じく屈曲部より口縁間は縄文施文のみであるが、屈曲部段上の施文が爪形文列ではなく、縄文原体を押捺している。また屈曲部より下にも縄文が施されている。(11)は口縁部は大きな皿状突起となる。胎土、焼成、色調より、(12)と同一個体と考えられる。口縁端部は内外面より刻目が施されている。

b 類— (13~14)

口縁部と胴部境の屈曲はまったくない。

文様は竹管を刺突あるいは押し引いて幾何学文状となる。文様構成上からは S—5 群に属すると見られるが、屈曲が既に失われていることから S—6 群への移行段階としてとらえられよう。

S—6 群土器 (第53図, 第54図, 図版39, 図版40)

a 類— (15~17)

既に口縁部と胴部境の屈曲はほとんど認められないが、屈曲部分にあたる場所には名残りとして、爪形文列は認められる。爪形文列より口縁に至る間は縄文施文のみである。(15)は、わずかに屈曲が見られ、その下段条痕文部にも爪形文列が一条配されており、S—5 群 f 類の第53図(8)と同一であるが、屈曲の差は明確に違う。(15)~(17)ともに皿状突起がつき、口縁端部には刻目文を施す。(15)~(16)は内面にも爪形文がある。

b 類— (18~28)

外面の文様は基本的に S—6 群で、屈曲部分にあたる位置に爪形文列を配し、口縁間を波状の爪形文が施されている。わずかな屈曲も(26)~(27)を除いては、もうほとんどわからない。(21)~(22)は口縁部に皿状突起を有する。特に(22)は凹状の皿状突起となっている。(23)は波状の口縁となる。(21)~(23)には内面にも爪形文を施している。口縁の残存する(18)~(23)、(28)は端部に刻目を施しているのがわかる。(28)は S—7 群とも考えられるが、外面の爪形が波状になっていることにより、一応 S—6 群 b 類に含めておいた。

S—7 群土器 (第54図~第59図, 図版40~図版42)

a 類— (29~82)

条痕文上に水平な爪形文を施している。

水平な口縁を有するもの — (29)~(38)と波状口縁となるもの — (39)~(41), (43), (45)~(46)と皿状突起を有するもの — (42), (44), (47)~(48)と口縁に3種のパターンが存在する。また(49)は皿状突起とは呼びがたく、内部空洞の円柱状突起様をしている。これら口縁部の残存するものに関しては、口縁端部上に刻目を施しているものが多い。(29), (31)~(37), (40)~(50), (52), (54) 内面爪形文を配するものは、(35)~(40), (48)~(49), (52)である。

外面爪形文はほぼ変わらないが、(54)はE字形となっている。また(65)及び(77), (79), (81)は爪形文の刻み方が浅く、やや趣を異にしている。爪形は数段にわたるものと考えられるが、大半は2段ではないかと考えられる。(35), (44)は、明らかに3段にわたっている。

g 類— (83)

(83)は他の S—7 群に比して、器壁が薄い。また外面の爪形文も鋭角に施されており、刺突と呼べる。これは口縁端部に施された刻目も同様に、深く刻み込まれている。

S—8 群土器 (第59図, 図版42)

a 類— (84)

(84)は、外面に隆帯を持ち、隆帯を上下から押えつけた刻目をもつ。繊維の混入もまだ認められる。これは、いわゆる上ノ山式土器と呼ばれるものである。

b 類一(85)

外面羽状に極端に大きな刻目を施している。口縁端部は、外面より深く刻目を施す。内面も端部付近に長い刻目を施し、条痕文を残す。焼成は良好で堅緻である。愛知県八ツ崎貝塚出土の第三類土器 b 群に類例が求められる。

S-9 群土器 (第59図, 図版42)

a 類 (86~90)

外面に断面三角形に近く高い突帯をめぐらし、その上部にダイナミックな刻目を施している。口縁端部にも大きな刻目を施す。繊維の混入はまだ認められる。(90)は端部内外面より刻目を施している。

b 類一(91)

口縁端部は内外面より大きな刻目を施し、さながら S-8 群の隆帯を見るようである。しかし、外面の突帯は、断面が凸のように四角く、非常に低い。これは、次の S-10 群に見られる隆帯に近く、先駆的なものであろう。ここでは刻目の施文法より S-9 群に含めておいた。

S-10 群土器 (第59図, 図版42)

c 類一 (92~93)

低い隆帯を数条付し、その上に刻目を施す。また隆帯のない部分にも刻目のみを羽状に施している。(92)は口縁端部に刻目を、(93)は内面にも刻目を施している。

e 類一 (94~96)

(94)は波状の口縁をなすものである。隆帯を付し、その上を刻目している。これらは小片であり、あるいは隆帯部分以外にも刻目があった可能性も高い。

S-11 群土器 (第60図, 図版43)

(97)は、施文原体を波状に押し引く。器壁は薄く堅緻に焼成される。繊維はまだ明瞭に残る。石山貝塚出土 157~158, 160 に似る。文様構成としては天神山式といえそうである。

S-13 群土器 (第60図, 図版43)

(98)はオセンベ土器で、外面隆帯を付し、縦位に貝殻条痕をつけている。

S-14 群土器 (第60図, 図版43)

a 類一(99)

これは竹管状工具を押し引き、あるいは刻んだもので、文様としては波状となる。口縁端部はやや薄くおさめ、上部より刻目を施している。繊維は顕著に認められる。

S-15 群土器 (第60図, 図版43)

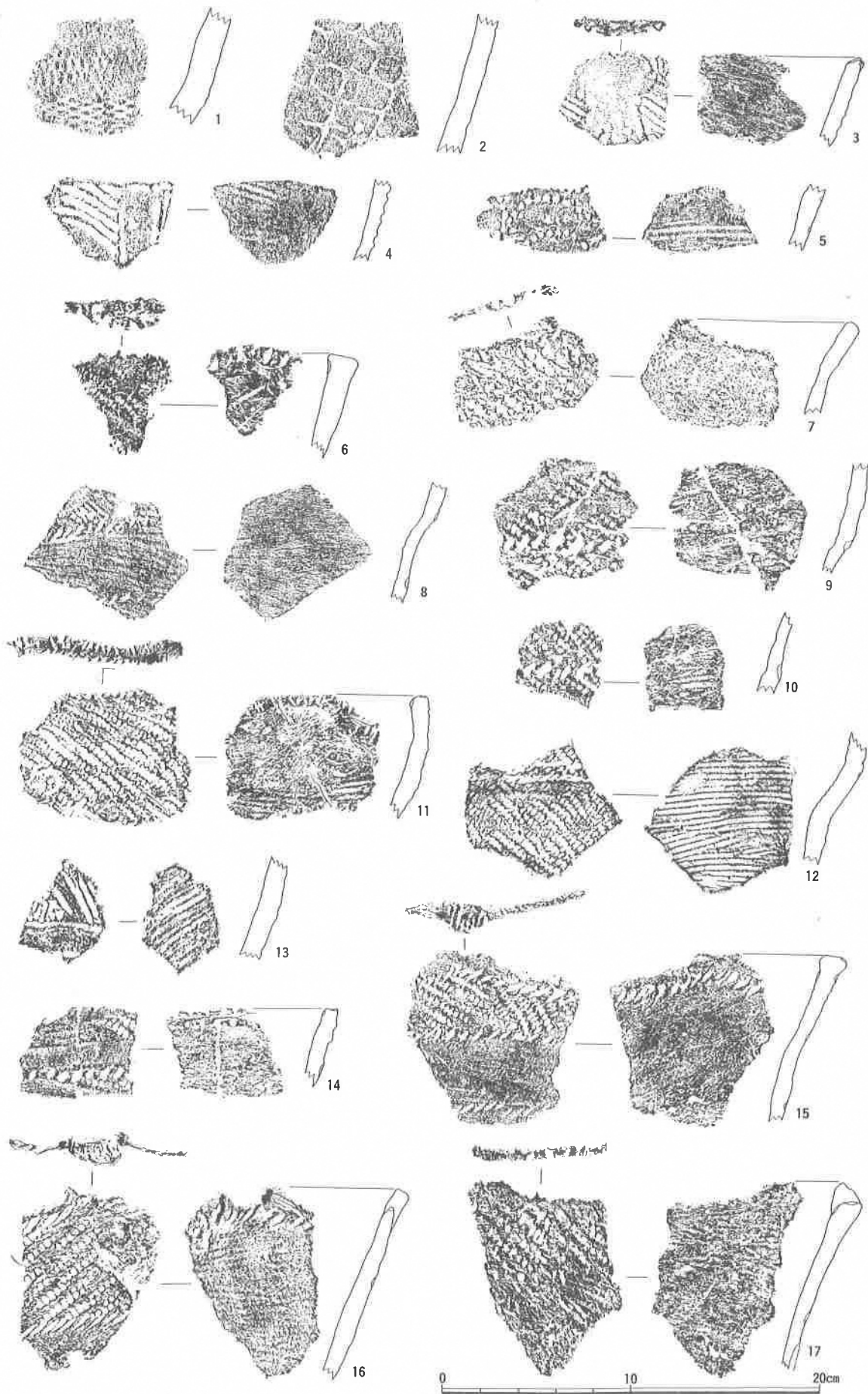
a 類一 (100~101)

(100)は指圧痕が残り、文様構成をなしていたようであり、S-6 群にともなうものと考えられる。口縁端部に大きな刻目を施す。(101)は繊維の混入、器壁の厚さから、早期に属する縄文土器であろう。

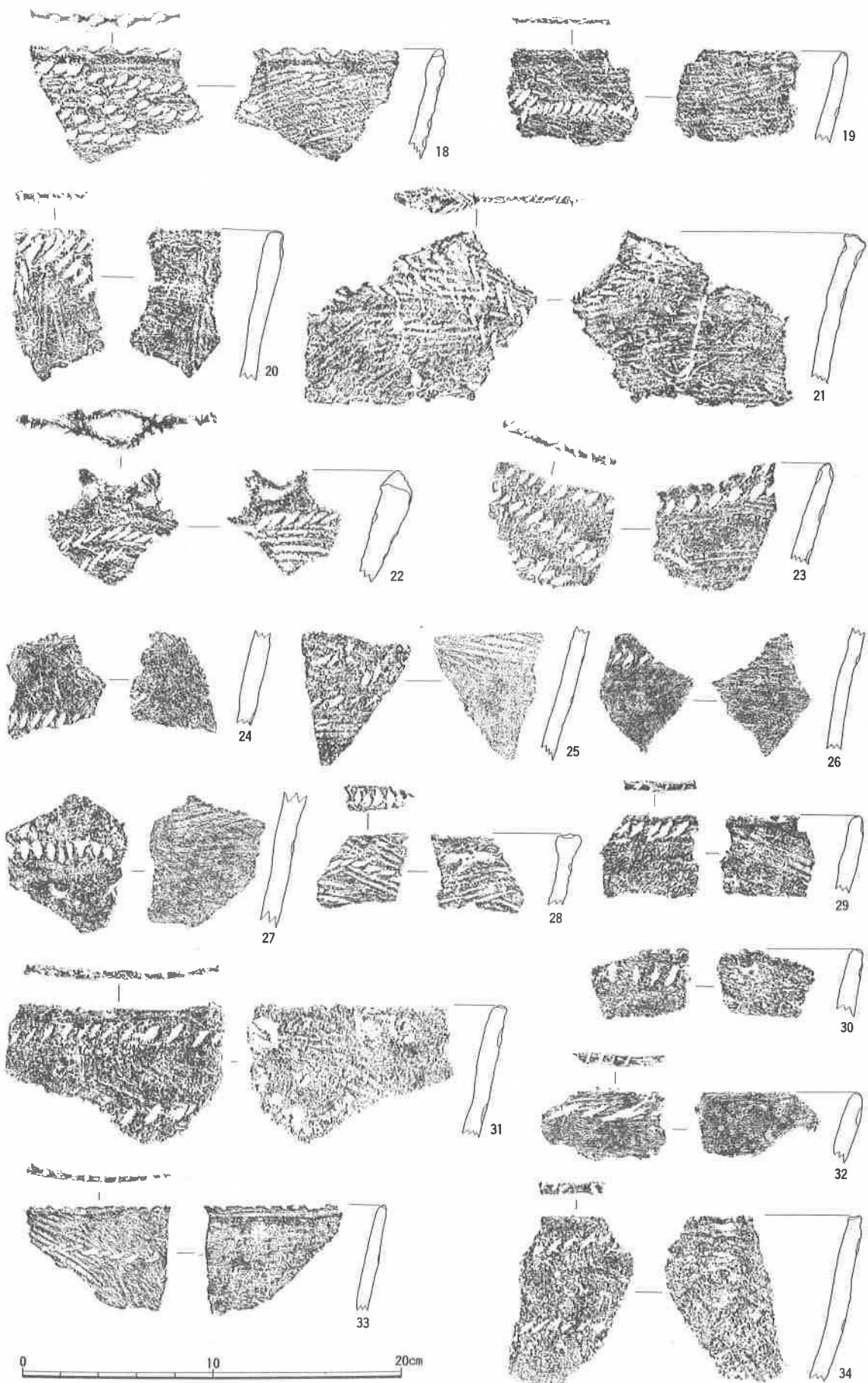
S-16 群土器 (第60図~第62図, 図版43~図版44)

(102)~(127)の条痕文土器は大別して2種類のものがある。これは施文ではなく、胎土の違いである。

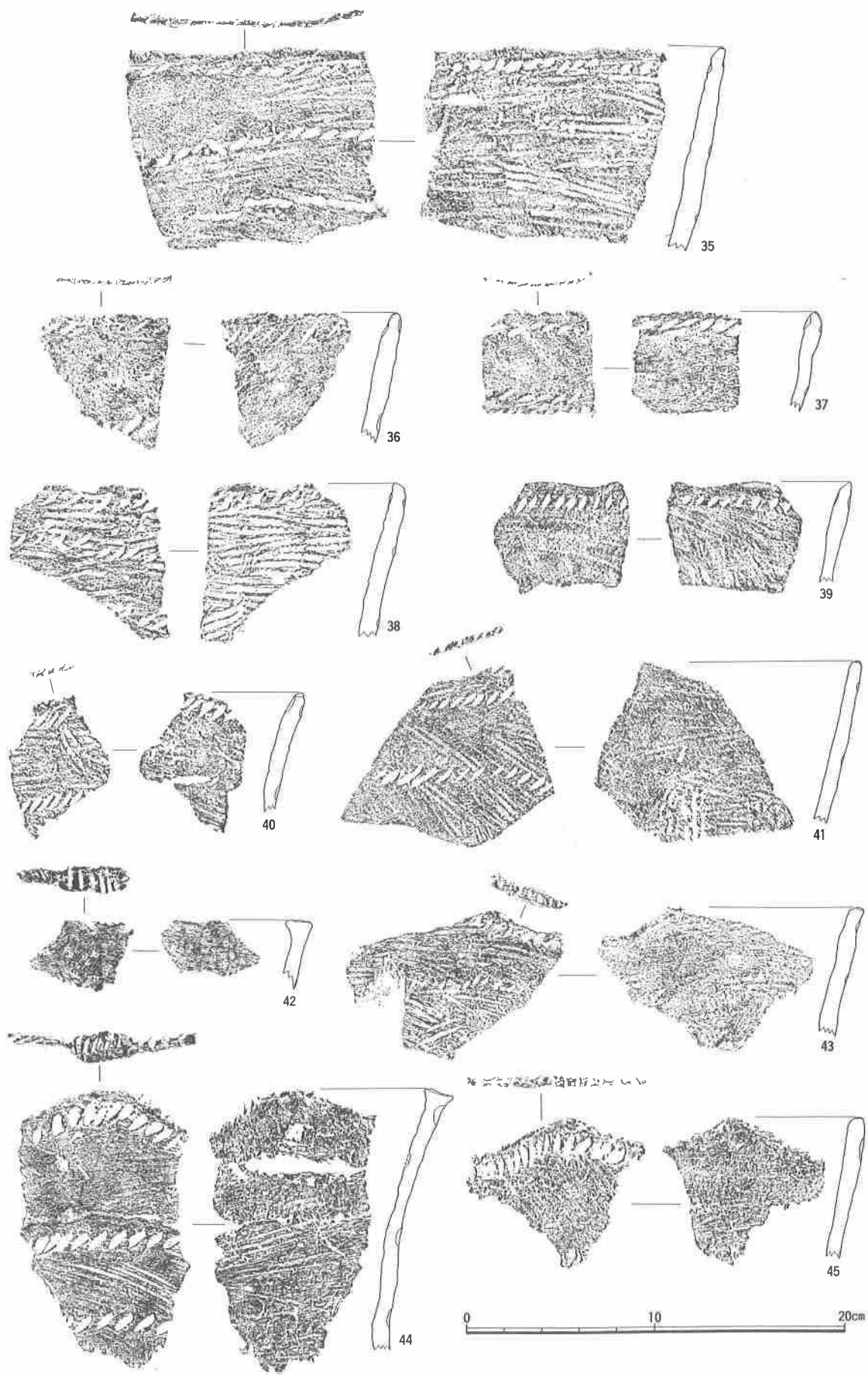
ここでは一括して、S-16 群としているが、まず、条痕が浅く壁面がうすいものは、胎土中に多くの雲母や角セン石を含んでいる(107~113, 115~124, 126~127)。もう一つのもは、条痕が明瞭で器壁が厚く、繊維の混入も顕著である(102~106, 114, 125)。これは、前者は早期末~前期初頭に位置付けられる、条痕押し引き土器と類似しており、それらと併行あるいは、破片と考えられる。後者は S-6 群ないし S-7



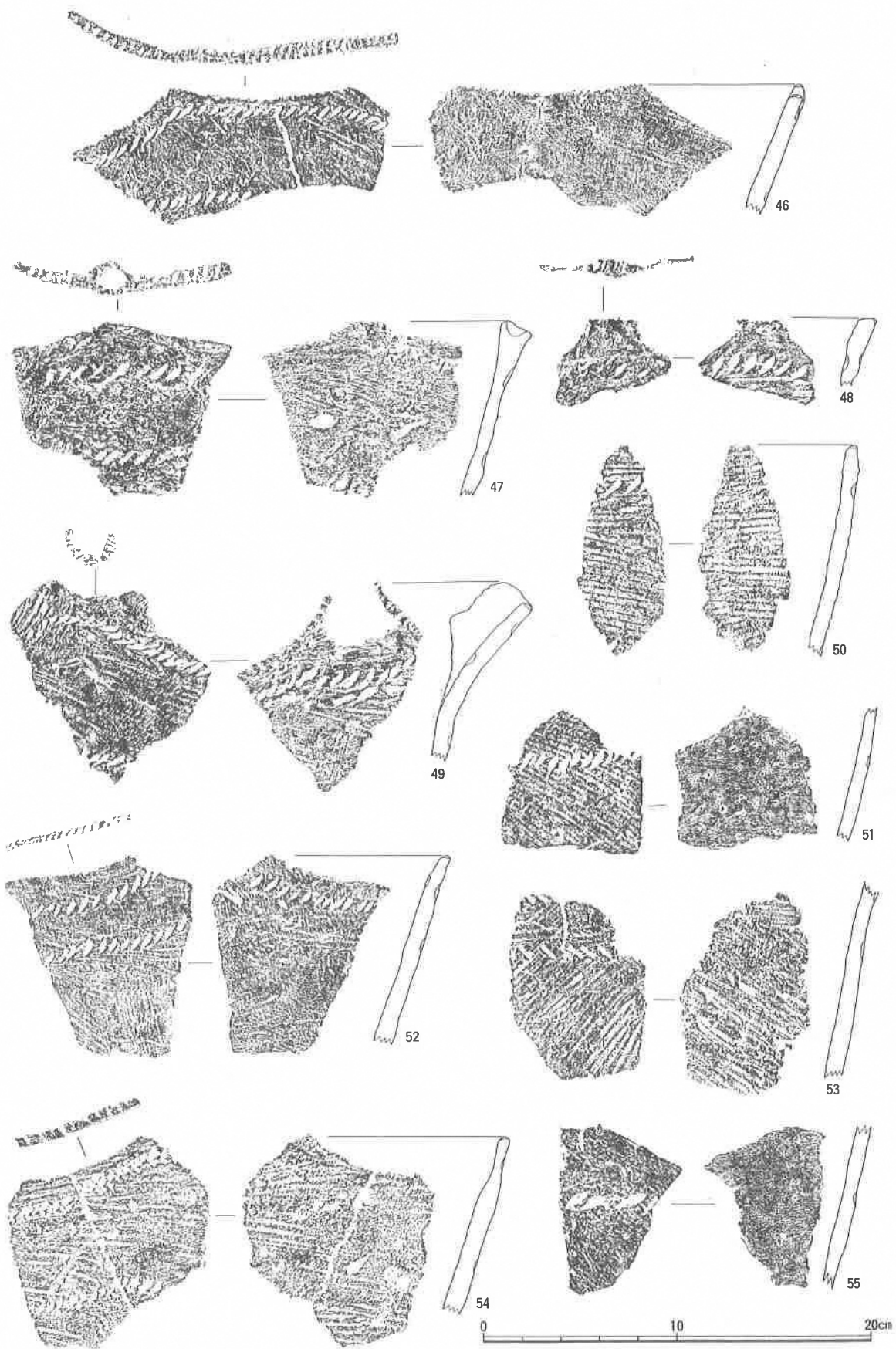
第53図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(1)



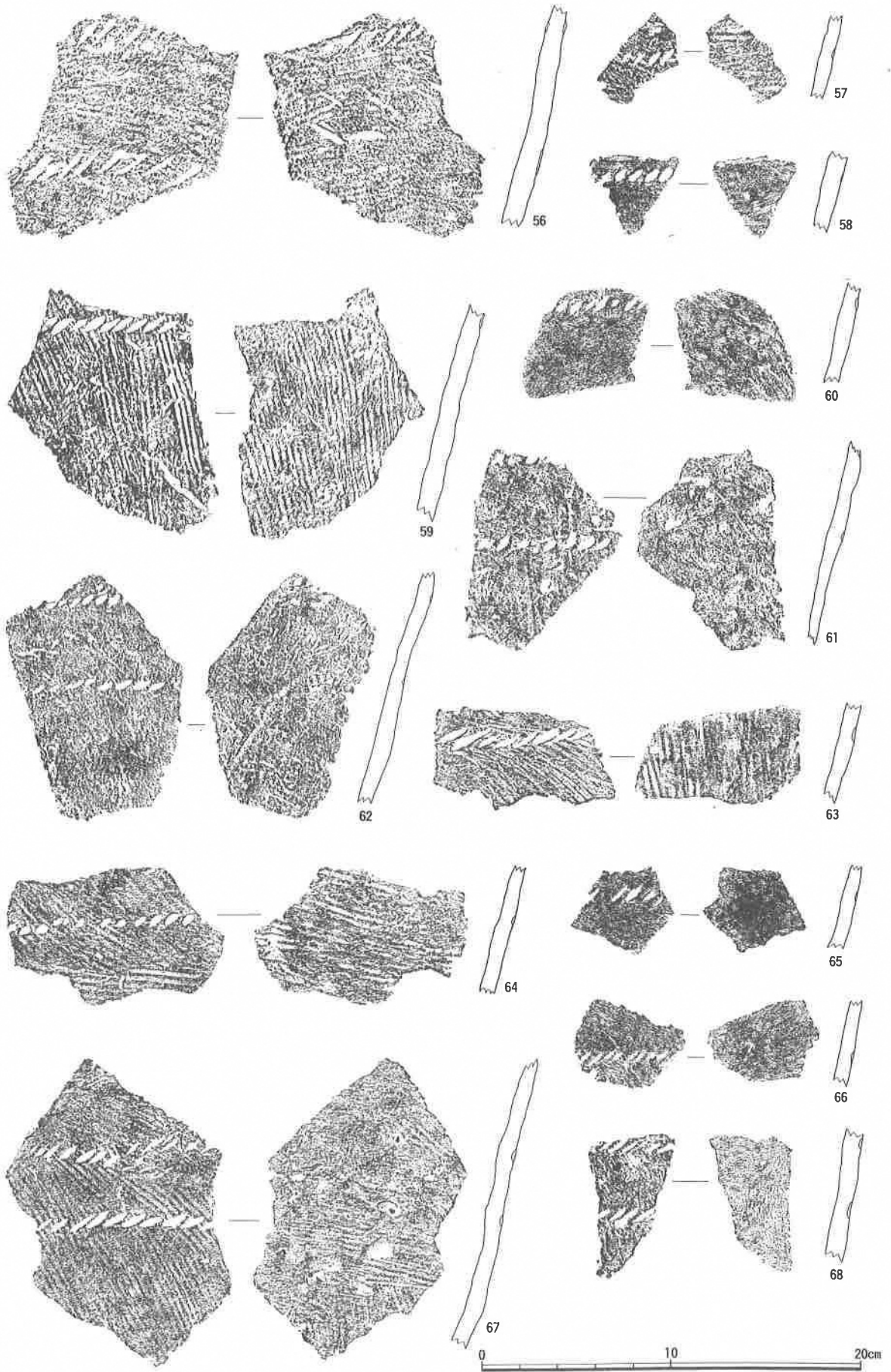
第54図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(2)



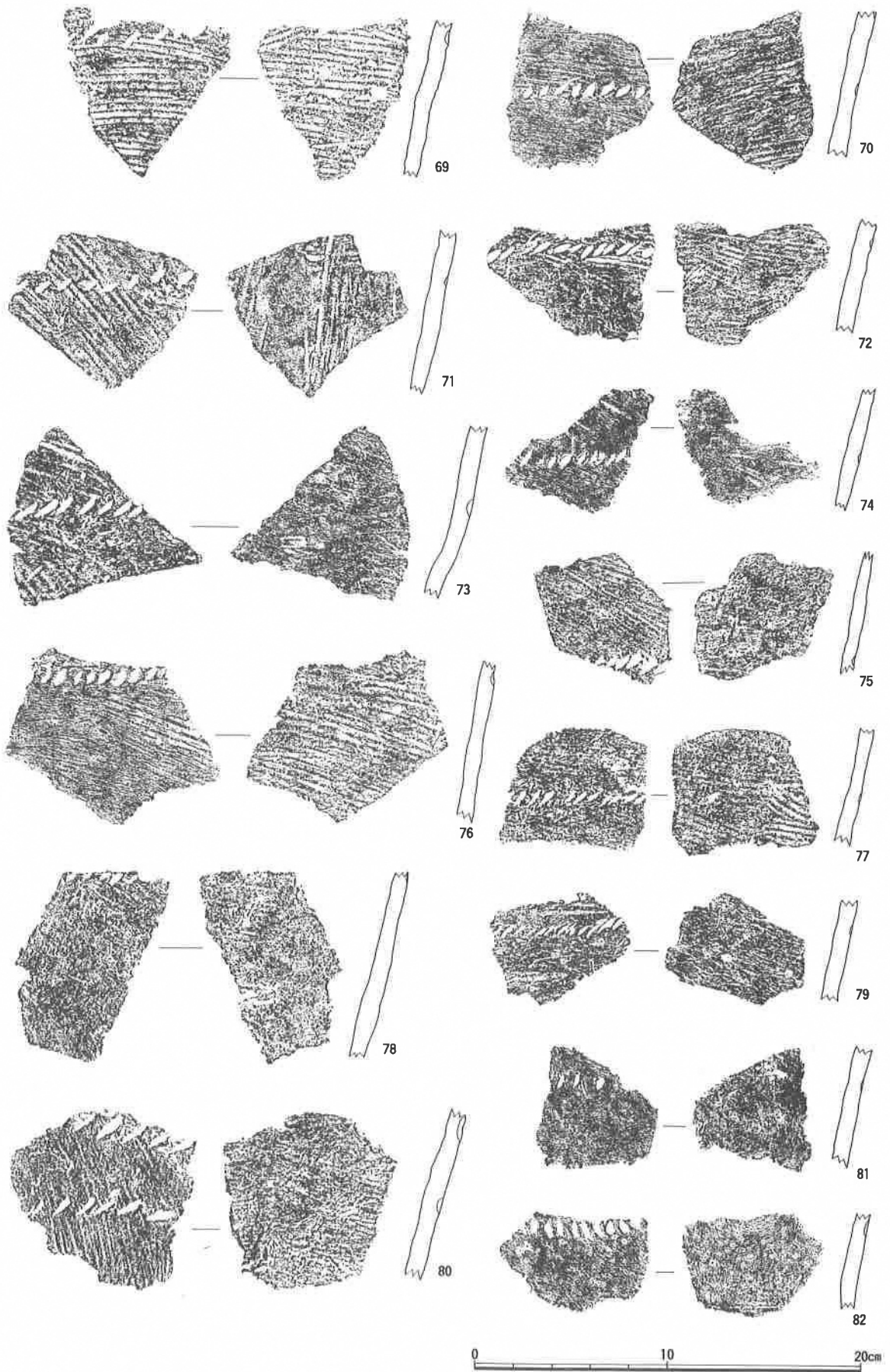
第55図 A トレンチ第VI層出土縄文式土器（早期）実測図(3)



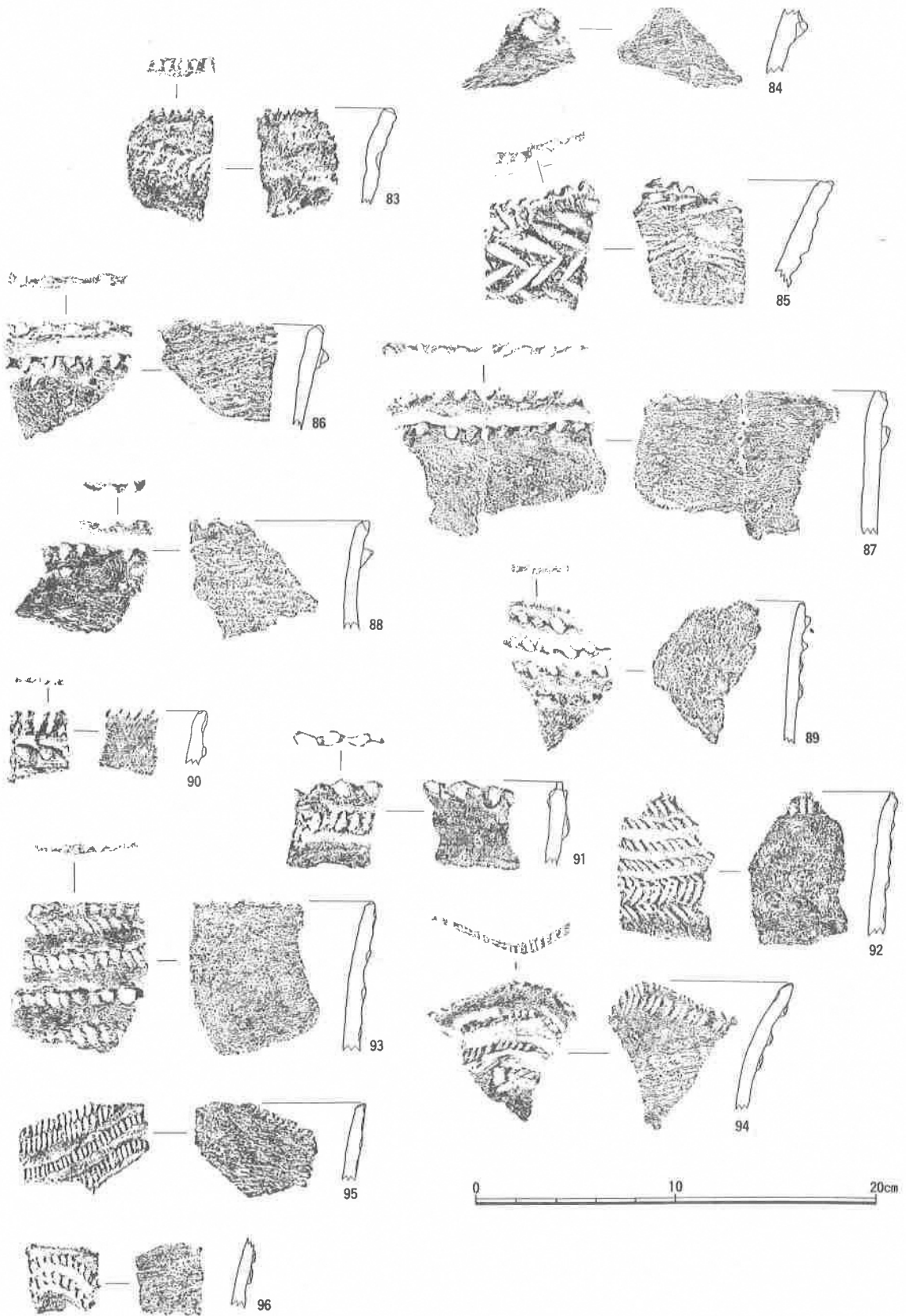
第56図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(4)



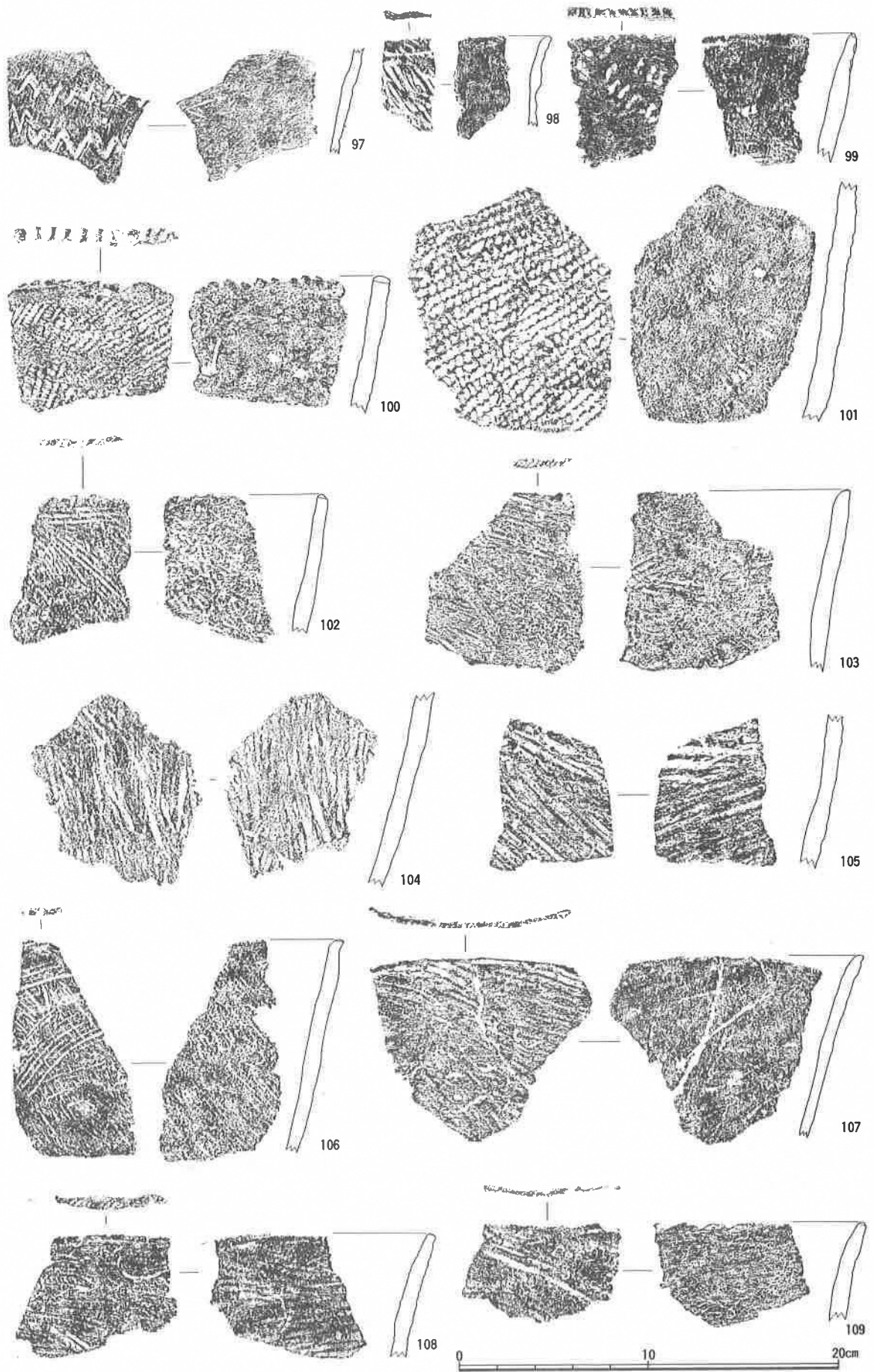
第57図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(5)



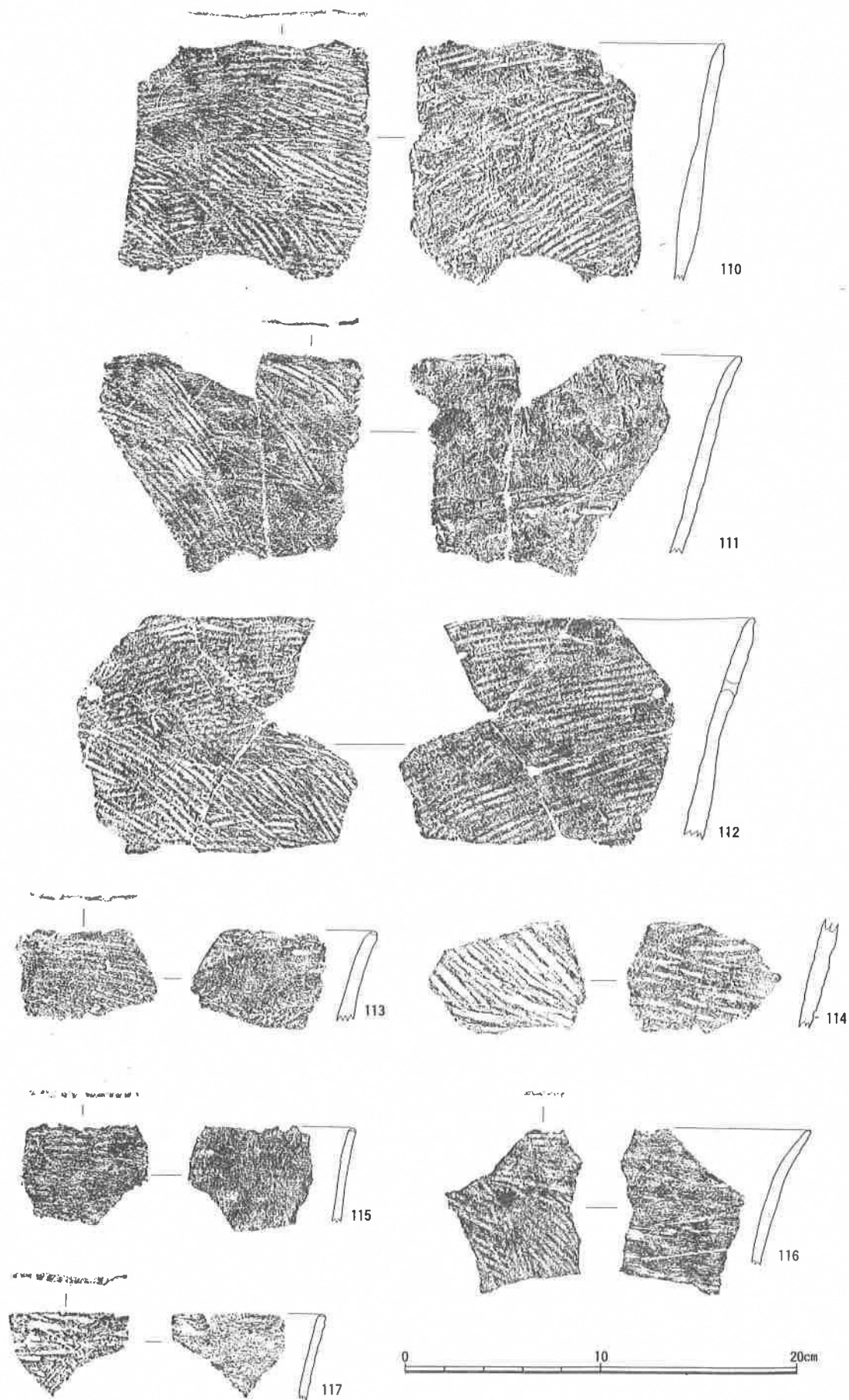
第58図 A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(6)



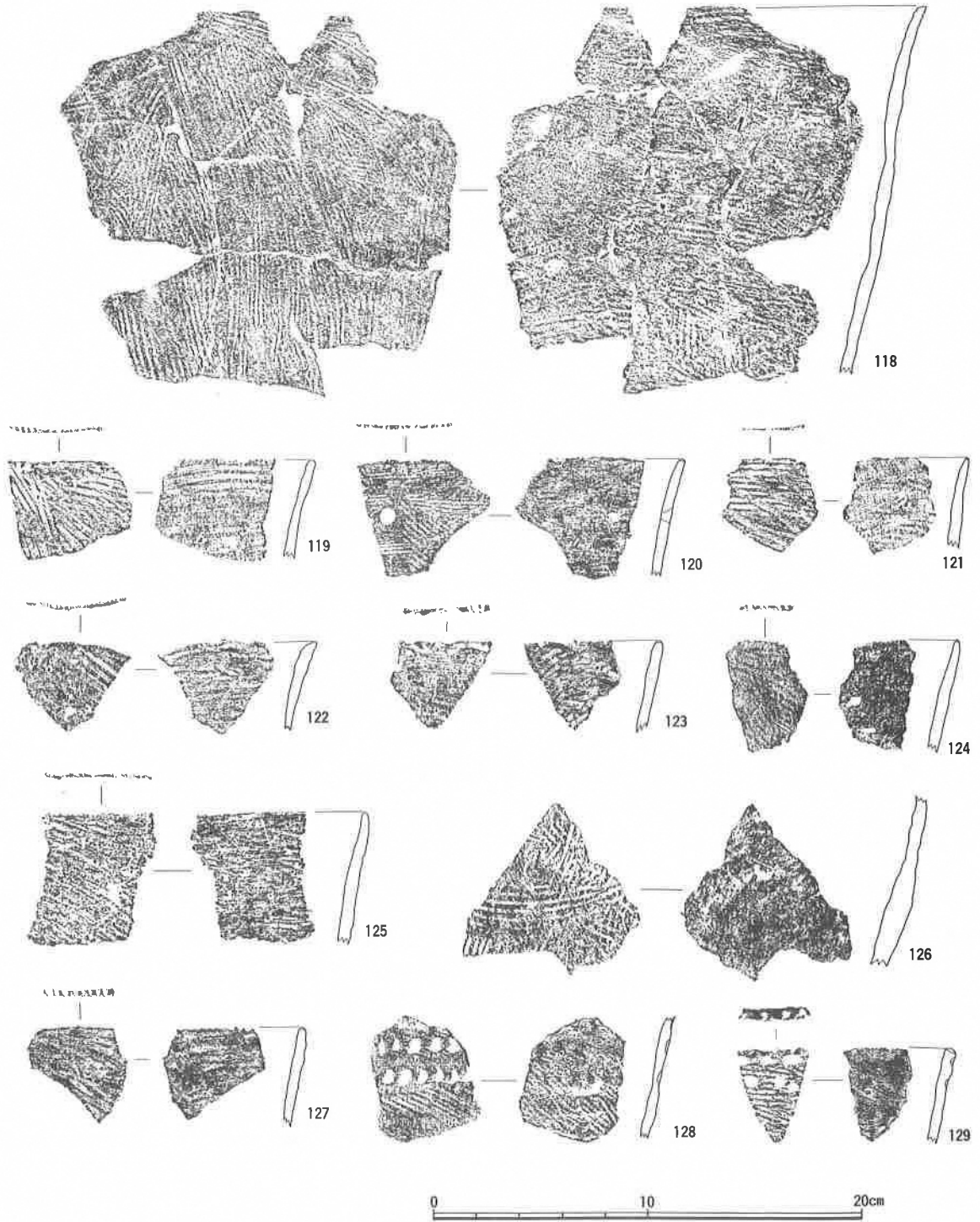
第59図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(早期)実測図(7)



第60図 A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(8)



第61図 A トレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期）実測図(9)



第62図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(10)

群と併行期と考えられる。

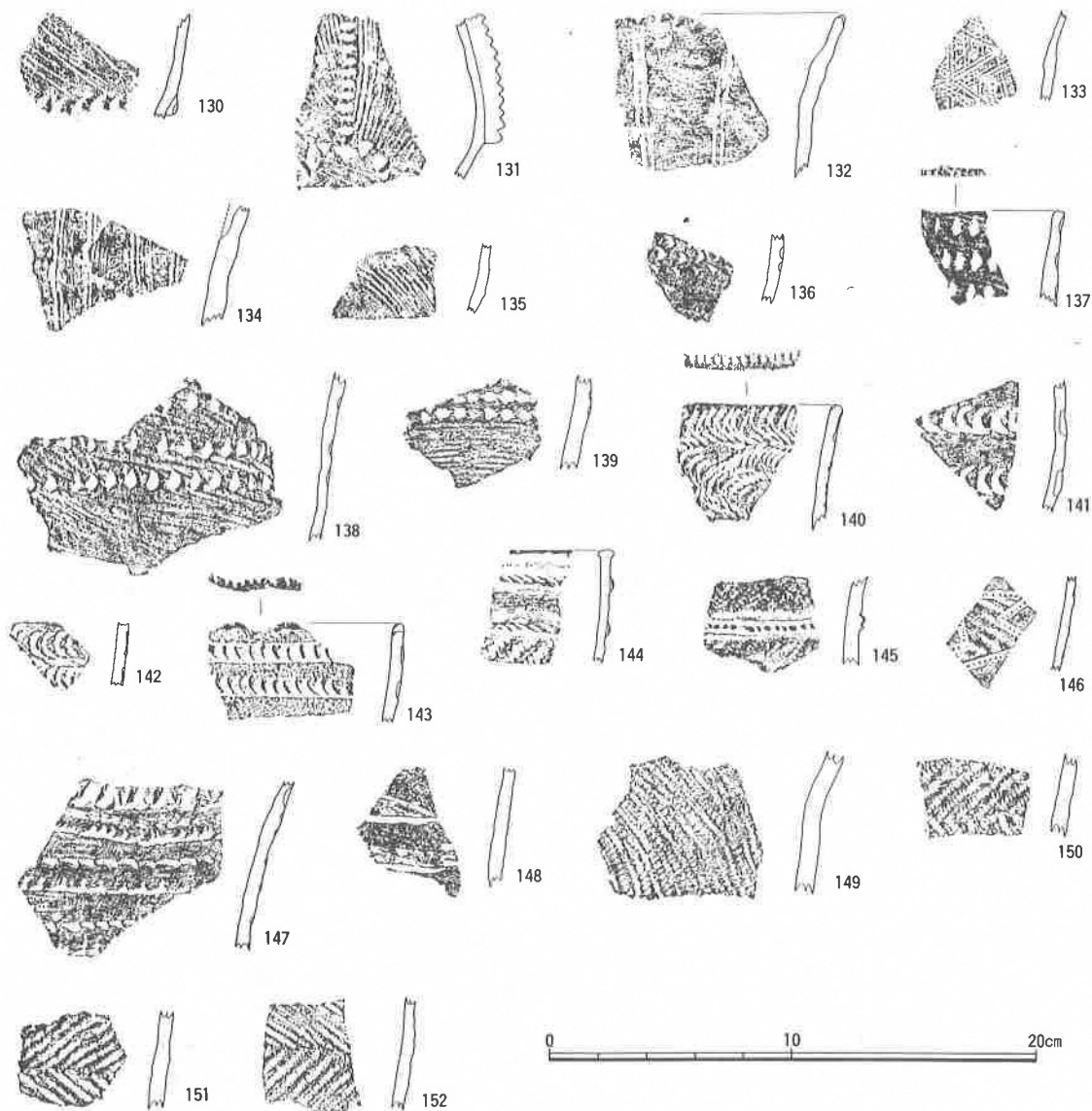
SZ-1群土器（第62図，図版44）

e類一（128～129）

（128）～（129）ともに条痕文地に竹管状工具で押し引き文を施すものである。雲母の混入も顕著である。

Z-1群土器（第63図，図版44）

（130）は口縁と胴部の境に隆帯をつけ、竹管状工具によって刺突している。（131）は波状の口縁より縦位の隆線を垂下させている。



第63図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(前期)実測図(11)

(132)~(135)は、数条1組の細線を縦位、斜位に施している。これらは、愛知県清水ノ上貝塚や、静岡県木島遺跡出土のものと同一であり、清水ノ上Ⅰ式あるいは木島Ⅷ式と呼ばれるものであろう。

Z-2群土器 (第63図, 図版44)

b類一(136~139)

典型的な「3」字状の刺突文ではなく、D字状に近い刺突文である。すべて条痕を残している。これらは羽島下層Ⅱ式より、北白川下層Ⅰa式にかけてのものであろう。

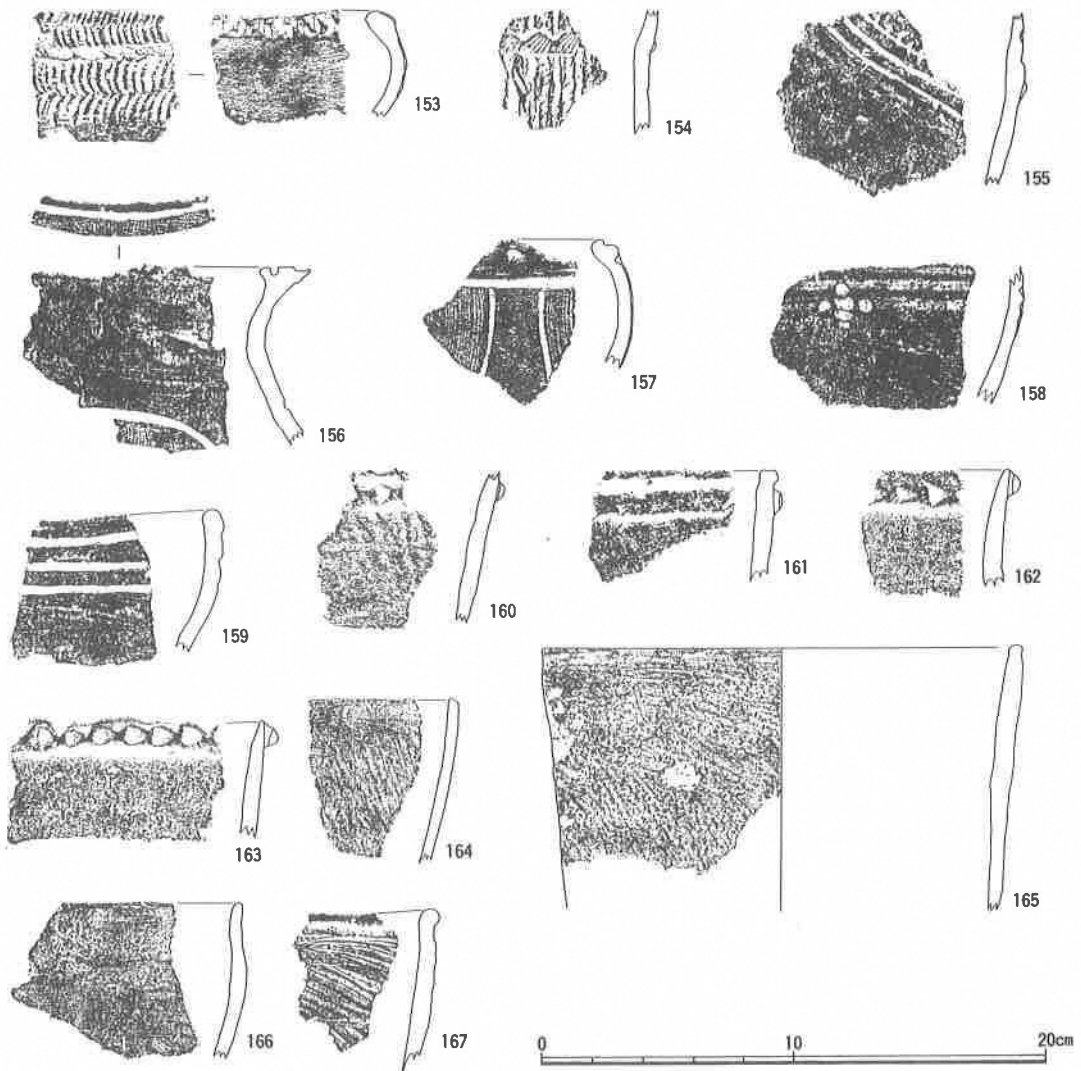
Z-4群土器 (第63図, 図版44)

b類一(140)

口縁部直下に連続爪形文を施し、下部に鎖状の爪形文が蛇行して施されている。鳥浜貝塚の分類による北白川下層Ⅱa式のb類に属するものである。

Z-5群土器 (第63図, 図版44)

a類一(141~142)



第64図 Aトレンチ第Ⅵ層出土縄文式土器(中・後・晩期)実測図(12)

(141)～(142)は、ともにC字の爪形文であるが、内外面ともに貝殻痕はなく、平滑に調整されており、鳥浜の北白川下層Ⅱb式a類である。

b類一(143)

C字の爪形文の上下に直線の割り付線を付している。口縁は、細かい波状口縁となっている。

Z-6群土器(第63図, 図版44)

b類一(144)

口縁直下に2段にわたる突帯を付し、突帯上に刻目を施す。鳥浜具塚分類の北白川下層Ⅱc式のc類であろう。

Z-7群土器(第63図, 図版44)

a類一(145)

斜縄文を地文とし、いわゆる特殊突帯文と呼ばれる突帯を付したもので、北白川下層Ⅲ式と考えられる。

Z-8群土器(第63図, 図版44)

(146)は、幾何学的な平行線文の中に爪形文を配し、その文様帯に囲まれた空白部分に、部分的に斜縄文を施している。これは、その文様より、関東地方の前期諸磯a式土器の範疇に属するものと思われる。

Z-9群土器(第63図, 図版44)

(147) は、大胆な爪形文下に数段にわたる押し引き文を施す。外面は平滑に調整されているが、内面は横位に均等な貝殻痕を残す。(148) は、篋状工具による沈線と押し引き文を併用している。いずれも前期に属すると考えられるが併行期の型式は不明である。

Z-10群土器 (第63図, 図版44)

(149)~(152) は、密に施された縄文で、(151)~(152) は羽状の縄文となっており、北白川下層Ⅱa~Ⅲ式に伴うものであろう。

C-1群土器 (第64図, 図版45)

b類- (153~154)

(153) は、キャリパー形の器形で、長いC字形の爪形文を密に施している。口縁内面に幅1cmの縄文帯を施している。(154) は、低い貼り付け帯上にアルカ属の貝の先頭部圧痕をめぐらしている。この低い貼り付け帯は、縦位にも付されている。船元Ⅰ式と考えられよう。

C-8群土器 (第64図, 図版45)

a類- (155)

(155) は、型式不明であるが低い貼り付け突帯を有し、その貼り付け突帯にそうようにして数条の沈線を弧状に引く。

K-4群土器 (第64図, 図版45)

(156) は、胴部より口縁にかけて「く」の字状になっており、口縁端部は、T字状を呈し、その肥厚した口縁頂部に2条の沈線を施し、その沈線間に疑縄文を施す。外面の磨消し縄文も同様の疑縄文である。(157) は、浅鉢の口縁部で、山形状の隆起部分を付す。文様は沈線間に刷毛状工具の条痕を残す。これらは、京都府桑飼下遺跡出土中に類例を見ることができる。

K-5群土器 (第64図, 図版45)

(158) は、3条に沈線を密接して施し、巻貝の側面圧痕と同一巻貝頭部の刺突文を施している。元住吉山Ⅱ式と併行と考えられる。

B-1群土器 (第64図, 図版45)

b類- (159)

(159) は、浅鉢の口縁で竹管状工具による3条の沈線を施す。内外面とも平滑に調整されている。

B-2群土器 (第64図, 図版45)

a類- (160)

(160) は、口縁よりやや間隔をあけて突帯を付す。突帯上の刻目は、D字形を呈する。滋賀里Ⅳ式に相当するものであろう。

b類- (161)

(161) は、口縁端部を平坦に面をもたせる。ただし、突帯上の施文は工具の押し引きによるものであり、あるいは、B-3群(船橋式)に属する可能性もある。

B-4群土器 (第64図, 図版45)

b類- (162)

(162) は、口縁端部に突帯を付している。口縁の調整と突帯の貼り付けを同時におこなっている。突帯上はD字形を呈する刻目を付ける。長原式併行か。

c類- (163)

(163)は、突帯の位置および貼り付けは、(162)に似るが、突帯上の施文は、O字形の密な刻目となる。刻目の施文には、長原式併行期としては、やや疑問が残る。

B-6群土器 (第64図, 図版45)

(164)~(167)の土器は、晩期の無文土器である。器形は鉢で、調整は(164)~(166)が、篋状工具でいていねいにみがいている。(167)は貝による調整痕が明瞭である。

(6)第V層黒色砂礫粘土層出土縄文式土器

第V層は第VI層と堆積の厚さもほぼ等しい。土質も非常に粘性が強く、第VI層に似る。しかし第V層には地山の岩粒が多量に含まれている。この層からも縄文早期から晩期に至る土器が包含されていたが、弥生以降の土器は包まれない。出土した縄文式土器は以下のようなものである。

S-6群土器 (第65図, 図版45)

a類一 (1~3)

屈曲は、ほとんど認められないが、従来の屈曲部に相当する所に大型の爪形文を配する。この爪形と口縁との間にもう1条の爪形を水平に施文し、縄文を施文している。口縁端部には刻目がある。

S-7群土器 (第65図, 図版45)

a類一 (4~11)

条痕地に爪形文のみを施している。(6)は口縁に皿状の突起がつく。(11)は、爪形が他に比べて非常に小さい。

S-8群土器 (第65図, 図版45)

a類一 (12)

(12)の、低い2条の突帯には上下より交互に押えつけた刻目がある。石山貝塚80に似る。

S-9群土器 (第65図, 図版45)

b類一 (13~14)

いずれも低い突帯を付し、刻目を施す。(13)の刻目は、入海I式中ではやや扁平である。これは石山貝塚96に類例がある。いずれも繊維混入が顕著である。

S-10群土器 (第66図, 図版46)

c類一 (15~16)

(15)は、口縁直下に2条の爪形を施文し、その下に波状の突帯を貼りつけ、突帯上にも密な爪形を施文する。口縁端部にも刻目がある。

S-11群土器 (第66図, 図版46)

(17)は、繊維もすでに認めがたく、器壁も薄い。また爪形文も非常に浅く小さい。

S-12群土器 (第66図, 図版46)

(18)は、条痕文を波状に文様化した施文法をとる。石山貝塚156に類似する天神山式土器と考えられる。

S-16群土器 (第66図, 第67図, 図版46)

(19)~(28)の条痕文地土器も、下層と同様2タイプに分かれる。まず器壁が薄く、胎土中に雲母、角セン石を多量に含んでいるもの(19)~(27)、もう一つは、繊維を多量に含み器壁の厚いもの(28)である。(27)は、早期末、前期初頭に位置付けられる第52図41に焼成、胎土が非常に似かよっている。(21)は、内面に天神山式に見られるような条痕文による文様構成が認められる。口縁端部に小さい刻目を施すもの(19)、山形状になるような刻

目を施すもの(21)~(23)がある。特に(22)には、指圧状の押えつけた痕跡が認められる。

S-17群土器 (第67図, 図版46)

(29)は、繊維の混入が顕著に認められ、胎土、焼成からも、S-7群に近いが条痕をまったく残さず、平滑に調整をおこなっている。(30)は、すでに繊維の混入が認められず、器壁も非常に薄くなっている。

SZ-1群土器 (第67図, 図版46)

a類一 (31~34)

(31)は、内外面ともに条痕地を残して、押し引き施文をおこなう。(32)~(34)は、すでに条痕文をナデ消し、工具で押し引き施文をおこなっている。下層出土の押し引き文と同様、粟津湖底遺跡出土の早期末~前期初頭に位置づけられる土器群に類例を認めることができる。

Z-1群土器 (第68図, 図版47)

(35)~(42)は、いわゆる木島Ⅷ式と仮称されているもので、清水之上Ⅰ式と同様のものである。薄い器壁で、外面は、櫛歯状工具による浅い沈線が入念に施されている。(35)~(37)、(40)~(41)は、矢羽根状に沈線文を施す。(42)は、沈線間にやや間隔がひらく。また(38)~(39)は、口縁部と胴部の境をつまみ出したうえで、刻目を施す。(40)はつまみ出した突帯を上下二段にわたって巻貝の頭部で押しつけた施文を施す。(38)は、口縁端部に刻目を施す。

Z-2群土器 (第68図, 図版47)

a類 (43~44)

薄手の土器で、胎土中に雲母を多く含む。その爪形施文は、「D」字形となり、2条一単位のいわゆる「3」の字状を呈している。これは従来北白川下層Ⅰa式とされていたものであるが、鳥浜の細分により羽島下層Ⅱ式併行に相当するものであろう。

b類一 (45~46)

(45)は、「D」字を規則正しく施文しており、a類との差が認められる。(46)は、やや押し引いた「D」字状爪形を呈しており、いずれも鳥浜貝塚のH-Ⅳ、「D」字形Ⅰ類に当たり、北白川下層Ⅰa式に含められる。

Z-3群土器 (第68図, 図版47)

(47)は1.2cm長の大型爪形文をC字状に施す。

Z-4群土器 (第68図, 図版47)

a類一 (48~50)

(48)は、連続する爪形文の上部に細い棒状工具を左より右に刺突しており、刺突右側に押された隆起がある。(49)は、連続する爪形文の下方に、円棒状工具を左より右に刺突することによる「D」字状の刺突文を施している。いずれも、爪形は、1.6cmを計る。器面は、平滑に調整されている。(50)は、胴部より脹みをもたず、まっすぐに外反して口縁に至る鉢形をなすものと考えられ、連続する爪形文は、上下のみ痕跡を残し、中間部はほとんどわからない。また刺突は、左より右へ大胆に施しており、爪形文と見まがうほどである。

b類一 (51~54)

いずれも連続するC字状の爪形文を配する典型的な北白川下層Ⅱa式土器で、(51)は、連続爪形文帯が蛇行して、鎖状に施文されている。

Z-5群土器 (第68図, 図版47)

b類一 (55~56)

直線上のC字爪形文に割り付け線として平行沈線が施される類で、(55)は爪形上方の割り付け線はシャープであるが、下方には認められない。(60)は、下方にも認められるが、痕跡程度で浅く文様意識に欠ける。

Z-6群土器 (第68図, 図版47)

a類一 (57~60)

これらは、突帯上に刻目を施すもので、(57~58)は同一個体と考えられ口縁端部を押えて内外面に折りまげるように整形している。その突帯は、幅広く、断面も低く丸味を帯びる。これに対し、(59~60)は突帯の幅が狭いかわりに、断面は凸状となり、高くなっている。(60)は、口縁端部T字状となり、突帯間に丹を彩る。

b類一 (61~62)

突帯上に斜めに長い刻目を施しているもので、(61)は、刻目を2条の突帯上に羽状に施す。その刻目も深くするどい。(62)は、工具自体が細いもので、a類の刻目の長いものとして見ることができる。また(62)には、丹彩が認められる。

Z-7群土器 (第68図, 図版47)

a類一(63)

突帯貼り付け後、その端部より押し引いた形跡の認められる特殊突帯を施す。外面突帯以外は、縄文を施している。口縁端部に大きな刻目を施し、あたかも、小さな波状口縁を思わせる。また、口縁両面に肥厚した段を設け、縄文を施している。北白川下層Ⅲ式に相当するものであろう。

b類一 (64~65)

(65)は、底部を指で押え、五角形にしたものと思われ、典型的な大歳山式と考えられる。

Z-8群土器 (第68図, 図版47)

(66)は、口縁端部に面をもたせ平滑にしている。この口縁直下に刻目を施した突帯を施す。胴部の文様は、菱形あるいは幾何学的となる小さい爪形文を施し、この爪形文間のみ縄文を施している。下層の(146)と同様のものであろう。

Z-9群土器 (第68図, 図版47)

(73)は、口縁が波状となり、端部に刻目を施す。胎土中に多量の繊維を混入している。その施文は、よりもどしの異原体縄文を、口縁部で横位に、胴部で縦位に施している。これらは、関東地方の花積下層式より、関山式にかけての併行時期と考えられる。

Z-10群土器 (第68図, 図版47)

(67)~(72)はいずれも、縄文を密に施したもので、Z-4群~Z-6群に伴う土器と考えられる。(68)は、他に比して、縄文の原体がやや大きい。(70)は、縄文を縦位に羽状に施す。(71)~(72)は、典型的な羽状縄文である。

Z-11群土器 (第68図, 図版47)

(74)~(75)は、内外面ともに指頭によったと思われる圧痕調整を凸凹に施している。静岡県木島遺跡や愛知県清水之上貝塚より出土しており、清水之上Ⅰ式に併う粗製土器と考えられる。

C-1群土器 (第69図, 図版47)

b類 (76~77)

いずれも、撚りの粗い原体を使用した縄文を施している。(76)は、高い突帯を口縁直下に貼り付け、端部との間に、アルカ属の貝先頭部によって刺突をおこなう。口縁端部には逆C字状の爪形文を施す。(77)は、同じくアルカ属の貝による刺突をおこなっている。口縁部は肥厚しており、内面も肥厚部分のみ撚りの粗い縄文を施す。船元Ⅰ式に相当するものである。

C-2群土器 (第69図, 図版47)

a 類一 (78~80)

C-1群と同様、撚りの粗い縄文を器面全体に施す。このうえに波状もしくは鎖状の低い突帯を貼り、この突帯上に、太く大きな爪形を施している。(79)は、キャリパー形の鉢の口縁部と考えられる。口縁端部にも爪形状の刻目を施している。口縁端部内面にも幅1cmほどにわたって縄文を施す。

b 類 (81~82)

器面全体をおおっていた撚りの粗い縄文はなくなり、平滑な調整をおこない、小円形の圧痕を施す。(81)は、上部に縄文の一部が認められる。(82)は、突帯を貼っていたと考えられ、円形の刺突も竹管を真上から押ししたものと考えられる。

C-3群土器 (第69図, 図版47)

a 類一 (83~84)

撚りの粗い縄文を地文とし、その上に突帯を貼り、さらに、突帯および、その周辺に数条の平行沈線文を加えている。船元Ⅲ式の典型的なものである。

b 類一 (85)

地文の縄文は、a類と同様であるが、ここでは、すでに突帯を付さず、数条の平行沈線文だけとなっている。

c 類一 (86)

地文であった縄文はここでは用いていない。施文は竹管文を条線文状に施している。

C-4群土器 (第69図, 図版47)

C-3群ではみられなかった撚糸文を地文とし、竹管状工具による平行線文を施す。(87)~(88)とも、この沈線は波状になっている。(88)は、口縁直下に突帯を付し、端部との間に爪形文を施している。里木Ⅱ式に相当するものである。

a 類一 (89~90)

いずれも、突帯をその文様としている。(89)は、網目状に突帯を交差させており、突帯上に小さな刻目を施す。(90)は、頸部より胴部にかけての破片と思われ、頸部屈曲より下に突帯を貼りつけ、突帯間を棒状の工具により押し引いた形跡がある。(89)は、その類例を岐阜県沖田遺跡に見ることができる。沖田遺跡では、これを北陸の上山田式土器に似るとしており、船元Ⅱ式と併行時期にしている。(90)は、その類例を島崎Ⅱ式に見ることができる。東海地方では、島崎Ⅱ式を船元Ⅲ式と併行期にあるとしている。

C-8群土器 (第69図, 図版47)

b 類一 (91)

(91)は、深くえぐられた太い沈線によって文様帯を構成し、その内側に櫛状工具による浅い沈線を施す。口縁は波状になると考えられ、口縁直下の太い沈線内に押し引きによる爪形状文を施す。これは東海地方の咲畑式と考えられる。

K-1群土器 (第69図, 図版47)

(92)は、2条の沈線間に縄文を施し、他を磨消している。

K-3群土器 (第69図, 図版47)

(93)は、口縁波状になる深鉢と考えられる。頸部から口縁にかけてやや肥厚する。文様としては、同心円と

考えられる文様と2条の沈線による斜線文よりなり、磨消し縄文としている。これらは、北白川上層式と考えられるか、あるいは、K-1群土器に属するものとも考えられる。

K-5群土器 (第69, 図版47)

⑨4は、2条の沈線を施すもので、その沈線は非常に浅い。しかし、施文は丁寧で、K-5群に相当するものか。

B-3群土器 (第69図, 図版47)

c類-⑨5

⑨5は、口縁端部を面取りせず、施文も施さない、船橋期の土器で突帯は、口縁よりやや間隔をあけて、貼りつける。凸帯上の施文は「○」字状となる。

B-5群土器 (第69図, 図版47)

b類-⑨6

⑨6は⑨5同様口縁端部を丸くおさめ、施文しない。凸帯も口縁よりやや間隔をあけて施文する。ただし、突帯貼りつけのつまみ痕のみを残し、突帯上に施文は施さない。

B-6群土器 (第69図, 図版47)

⑨7~⑨8はいずれも、晩期の無文土器で、⑨7は、浅鉢である。⑨8は、口縁端部が平坦となる粗製の鉢である。

(7)第IV層黒色腐触土(スクモ層)より表土に至る包含層出土の縄文式土器

第IV層は厚く堆積した腐触土層で2層の分層が可能であるが、ここでは一層としておく。この層は、いわゆるスクモ層で植物の腐触によって形成されたものである。この層中からは縄文早期から晩期に至る土器はもちろんのこと、弥生以降の土器、須恵器も包含されていた。また、第IV層より上層は遺構の部分で前述したとおり、第III層が黒色粘土層、第II層が黄褐色土層、第I層が竹林による攪乱層であり、やはり縄文早期より須恵器に至る遺物が包含されていた。ここではこれら4層を一括して包含層とし、出土遺物は以下縄文式土器についてのみ記す。他の遺物は後述する。

S-1群土器 (第70図, 図版48)

a類-①

いわゆる格子目状の押型文土器片である。器壁は薄く、6㍉を測る。繊維の混入は認められない。

b類-②

大きな格子目の中に□状となる押型文が施されている。器壁は薄く6㍉を測る。繊維の混入は認められない。押型文土器中、焼成はもっとも堅緻である。

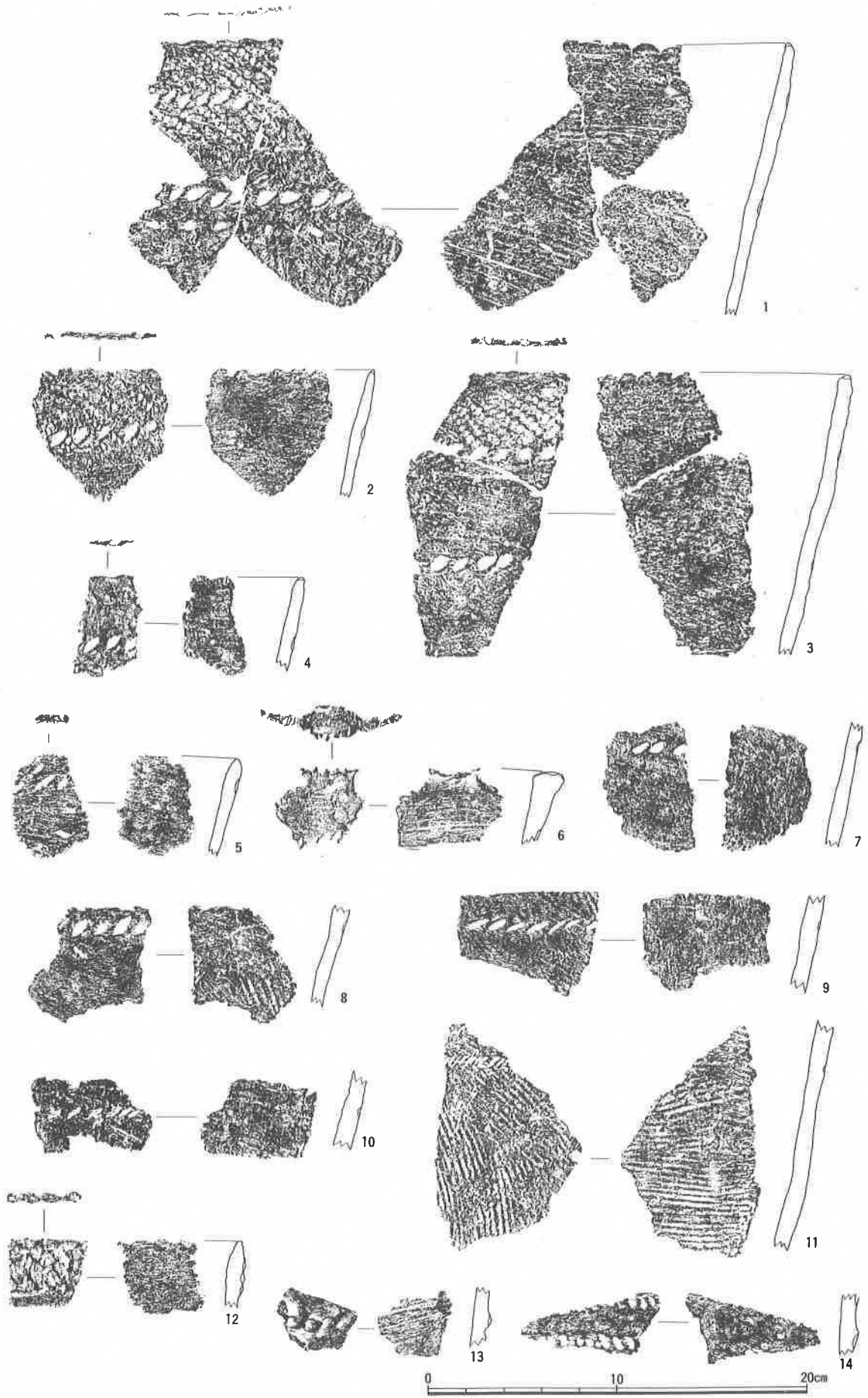
S-2群土器 (第70図, 第71図, 図版48, 図版49)

a類-③

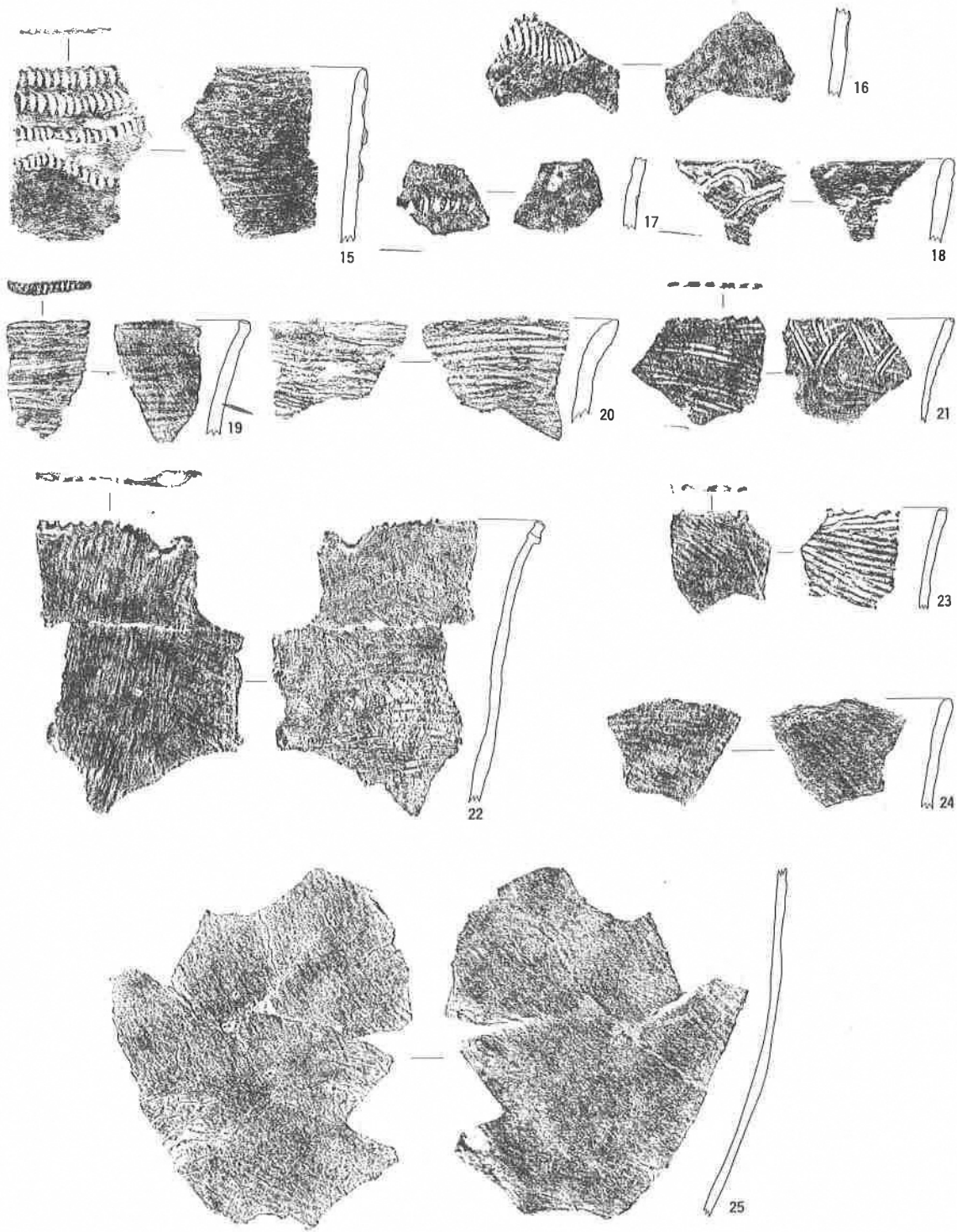
外面に楕円形押型文を施す、内面も口縁下2.6cmまで楕円形押型文を施している。これは施文原体の一単位長さではないかと考えられる。外面の押型文もこの長さの部分で施文の乱れが認められ、やはりここで原体を転がし変えたと思われる。このように内外面に楕円形の押型文が認められる例は、愛知県先苅貝塚出土土器がある。器形はやや口縁端部が外反する。楕円の長さは7㍉×5㍉で、器壁は7㍉を測る。繊維は認められない。

b類-(4~5)

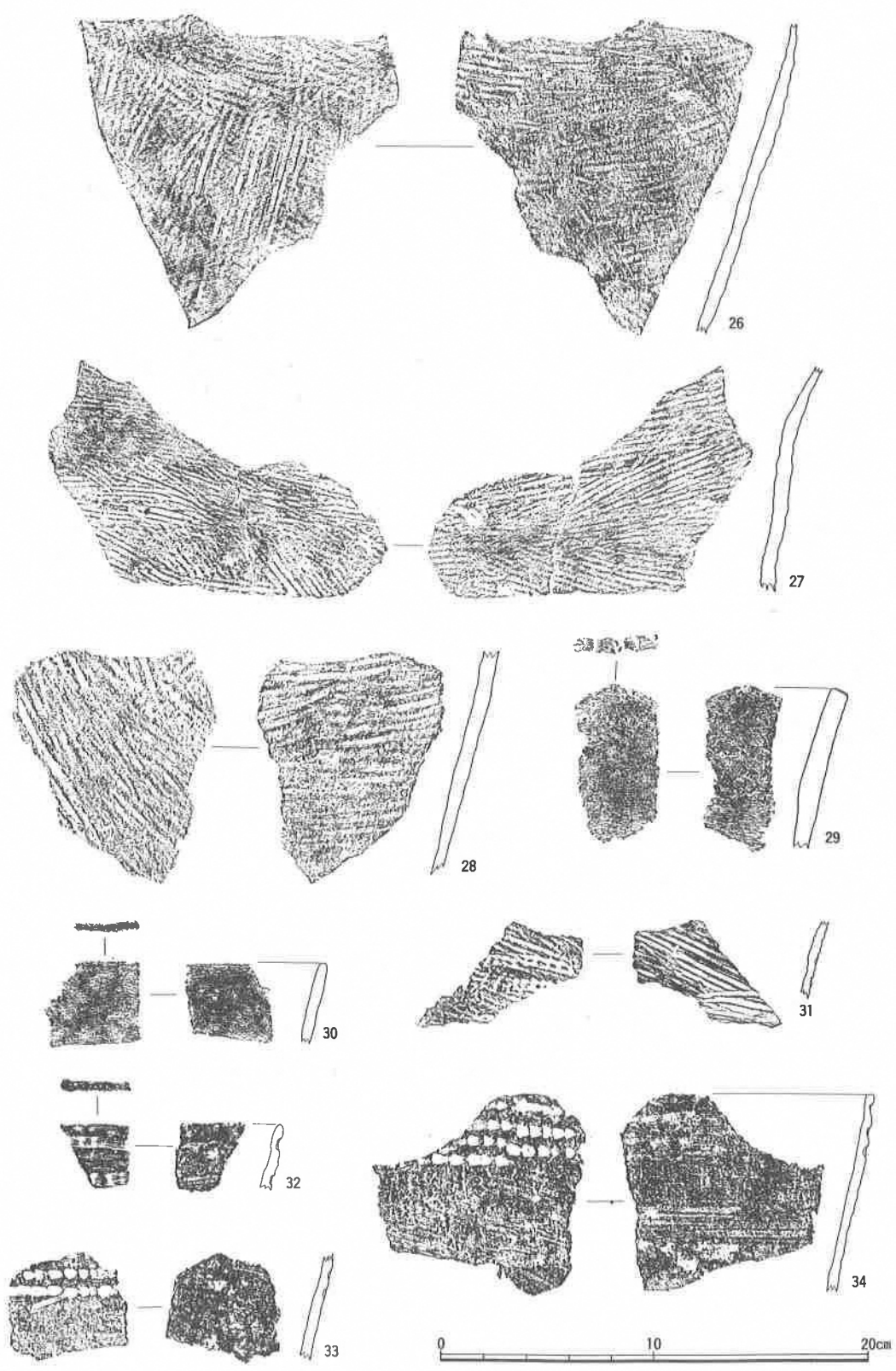
いずれも外面に楕円形の押型文を施す。楕円は8㍉×5㍉である。口縁部内側には端部より2.7cmにわた



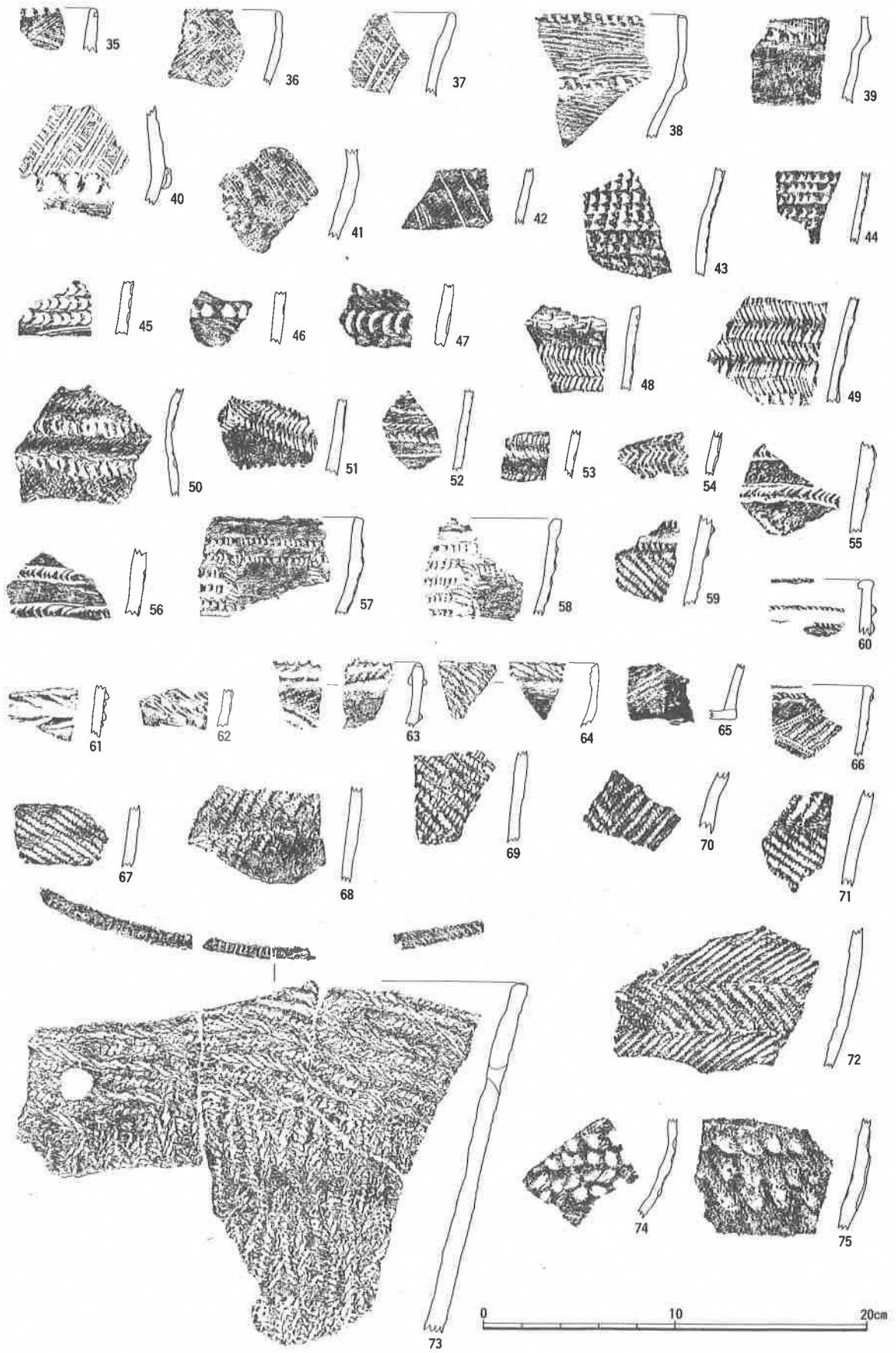
第65図 Aトレンチ第V層出土縄文式土器(早期)実測図(1)



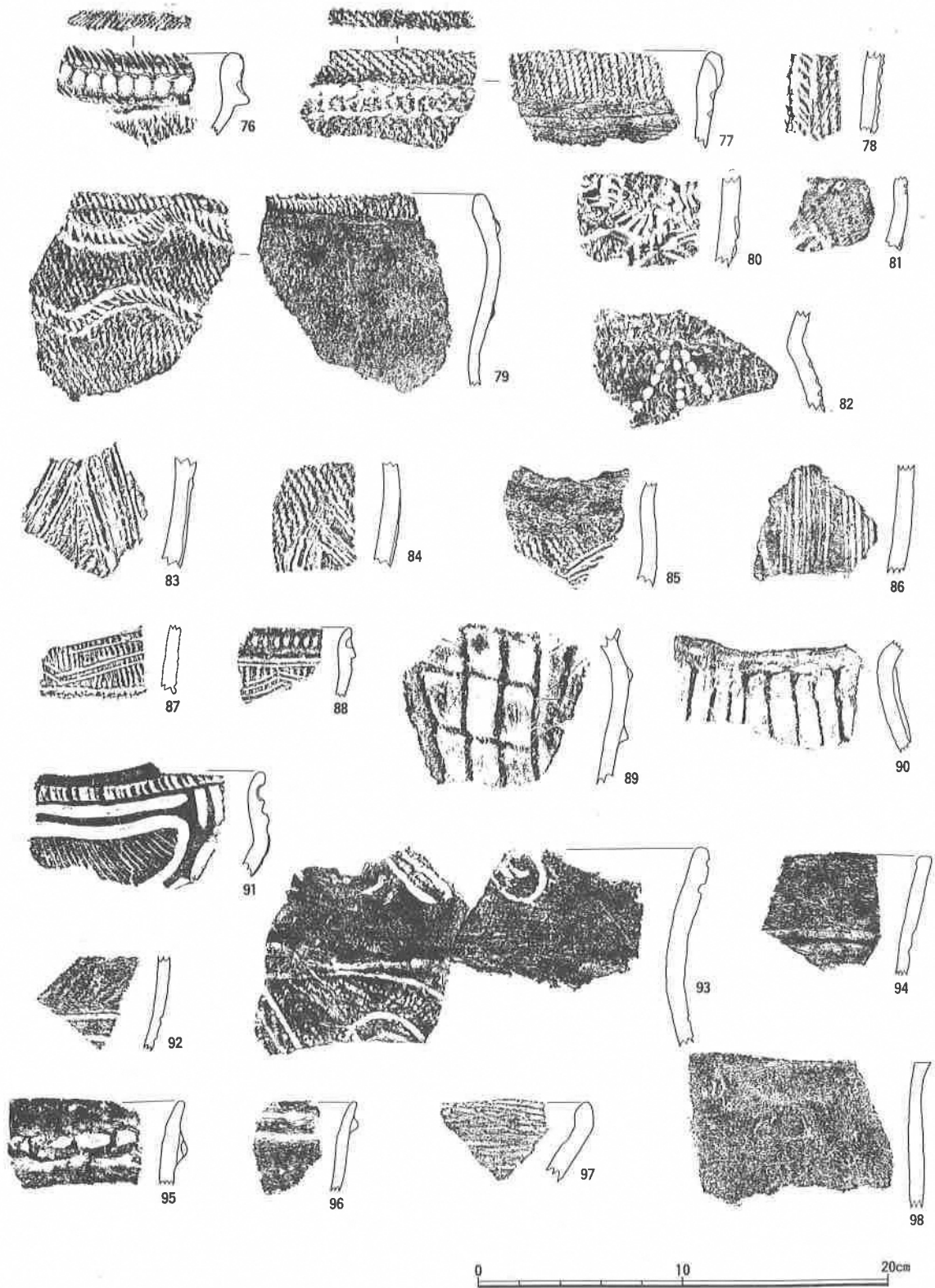
第66図 A トレンチ第V層出土縄文式土器（早期）実測図(2)



第67図 A トレンチ第V層出土縄文式土器（早期、早期末～前期初頭）実測図(3)



第68図 A トレンチ第V層出土縄文式土器（前期）実測図(4)



第69図 Aトレンチ第V層出土縄文式土器(中・後・晩期)実測図(5)

り、縦位に平行する沈線（原体条痕）が垂下している。この類は岡山県黄島貝塚出土下層土器に似るが、黄島下層式の場合、平行沈線下にも楕円文が施されるが、ここでは不明である。また黄島下層式の場合楕円の粒が4～5%を測り、8%を超えるものはない。しかし形式的には次に見る高山寺式とは明らかに系統が違う。ここでは黄島下層式に併行するものと考えたい。

c 類—(6)

外面に楕円形の押型文を施し、内面には斜行沈線を施す、いわゆる高山寺式土器と呼べるものである。しかし高山寺式の器壁が1～1.5cmと厚いの比して、この土器はわずかに6%しかない。繊維の混入は認められない。外面の楕円文はまばらで、7%×7%と円形に近い。

d 類—(7～9)

外面の楕円文は磨滅が激しく、観察は不可能である。しかし内面の斜行沈線が明らかなため、S-2群土器にまちがいない。内面の斜行沈線は断面が三角形に近く、非常にシャープな施しがなされている。(8)の沈線凹部にさらに1%程の沈線が認められるのは、先の鋭い棒状工具を強く押し引いたためであろうか。

e 類—(10～13)

d 類同様、外面の楕円文は(12)を除き、磨滅が激しく不明瞭ではあるが、(12)の場合楕円文は9%×5%で規則正しく施文されている。内面の斜行沈線は凸部の盛りあがりがなく、棒状工具で施したものであろう。

f 類—(14～15)

やはり外面の楕円文は磨滅が激しい。(14)に関しては、1.2cm×6%の楕円文が認められる。内面の斜行沈線はe 類に似るが、沈線間の畝部はd 類に近く、盛りあがり状になるが、その断面は三角形ではなく、丸味を帯びている。

g 類—(16～23, 25)

外面の楕円文はやはり磨滅が激しく不明瞭で、(22)以外はわからない。(22)は8%×6%で回転が重複しているため、いびつな施文となっている。内面の斜行沈線は彫りが浅く、沈線間の畝も扁平である。福井県破入遺跡で「B棒状」と呼ばれるものに相当するものか。

h 類—(24)

内面の斜行沈線は、g 類に属するものであるが、外面にかすかに残る楕円形の押型文は非常に大きく、1.8cm×1.2cmを測る。福井県破入遺跡出土の2 類や、愛知県先苧貝塚出土の1 類4 種に相当するものであろう。

i 類—(26～37)

外面に楕円形の押型文を施しており、S-3群に含めたが、高山寺式の特徴とされる内面の斜行沈線がまったく施されていない。外面の押型文は3通りあるようで、1)密接に施文されているもの—(28)～(30)、(33)、(37)。2)まばらに施文されているもの—(26)～(27)、(34)～(36)。3)菱形状になるもの—(31)～(32)がある。これら内面に斜行沈線を施さないi 類は、器壁が厚いもの—(26)～(27)、(37)と、薄いものがある。

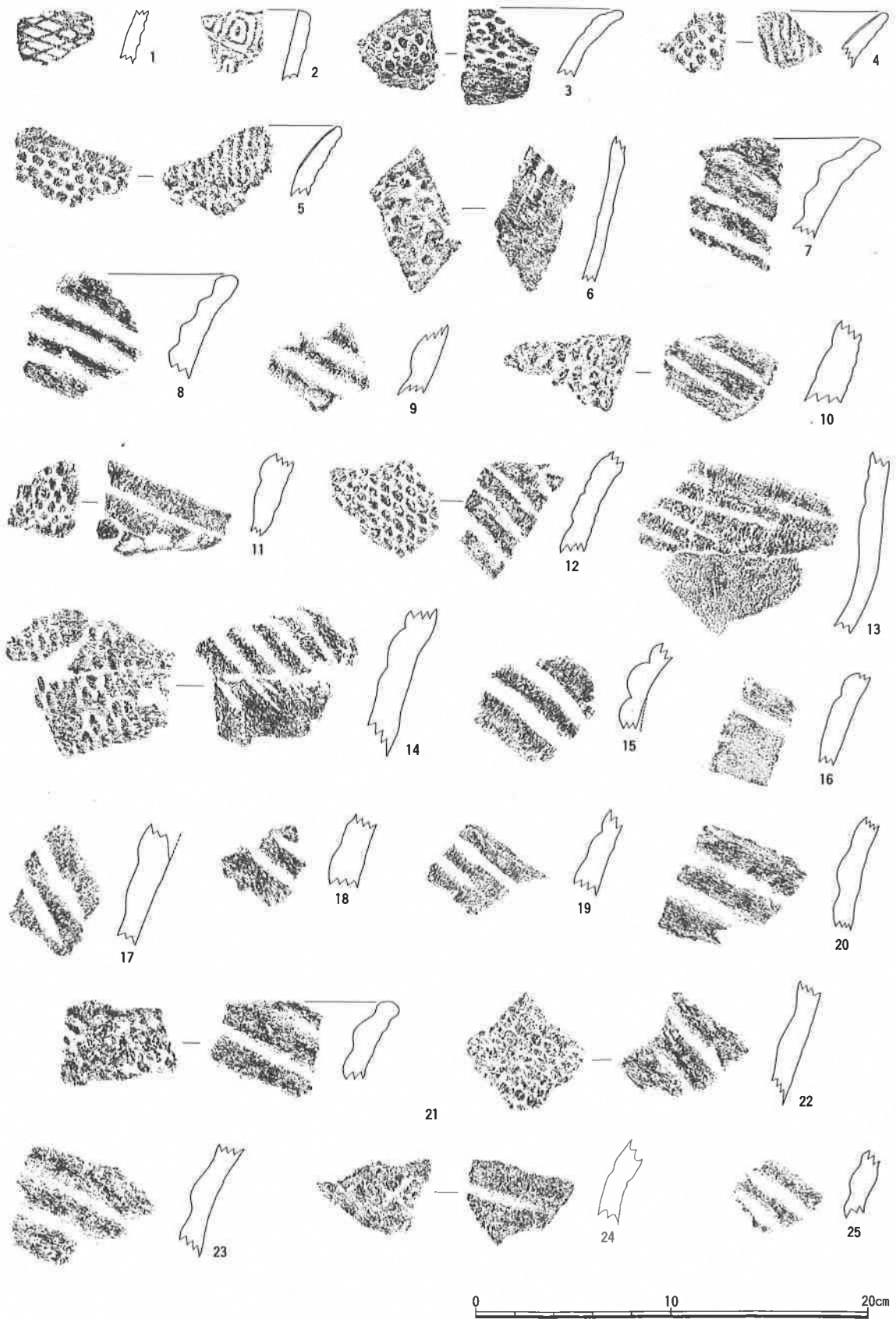
S-3 群土器 (第71図, 図版49)

a 類—(38)

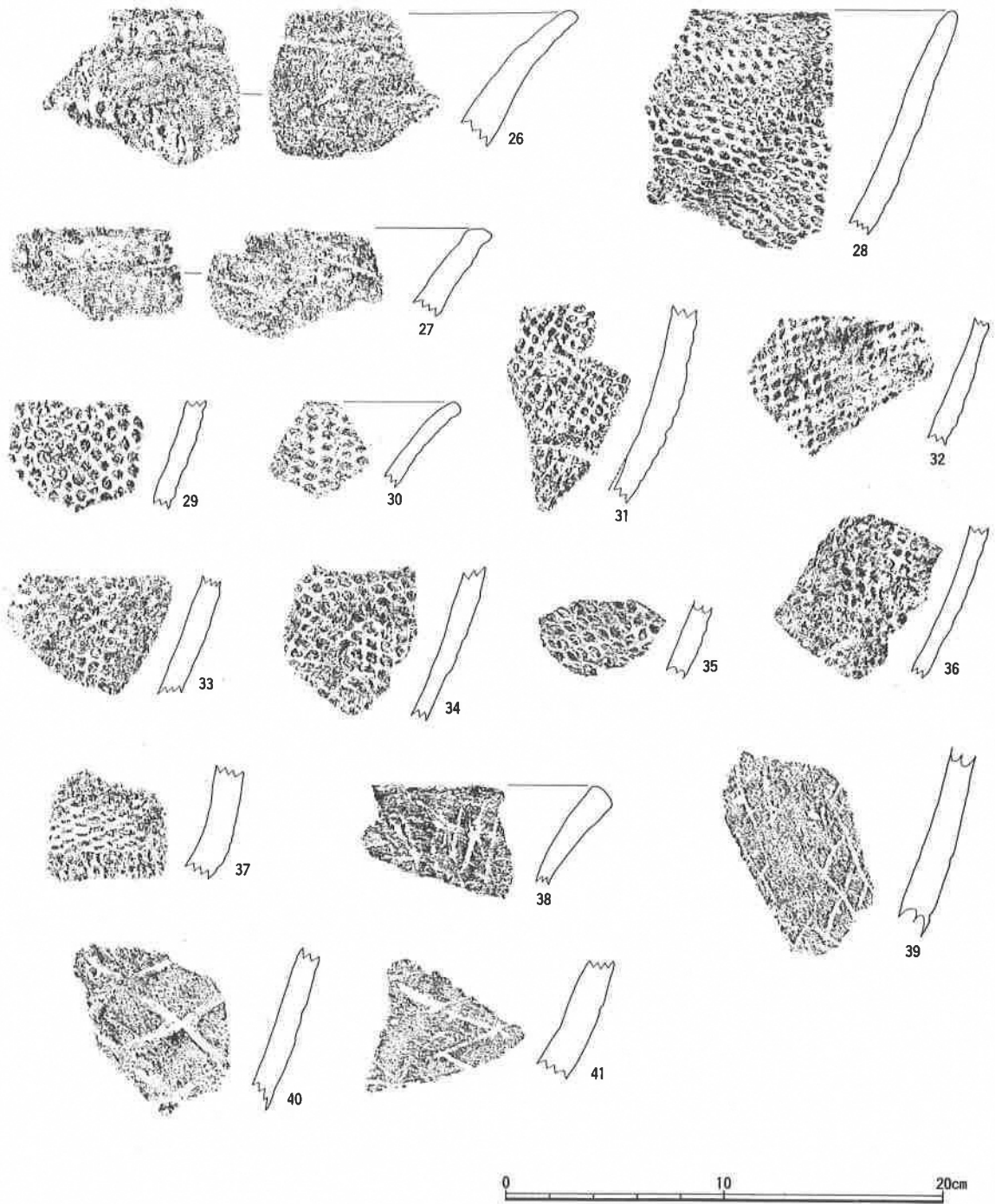
外面に撚糸文が施文されているもので、このa 類は縦位に撚糸文を施すものである。口縁はほとんど外反しない。和歌山県高山寺貝塚、愛知県先苧貝塚で押型文に伴って撚糸文が出土していることから、S-2群に併行するものと考えられる。

b 類—(39～41)

格子状に交差する撚糸文を施したもので、大きな格子状となるもの—(39)～(40)と、菱形状をなすもの—(41)が



第70図 Aトレンチ包含層出土押型文土器実測図(1)



第71図 Aトレンチ包含層出土押型文土器実測図(2)

ある。(40)の器壁断面にチャート製の剥片が混入しており、土器製作段階で土器に混入したものと考えられる。(41)は撚糸施文にややばらつきがある。

S-4群土器 (第72図, 図版50)

a類-(42)

細い沈線を施し、その沈線内に、細い竹管文が刺突されている。胎土中には、繊維の混入が認められる。

関東地方の鵜ヶ島台式土器と考えられる。

S-5群土器 (第72図, 図版50)

a 類一 (43~49)

(43)~(49)は、口縁と胴部に明瞭な屈曲を有する。施文は、屈曲部より上部におこなう。その施文は沈線を幾何学的に配したもので、篋状工具によるもの(43)~(45)と指頭によるもの(46)~(49)に大別できる。地文は沈線だけのもの(43)と、沈線と縄文のもの(44), (49)と、沈線と刺突のもの(46), (48)と、沈線、縄文、刺突文を併用するもの(45), (47)がある。口縁は(45)に関して波状口縁となり、端部は平坦面となり、端部外面よりのみ刺突をおこなっている。器壁はいずれも厚く、繊維の混入も認められる。(49)の弧状を描く2本の沈線は、典型的芽山下層式の施文手法である。

b 類一 (50~51)

a 類に比して、屈曲は弱まっている。屈曲部に爪形文を施している。ここでは沈線文が非常に幅広くなっている。(50)は口縁端部に刻目を施す波状口縁となる地文に縄文を施し、この縄文は胴部にも及んでいる。

S-6群土器 (第72図~第76図, 図版50~図版52)

a 類一 (53~69)

ここではすでに屈曲は認められず、(63), (65)~(67)にわずかに屈曲の痕跡が認められるのみである。しかし、本来S-5群で屈曲していた部分に爪形文を配し、その系譜を認めることができる。施文は、この屈曲部に相当するであろう爪形文より口縁にかけて縄文を施している。(54)~(55), (57), (69)は、口縁直下にもう1条の爪形文を配列している。口縁には、皿状突起がつくもの(53), (64)と水平なもの(54), (59), (69)とがあるが、いずれも端部には刻目を施す。屈曲部に相当する爪形文より下段(胴部)は、すべて条痕で調整されている。(63)は、例外で下段にも縄文を施す。器壁は、概ね厚く、胎土中に繊維を含んでいる。ただし、(58)は、器壁が他のものにくらべて厚くなっている。

b 類一 (70~97)

a 類同様ほとんど屈曲は不明である。(70)~(72), (79)~(80)にわずかながら屈曲の痕跡を残す。これらを含めてこの類も、a 類と同じく、屈曲部に相当する部分に、水平に爪形文を配する。この爪形文より下段は、条痕文のみであり、上段口縁にかけてまでも地文は条痕文である。この類の特徴は口縁端部にそって水平な爪形文を配し、屈曲部に相当する爪形文との間に波状に爪形文を配することである。

この爪形文には大きなものと小さなものの2種がある。口縁は、皿状突起のつくもの(71)~(73), (86), (88), (90), (94)~(96)があり、特に(95)の突起は異様に大きい。波状口縁となるものに(73), (87), (89), (92)~(93)があり、水平な口縁となるものに(70), (75)~(78)がある。口縁端部には、すべて刻目が施されている。内面に関しては、条痕文であるが、(91)~(97)には、口縁直下(外面の第一列目の爪形文と同じ位置)に爪形文を施している。

S-7群土器 (第76図~第81図, 図版52~図版54)

a 類一 (98~145)

条痕文地に、爪形文を水平に2段ないし3段施すもので、プロポーシオンは、底部より直に口縁まで至るもので、S-5群、S-6群に見られる屈曲は、もはや存在しない。口縁は、水平になるもの(98)~(123)と皿状突起を付けるもの(124)~(129)、波状になるもの(130)~(136)の3タイプがある。口縁端部には、すべて刻目を施している。内面は、口縁直下に爪形文を1列施すもの(102), (109)~(121), (124), (127), (129), (131), (133)がある。また条痕文が非常にはっきりしたものと、ナデ消されているものがある。器

壁は厚く、繊維の混入も多量に認められる。

b 類一 (146)

2条の爪形文列を横位に直線的に刻み、あたかも一直線をなすかのように施文している。口縁は、刻目を有さず、波状もしくは、突起がつくものである。内面の爪形文も直線状に近い。

c 類一 (147)

地文としての、条痕文はナデられており、その痕跡をとどめるのみである。爪形文の原体が縄文であり、その縄文原体を押圧して、爪形文様としている。

d 類一 (148～153)

条痕文地にアナダラ属の貝殻腹縁を刺突工具として連続爪形文としている。(153)は、口縁端を貝で押えつけている部分があり、皿状突起状となっている。

h 類一 (154)

条痕地に爪形文を施すのは、a 類と同じであるが、この爪形文の上部に直線上に縄文原体を押しつけているようである。

底部 (155～157)

(155)～(156)は、乳頭状底部と呼ばれる尖底土器である。器壁の厚さ、焼成、胎土、繊維の混入などより、S-7群に伴う土器の底部であろう。(157)は、砲弾の先端状の底部でやや趣を異にする。器壁も薄く、繊維の混入も少ない。胎土は精選されている。

S-8群土器 (第82図、図版55)

a 類一 (158～159)

(158)は、口縁直下に突帯を貼りつけ、その突帯を上下より交互に刻目を施す。繊維は、顕著に認められる。(159)は、口縁端部が部分的に肥厚し、突起状をなし、これを上下より刻目を施す。胴部の突帯は、器面を一周せず、部分的に貼り付けられたものである。この部分的な突帯は、山ノ上式に見ることができるので、このS-8群 a 類に含めたが、突帯の刻目は、突帯端部に垂直に一方より施されているのみであり、S-8群中に入れるには、疑問も残る。

S-9群土器 (第82図、図版55)

a 類一 (160～161)

断面が高い突帯を貼り付け、その端部に大きな刻目を施す。特に(160)は、突帯を菱形にし、口縁も、皿状突起としている。口縁端部は、内外両面より刻目を施す。繊維の混入はまだ多い。

S-10群土器 (第82図、図版55)

a 類一 (162～163)

爪形文を羽状に施しているもの。その施文も密である。内外面ともに平滑に調整されている。繊維の混入は、認められる。

b 類一 (164～167)

突帯がなく、爪形文を2条ないし3条施す、この爪形文は、波状になる場合も多い(164)～(165)。

c 類一 (168～173)

非常に扁平な突帯がつく。この突帯をつぶすように、密に爪形文を施す。この突帯も、爪形文も波状になることが多い。口縁端部には、刻目が施される(169)、(171)。なお(170)、(173)には、丹塗りの痕跡が認められる。

S-11群土器 (第83図, 図版55)

(174)~(179)の器壁は、S-4群~S-10群までのいわゆる条痕文土器より薄くなり、内外面も条痕がほとんど認められず、平滑に調整されている。繊維の混入もほとんど認められない。文様は(174)が規則正しく爪形を3条施している他は、小さな爪形文がまばらに施されているのみである。

S-12群土器 (第83図, 図版55)

(180)~(181)は、条痕を波状に表現して、文様化としている。(180)は、内面も波状の条痕文を施す。口縁は、平口縁で、(180)の端部には、縄文原体を押しあてたような刺突文がある。又(181)の端部には、刻目文がある。

S-13群土器 (第83図, 図版55)

(182)~(185)は、低い扁平な突帯を斜位に、あるいは、鎖状にはりつけ、その後、器面全体を櫛状工具で引っかいている。(183)の口縁端部には、貝の腹縁による刺突文が見られる。塩屋式に相当するものである。

S-14群土器 (第83図, 図版55)

e類一 (186~188)

ここにあげた土器は、所属不明の土器である。繊維の混入は、すべてに見られる。3点とも、その施文は、竹管状工具によったものと考えられ、(186)は、工具によって太い沈線は無意識に引く。残された畝部は隆帯状を呈している。(187)は竹管状工具を10~5㍓の長さに押し引きながら刺突している。(188)は、押し引かず、竹管状工具を寝かせながら刺突を加え、その文様は、三角形となる。いずれも、早期末葉の土器である。

S-15群土器 (第83図, 図版55)

a類一 (189)

斜位に縄文を施したもので、口縁付近のみに施文する。胴部には、条痕が残る。口縁端部に刻目を施す。S-6群に併行するものと考えられる。

b類一 (190)

羽状の縄文を三段にわたって施す。器壁は厚く、繊維を含んでおり、早期末に位置づけられよう。

c類一 (191)

縄文を横位、縦位に施し、文様構成をとる多状縄文系の土器で、繊維を含み、早期と考えられるが、あるいは、関東の前期花積下層に相当するのかもしれない。

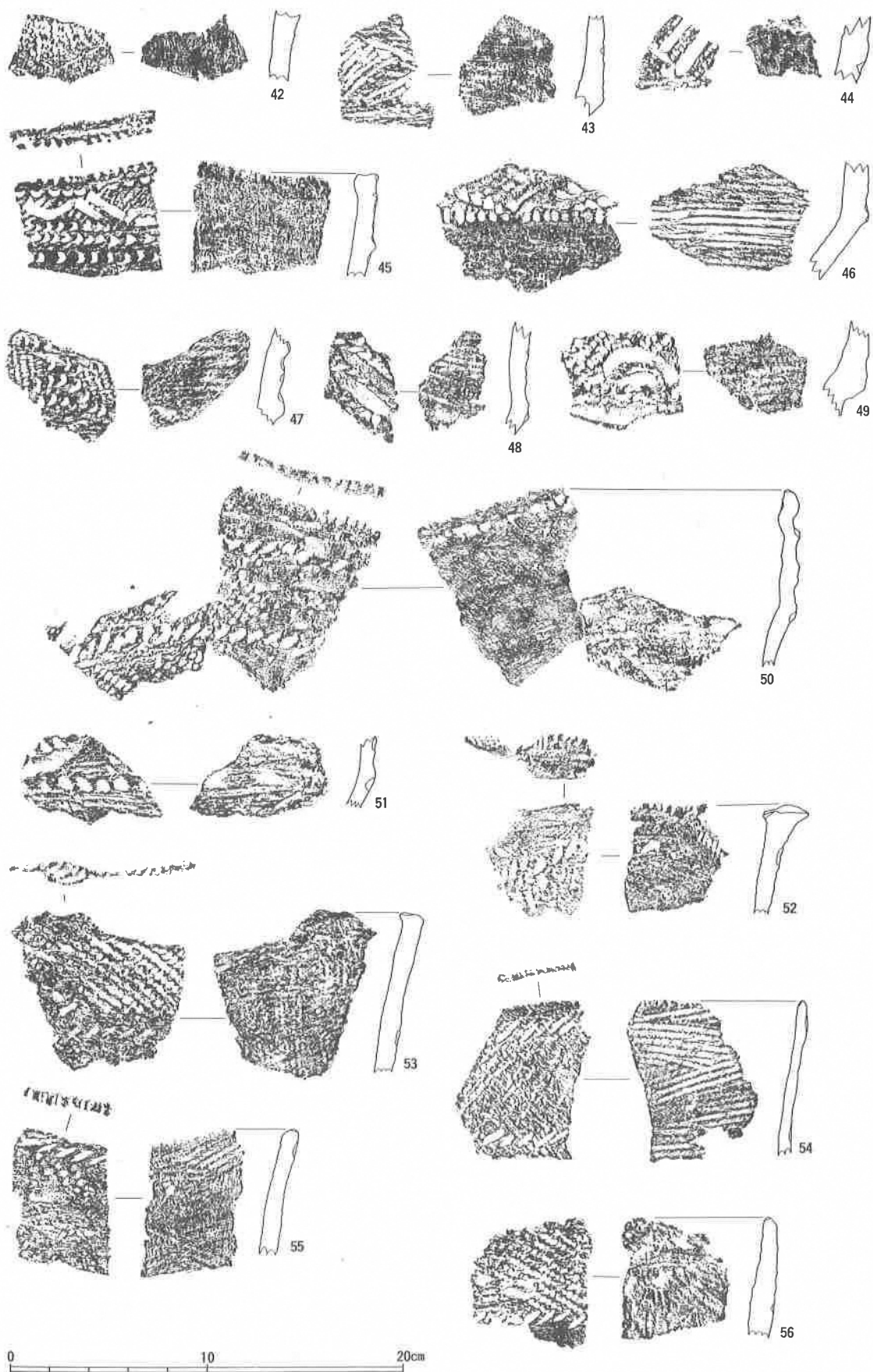
d類一 (192)

縄文原体を押圧していると思われる。内面には条痕を残す。繊維もわずかに見られる。

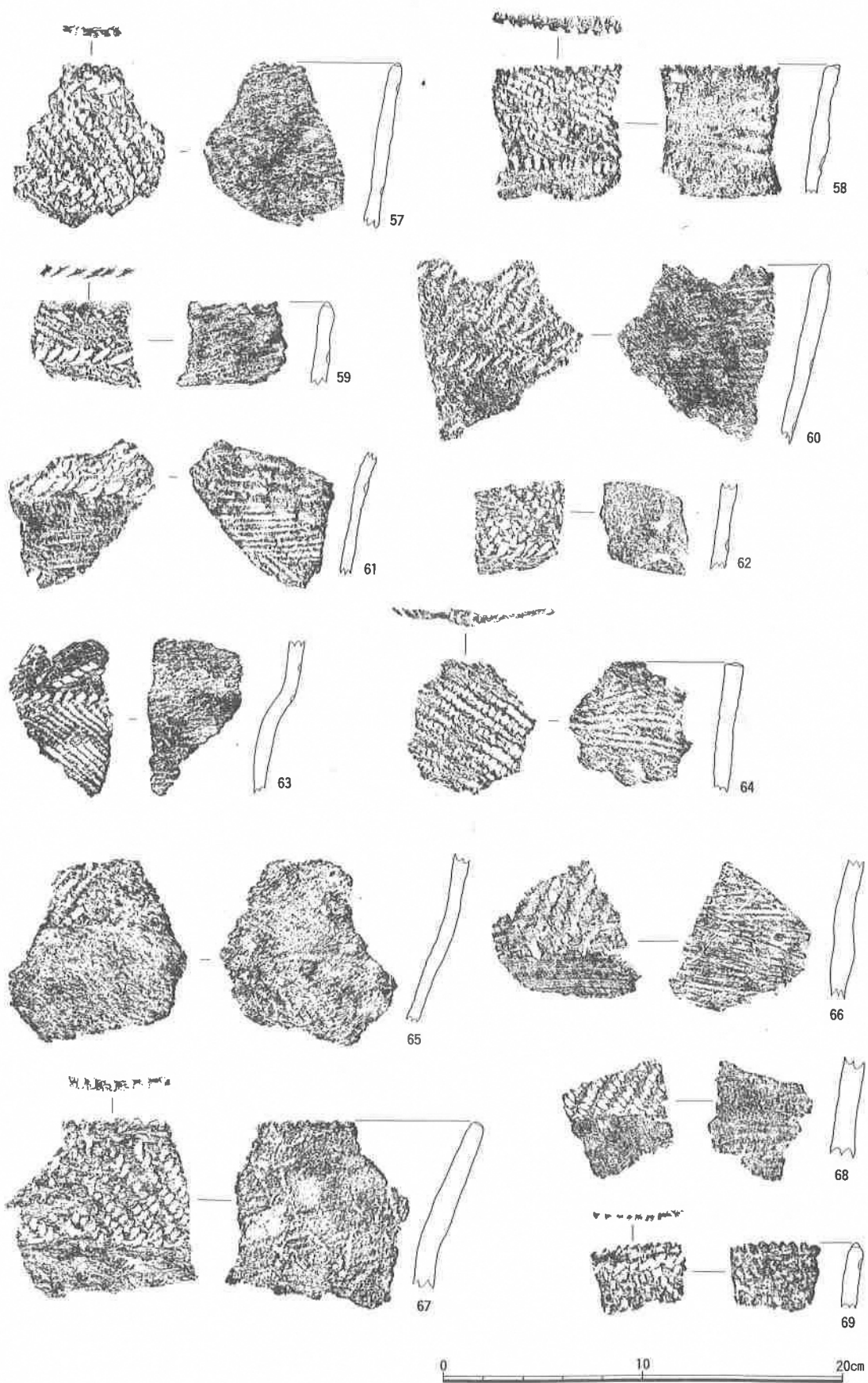
S-16群土器 (第83図, 第84図, 図版55, 図版56)

(193)は、直径12cmの小型の土器で、繊維を含み、条痕文を内外に残す。口縁端部には、刻目を施している。S-6群~S-7群に伴うものか。(194)~(205)に関しては、下層と同様、2タイプに大別できる。まず胎土に雲母を含み、器壁はやや薄く、繊維があまり認められないものとして、(194)~(196)、(199)~(200)、(202)~(203)、(205)があり、器壁がやや厚く、雲母が認められず、繊維が多量に含まれるものとして、(197)~(198)、(201)、(204)がある。

口縁の残るものの端部には、(199)、(203)を除いて、すべて刻目が施されている。器形は、底部より直に立ち上って口縁に至るものと思われるが、(199)は頸部に屈曲をもっている。



第72図 A トレンチ包含層出土縄文式土器（早期）実測図(3)



第73図 A トレンチ包含層出土縄文式土器（早期）実測図(4)